

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 17

第40次調査

2020

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

口絵 1 発掘調査区



調査区遠景(南より)



調査区全景(東より)

口絵2 出土遺物



バンドコと一括収納された陶磁器



漆塗碗



油煙墨



北国船模型

序 文

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業は、昭和43年に朝倉館跡の調査に着手して以来現在に至るまで、約50年間にわたり行われてきました。これまでの調査により、戦国期の城下町の構造や当時の生活・文化の様相が徐々に明らかになってきております。

本報告書は、一乗谷を貫く一乗谷川の左岸、字奥間野で実施した第40次発掘調査(昭和55・56年)の成果をまとめたものです。隣接する字赤淵・吉野本を含むこの地区一帯は遺構が良好に残っており、これまでの全面的な発掘調査によって、一乗谷における町並みの様相が最も解明された場所のひとつとなっています。遺物も多種多様で、特に第40次発掘調査では、「金隠」の発見により石積施設が便所であることを初めて確定させました。その他、油煙墨やガラス皿、北国船の模型など、貴重な遺物が多数出土しています。

最後になりますが、事業実施から報告書刊行に至るまで、文化庁をはじめ関係各位、地元の皆様に多大なご支援とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

令和2年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 向出 宏 二

例 言

- 1 本書は福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館が、特別史跡一乗朝倉氏遺跡における計画的な発掘調査の結果を報告するものであり、第17冊目にあたる。発掘調査事業概要は1で報告する。
- 2 本書で報告の調査は、国庫補助事業として、福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館が福井県福井市城戸ノ内町宇美開野で実施したものである。
- 3 発掘期間は昭和55(1980)年7月1日～昭和56(1981)年10月13日、担当者は水野和雄、岩田隆である。概要については「特別史跡一乗朝倉氏遺跡Ⅱ 昭和55年度発掘調査整備事業概要」および「特別史跡一乗朝倉氏遺跡Ⅲ 昭和56年度発掘調査整備事業概要」で報告している。
- 4 本書作成のための遺物整理作業は平成28・29・令和元年度に行った。その間、県の機構改革により事業主体は変化している。作業と事業主体者は以下のとおりである。

平成28年度	出土遺物の接合・復元・実測・トレース	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
平成29・令和元年度	出土遺物の実測・トレース・本書刊行	福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館
- 5 本書の編集・執筆は田中祐二(当館主任)が行い、館員全員がこれを補佐した。なお、内容の多くについては上記概報およびその後の研究成果に依拠する。
- 6 遺構写真は発掘担当者が撮影した。遺物写真については月輪泰(当館副館長)が撮影し、その他、過去に当館調査員が撮影したものも一部使用した。遺構・遺物実測図の作成は当館調査員と整理作業員が行った。
- 7 本書の調査区全体図・遺構詳細図は概報掲載の図を一部改変して使用した。なお、原図はアジア航測株式会社へ委託して作成したものである。また、写真図版には、航空測量の際に撮影した上空写真も含まれる。
- 8 遺物観察表・巻末図・巻末写真の遺物番号は符合する。写真は縮尺不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。X・Y座標値は国土方眼座標系第Ⅵ系(日本国地系)に基づく。
- 10 本書で用いた遺構の略記号は次のとおりである。

SA:土塁・塀・柵	SB:建物	SD:溝・濠	SE:井戸	SF:石積施設	SJ:石段	SK:土坑
SS:道路・通路	SV:石垣	SX:その他				
- 11 遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編 新版「標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修による。
- 12 本書に掲載した遺物と調査の際に作成した図面・写真は、福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館に保管してある。
- 13 本書の作成にあたり、次の方々からのご助言・ご指導を頂いた。(敬称略・五十音順)
岩田隆、小野正敏、久保智康、内藤直子、橋本久和、水野和雄
- 14 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館および福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

I 事業概要	1
1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 調査の方法および組織	5
II 調査の概要と経過	7
1 調査の概要	7
2 調査の経過	8
3 調査区の設定	8
日誌抄	9
III 遺 構	11
IV 遺 物	21
V ま と め	53

図 版 目 次

口 絵

口絵1 発掘調査区	口絵2 出土遺物
【上】 調査区遠景(南より)	【上】 バンドコト一括収納された陶磁器
【下】 調査区全景(東より)	【中】 左：漆塗碗 右：油煙墨
	【下】 北国船模型

挿 図

挿図1 特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡調査地略図	4	挿図6 区画割図	11
挿図2 第40次調査区周辺地形図	7	挿図7 SF1617東壁	20
挿図3 床土出土遺物の取り上げ区画	8	挿図8 釣瓶696出土状況	30
挿図4 作業風景写真	9	挿図9 折敷938出土状況	33
挿図5 グリッド設定図	10	挿図10 遺構概念図	54

卷 末 図

- | | | | |
|------|------------------------------|------|--|
| 第1図 | 上層遺構面全体図 | 第35図 | 出土遺物 C区Ⅱ遺構面(7) |
| 第2図 | 下層遺構面全体図 | 第36図 | 出土遺物 D区Ⅰ遺構面(1) |
| 第3図 | 遺構詳細図 A区 | 第37図 | 出土遺物 D区Ⅰ遺構面(2) |
| 第4図 | 遺構詳細図 B1区 | 第38図 | 出土遺物 D区Ⅰ遺構面(3) |
| 第5図 | 遺構詳細図 C区 | 第39図 | 出土遺物 D区Ⅰ遺構面(4)、
D区Ⅱ遺構面(1) |
| 第6図 | 遺構詳細図 B2区 | 第40図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(2) |
| 第7図 | 遺構詳細図 D1区 | 第41図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(3) |
| 第8図 | 遺構詳細図 D2区 | 第42図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(4) |
| 第9図 | 溝石立面図 | 第43図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(5) |
| 第10図 | 上層断面図 | 第44図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(6) |
| 第11図 | 出土遺物 A区Ⅰ遺構面(1) | 第45図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(7) |
| 第12図 | 出土遺物 A区Ⅰ遺構面(2) | 第46図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(8) |
| 第13図 | 出土遺物 A区Ⅰ遺構面(3)、
A区Ⅱ遺構面(1) | 第47図 | 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(9)、
E区Ⅰ遺構面(1) |
| 第14図 | 出土遺物 A区Ⅱ遺構面(2) | 第48図 | 出土遺物 E区Ⅰ遺構面(2)、
E区Ⅱ遺構面 |
| 第15図 | 出土遺物 B区Ⅰ遺構面(1) | 第49図 | 出土遺物 その他Ⅰ遺構面(1) |
| 第16図 | 出土遺物 B区Ⅰ遺構面(2) | 第50図 | 出土遺物 その他Ⅰ遺構面(2) |
| 第17図 | 出土遺物 B区Ⅰ遺構面(3) | 第51図 | 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(1) |
| 第18図 | 出土遺物 B区Ⅰ遺構面(4)、
B区Ⅱ遺構面(1) | 第52図 | 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(2) |
| 第19図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(2) | 第53図 | 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(3) |
| 第20図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(3) | 第54図 | 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(4) |
| 第21図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(4) | 第55図 | 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(5)、
Ⅲ遺構面(1) |
| 第22図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(5) | 第56図 | 出土遺物 Ⅲ遺構面(2)、
床土・表採・不明(1) |
| 第23図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(6) | 第57図 | 出土遺物 床土・表採・不明(2) |
| 第24図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(7) | 第58図 | 出土遺物 床土・表採・不明(3) |
| 第25図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(8) | 第59図 | 出土遺物 床土・表採・不明(4) |
| 第26図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(9) | 第60図 | 出土遺物 銭貨 A区Ⅰ遺構面、
A区Ⅱ遺構面、
B区Ⅰ遺構面、
B区Ⅱ遺構面(1) |
| 第27図 | 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(10) | 第61図 | 出土遺物 銭貨 B区Ⅱ遺構面(2) |
| 第28図 | 出土遺物 C区Ⅰ遺構面(1) | 第62図 | 出土遺物 銭貨 B区Ⅱ遺構面(3) |
| 第29図 | 出土遺物 C区Ⅰ遺構面(2)、
C区Ⅱ遺構面(1) | 第63図 | 出土遺物 銭貨 B区Ⅱ遺構面(4)、 |
| 第30図 | 出土遺物 C区Ⅱ遺構面(2) | | |
| 第31図 | 出土遺物 C区Ⅱ遺構面(3) | | |
| 第32図 | 出土遺物 C区Ⅱ遺構面(4) | | |
| 第33図 | 出土遺物 C区Ⅱ遺構面(5) | | |
| 第34図 | 出土遺物 C区Ⅱ遺構面(6) | | |

			B区Ⅲ遺構面、
			C区Ⅰ遺構面
第64図	出土遺物	銭貨	C区Ⅱ遺構面(1)
第65図	出土遺物	銭貨	C区Ⅱ遺構面(2)、
			C区Ⅲ遺構面、
			D区Ⅰ遺構面(1)
第66図	出土遺物	銭貨	D区Ⅰ遺構面(2)
第67図	出土遺物	銭貨	D区Ⅰ遺構面(3)、
			D区Ⅱ遺構面(1)

第68図	出土遺物	銭貨	D区Ⅱ遺構面(2)、
			E区Ⅰ遺構面、
			E区Ⅱ遺構面
第69図	出土遺物	銭貨	その他Ⅰ遺構面、
			その他Ⅱ遺構面(1)
第70図	出土遺物	銭貨	その他Ⅱ遺構面(2)、
			その他Ⅲ遺構面、
			床土・表採・不明

巻末写真

PL.1	調査区	(1)調査区遠景	(38)SF1742	(39)SX1840
PL.2	調査区	(2)上層遺構面全景	(40)SS1728	
		(3)下層遺構面全景		
PL.3	調査区	(4)上層遺構面近景	PL.14	B区遺構
		(5)下層遺構面近景	(41)SS1729, SA1748, SX1808・1809	
PL.4	町割遺構	(6)SS493 (7)SS493・SJ1619	(42)SD1576・1736・1738, SF1743	
		(8)SS1564, SX1623 (9)SS1564	(43)SD1737	
PL.5	町割遺構	(10)SS1565 (11)SS1567	PL.15	C区遺構
		(12)SS1565, SD501・1574北半	(14)上層遺構面 (45)SX1838	
PL.6	A区遺構	(13)A区上層遺構面北半	PL.16	C区遺構
		(14)A区上層遺構面南半	(46)SX1838根太	
PL.7	A区遺構	(15)SB1550, SX1635, SD1568	(47)SB1722・1723	
		(16)SB1714・1715	PL.17	C区遺構
PL.8	A区遺構	(17)SF1604 (18)SE1594	(48)SB1722 (49)SB1723	
		(19)SB1714 (20)SF1741	(50)SE1594 (51)SF1608	
		(21)SB1553・1554	(52)SF1609 (53)SF1610	
PL.9	B区遺構	(22)SB1555	PL.18	D区遺構
		(23)SF1742, SX1784・1785	(54)上層遺構面	
PL.10	B区遺構	(24)SB1721	(55)下層遺構面	
		(25)SB1556, SF1606	PL.19	D区遺構
PL.11	B区遺構	(26)SB1556 (27)SB1720	(56)SX1672~1675, SE1599	
PL.12	B区遺構	(28)SE1596 (29)SF1605	(57)SA1572, SB1725	
		(30)陶磁器を取めたバンドコ	PL.20	D区遺構
		(31)SF1607 (32)SF1606	(58)SB1558 (59)SB1559	
		(33)SE1598 (34)SX1663・1664	PL.21	D区遺構
		(35)SX1787	(60)SE1599 (61)SE1600	
PL.13	B区遺構	(36)SX1662 (37)SD1730	(62)SE1601 (63)SF1611	
			(64)SF1612 (65)SX1674	
			(66)SX1822	
			PL.22	D区遺構
			(67)SB1560 (68)SB1562	
			PL.23	D区遺構
			(69)SE1602 (70)SE1603	
			(71)SX1703 (72)SD1584・1586	
			PL.24	E区遺構
			(73)SF1617 (74)SF1745	
			(75)SF1746 (76)SF1614	
			PL.25	出土遺物
			A区Ⅰ遺構面	
			PL.26	出土遺物
			A区Ⅰ遺構面	

PL.27	出土遺物	A区Ⅰ・Ⅱ遺構面	PL.54	出土遺物	D区Ⅰ遺構面
PL.28	出土遺物	A区Ⅱ遺構面	PL.55	出土遺物	D区Ⅱ遺構面
PL.29	出土遺物	B区Ⅰ遺構面	PL.56	出土遺物	D区Ⅱ遺構面
PL.30	出土遺物	B区Ⅰ遺構面	PL.57	出土遺物	D区Ⅱ遺構面
PL.31	出土遺物	B区Ⅰ遺構面	PL.58	出土遺物	D区Ⅱ遺構面
PL.32	出土遺物	B区Ⅰ・Ⅱ遺構面	PL.59	出土遺物	D区Ⅱ遺構面
PL.33	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.60	出土遺物	D区Ⅱ遺構面
PL.34	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.61	出土遺物	E区Ⅰ遺構面
PL.35	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.62	出土遺物	E区Ⅰ・Ⅱ遺構面
PL.36	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.63	出土遺物	その他Ⅰ遺構面
PL.37	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.64	出土遺物	その他Ⅰ遺構面
PL.38	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.65	出土遺物	その他Ⅱ遺構面
PL.39	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.66	出土遺物	その他Ⅱ遺構面
PL.40	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.67	出土遺物	その他Ⅱ遺構面
PL.41	出土遺物	B区Ⅱ遺構面	PL.68	出土遺物	その他Ⅱ遺構面
PL.42	出土遺物	C区Ⅰ遺構面	PL.69	出土遺物	その他Ⅱ遺構面
PL.43	出土遺物	C区Ⅰ遺構面	PL.70	出土遺物	Ⅲ遺構面
PL.44	出土遺物	C区Ⅱ遺構面	PL.71	出土遺物	Ⅲ遺構面、床土・表採・不明
PL.45	出土遺物	C区Ⅱ遺構面	PL.72	出土遺物	床土・表採・不明
PL.46	出土遺物	C区Ⅱ遺構面	PL.73	出土遺物	床土・表採・不明
PL.47	出土遺物	C区Ⅱ遺構面	PL.74	出土遺物	銭貨
PL.48	出土遺物	C区Ⅱ遺構面	PL.75	出土遺物	銭貨
PL.49	出土遺物	C区Ⅱ遺構面	PL.76	出土遺物	銭貨
PL.50	出土遺物	C区Ⅱ遺構面	PL.77	出土遺物	銭貨
PL.51	出土遺物	D区Ⅰ遺構面	PL.78	出土遺物	銭貨
PL.52	出土遺物	D区Ⅰ遺構面	PL.79	出土遺物	銭貨、その他
PL.53	出土遺物	D区Ⅰ遺構面	PL.80	出土遺物	その他

表 目 次

表1	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧	2
表2	出土遺物一覧表	21
表3	土器・陶磁器観察表	35
表4	金属製品観察表(銭貨を除く)	44
表5	漆塗碗・皿観察表	45
表6	木製品観察表(漆塗碗・皿を除く)	45
表7	石・骨・角・墨・ガラス製品観察表	46
表8	銭貨観察表	48
表9	遺物観察表補遺	PL.80

I 事業概要

1 調査の目的

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名越前朝倉氏が領国支配の拠点とした所で、当主の館を中心として山城、城戸、一族・家臣の屋敷、町屋、寺院などの遺構が一体となって残されており、我が国の歴史を知るうえで欠くことのできない国民の共有の文化遺産として、永久に保存するため特別史跡に指定され、公有化が進められている。

遺跡保護の目的は、単に遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査してその成果を広く公表し、一般の歴史認識に役立てて活用することにある。その方策として、遺跡の中に身を置いて「自ら歴史と生きた対話」のできる史跡公園の完成を目指している。こうした理念のもとに一乗谷朝倉氏遺跡の調査と整備とが進められており、中でも発掘調査は当時の一乗谷の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態などを直接的に明らかにする最も有力な方法と位置付けられる。計画的かつ連続的に行った発掘調査の成果に基づいて着実な環境整備が施され、適切な維持・管理のもと遺跡を公開する、その前提条件のひとつとしてこれまで調査を続けてきた。

本報告書は、一乗谷朝倉氏遺跡の計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、その第17冊目にあたる。その他、道路・河川の整備事業や中山間事業などの現状変更に伴う発掘調査の報告は別途に行われている。なお、各年次の発掘・環境整備事業の概要は、当該年次の概報として公開されているが、本書で正式に調査所見を報告するものとし、内容については本報告書が優先する。

2 調査の経過

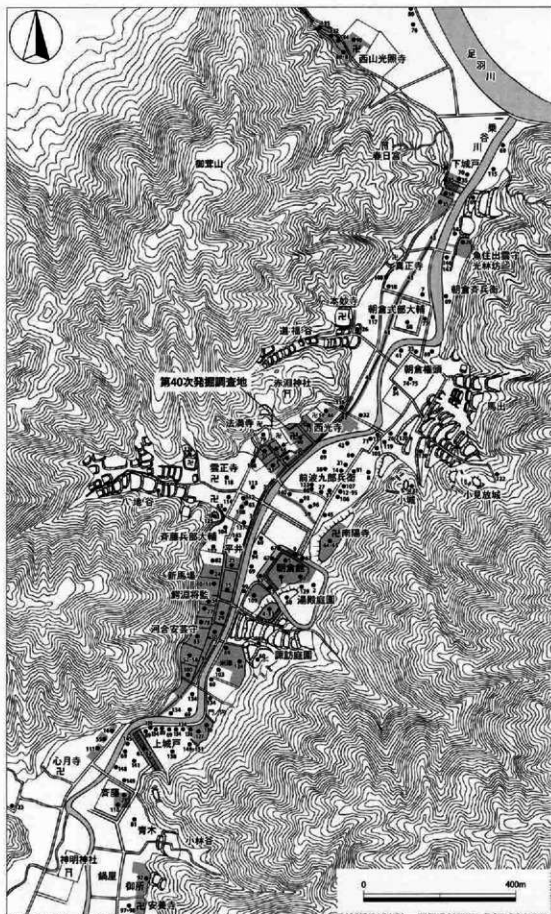
一乗谷朝倉氏遺跡の計画的な発掘調査は、昭和42年度から足羽町教育委員会を事業主体として始められた。昭和46年度から福井県教育委員会がこれを引き継いで発掘調査と環境整備事業を実施し、福井市が用地取得と遺跡の管理を担当するという機能分担で事業を進めている。同年7月に278haという広大な地域が国の特別史跡に格上げ指定され、福井県は、昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」のもと、同年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所を設置し、以後5ヵ年計画により継続して発掘調査と環境整備を実施した。これ以前の旧足羽町と福井県教育委員会による調査を、第1次5ヵ年計画とし、以後昭和61年度まで4次にわたって5ヵ年計画を進めた。第1次5ヵ年計画では朝倉氏最後の当主である朝倉義景の館跡を中心に調査を行った。この間、昭和45年には土地改良事業に伴い御所・安養寺や小林谷で緊急確認調査を行い、遺構の保存状態が良好であることを確認して、特別史跡指定の機運を高めた。第2次5ヵ年計画では、それに引き続いて平井地係の武家屋敷跡や朝倉義景館跡に隣接する中の御殿跡、赤湖地係に所在するサイゴ寺跡、指定地内の北部に位置する瓢町地係や出雲谷地係など、武家屋敷、寺院、町屋等とみられるいくつかの地点を選択して一乗谷の概況の把握を試みた。第3次5ヵ年計画では、一乗谷川の西側に敷設されることになった県道鯖江・美山線の改良工事に関連して、その両側の平地部分を計画的に調査した。引き続き第4次5ヵ年計画では、その最初の4年で指定地の中央に位置する赤湖・奥間野・吉野本地係を集中的に発掘調査し、この地区の道路、武家屋敷、寺院、町屋等の極めて良好な遺構を検出、大量の遺物が出土して大きな成果をあげた。なお、本書で報告するのはその成果の一部である。最後の5年日は再び平井地係の武家屋敷を調査し、さらに一乗谷の内

表1 特別史跡一乗谷合氏遺跡発掘調査一覧

年度	西暦	調査期間	主要調査成果	調査次数	調査場所・住所	面積	発掘費	遺構
昭和42年	1967	第1次5ヵ年	本谷の発掘調査が本館の整備に伴う平成調査から始まる。町倉倉庫等での調査は真室谷合戦の場跡の確かな位置を把握する。	第1次	高道	I	I	1,800
昭和43年	1968			第2次	物倉跡	I	I	2,065
昭和44年	1969			第3次	町倉跡	I	I	1,963
昭和45年	1970			第4次	町倉跡	I	I	1,789
昭和46年	1971	第2次5ヵ年	町倉倉庫跡の調査が終了し、武家屋敷や町倉跡の調査を開始する。町倉跡では職人の上層跡が確認される。	第5次	町倉跡	II	I	676
昭和47年	1972			第6次	町倉跡	II	I	34
昭和48年	1973			第7次	町倉跡	II	I	562
昭和49年	1974			第8次	町倉跡	II	I	340
昭和50年	1975	第3次5ヵ年	字平、川合、赤洞、奥間野島跡を中心に掘削に調査を実施。武家屋敷や町倉跡の様子が明らかになってくる。道路の構造が明確になり、約30m×100mを基準とした町倉跡が判明する。	第9次	町倉跡	V	14	172
昭和51年	1976			第10次	町倉跡	V	14	246
昭和52年	1977			第11次	町倉跡	V	14	50
昭和53年	1978			第12次	町倉跡	V	I	170
昭和54年	1979			第13次	町倉跡	VI	II	2,425
昭和55年	1980			第14次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和56年	1981			第15次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和57年	1982			第16次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和58年	1983			第17次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和59年	1984			第18次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和60年	1985	第4次5ヵ年	赤洞、奥間野、吉野本館跡を中心に調査。町倉中層や武家屋敷、町倉跡を調査。文化した町倉字跡や町倉跡が判明。また、土城跡の存在が確認された。	第19次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和61年	1986			第20次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和62年	1987			第21次	町倉跡	VI	II	1,240
昭和63年	1988			第22次	町倉跡	VI	II	1,240
平成元年	1989			第23次	町倉跡	VI	II	1,240
平成2年	1990			第24次	町倉跡	VI	II	1,240
平成3年	1991			第25次	町倉跡	VI	II	1,240
平成4年	1992			第26次	町倉跡	VI	II	1,240
平成5年	1993			第27次	町倉跡	VI	II	1,240
平成6年	1994			第28次	町倉跡	VI	II	1,240

年度	西暦	調査時期	主要調査成果	調査回数	調査場所・住所	規模	報告書	冊数	
平成4年	1992	中期 第1次10ヶ年 後半	兵庫、田舎神社の調査では、武家屋敷や町屋跡を確定。また、土蔵戸・土蔵戸の外にある寺院を中心として、調査・調査結果報告書では町並立体復原。	第771次	城下ノ内町字山台	1992	V	2,600	
				第772次	城下ノ内町字山台	1992	14	120	
				第773次	城下ノ内町字山台	1992	14	120	
				第774次	安徳賢町字六角	1992	14	498	
				第775次	西新町字小浜	1992	14	220	
平成5年	1993			第776次	城下ノ内町字山台	1993	V	1,300	
				第777次	西新町字小浜	1993	14	500	
				第778次	城下ノ内町字山台	1994	14	400	
				第779次	城下ノ内町字山台	1994	11	2,400	
				第780次	東新町字水、五所、安徳町	1994	14	400	
平成6年	1994			第781次	安徳賢町字山、土蔵山	1994	11	2,400	
				第782次	東新町	1994	14	400	
				第783次	城下ノ内町字山台	1994	14	100	
				第784次	安徳賢町字山	1995	11	400	
				第785次	城下ノ内町字山台	1995	14	100	
平成7年	1995			第786次	安徳賢町字山	1995	13	2,600	
				第787次	城下ノ内町字山台	1995	14	400	
				第788次	城下ノ内町字山台	1995	14	400	
				第789次	城下ノ内町字山台	1996	14	820	
				第790次	城下ノ内町字山台	1996	13	2,400	
平成8年	1996			第791次	東新町字山	1996	13	2,400	
				第792次	城下ノ内町字山台	1996	13	1,000	
				第793次	城下ノ内町字山台	1997	18	2,800	
				第794次	城下ノ内町字山台	1997	14	400	
				第795次	城下ノ内町字山台	1998	2,300		
平成10年	1998	中期 第2次10ヶ年 前半	西灘、川合地区を中心に調査を実施。土蔵武家屋敷を調査。中山町事業では城下ノ内全域で遺跡調査を実施。	第801次	城下ノ内町字山台	1998	100		
				第802次	城下ノ内町字山台	1999	2,000		
				第803次	城下ノ内町字山台	1999	14	120	
				第804次	城下ノ内町字山台	1999	18	225	
				第805次	城下ノ内町字山台	2000	32	14	98
平成12年	2000			第806次	城下ノ内町字山台	2000	32	1,400	
				第807次	城下ノ内町字山台	2000	32	18	2,000
				第808次	西灘町字山	中山町	1,400		
				第809次	西灘町字山	中山町	1,000		
				第810次	西灘町字山	中山町	150		
平成14年	2002	中期 第2次10ヶ年 後半	遺跡調査での調査を実施。東正寺地区遺跡を調査。南北遺跡の両側に大塚の遺跡を調査。中山町事業では道路遺跡を調査。	第811次	城下ノ内町字山台	2002	33	2,000	
				第812次	城下ノ内町字山台	2002	34	1,700	
				第813次	城下ノ内町字山台	2002	35	1,700	
				第814次	安徳賢町字山	2002	35	540	
				第815次	城下ノ内町字山台	中山町	318		
平成15年	2003			第816次	城下ノ内町字山台	2003	36	26	
				第817次	城下ノ内町字山台	2003	36	14	314
				第818次	城下ノ内町字山台	2003	36	3,000	
				第819次	城下ノ内町字山台	2003	37	500	
				第820次	城下ノ内町字山台	2003	37	100	
平成16年	2004	中期 第3次10ヶ年 前半	遺跡調査での調査を実施。特に一乗谷山内側の土蔵戸から発掘にかけての発掘不明の東家寺、および西山北側の米蔵塚を調査を説明する。	第821次	城下ノ内町字山台	2004	38	15	2,500
				第822次	城下ノ内町字山台	2004	38	15	2,500
				第823次	城下ノ内町字山台	2004	39	14	44
				第824次	城下ノ内町字山台	2004	39	16	2,000
				第825次	城下ノ内町字山台	2004	39	120	
平成17年	2005			第826次	城下ノ内町字山台	2005	40	16	2,500
				第827次	城下ノ内町字山台	2005	40	14	42
				第828次	安徳賢町字山台	2005	41	11	1,600
				第829次	城下ノ内町字山台	2005	41	14	80
				第830次	城下ノ内町字山台	2005	42	11	800
平成20年	2008	改定基本計画 初期 第1次5ヶ年	城下町の防衛施設の一部である土蔵戸について、城下ノ内をつなぐ道路と城下ノ内の構造および周辺地域の様子を明らかに解明する。	第831次	城下ノ内町字山台	2008	43	16	1,800
				第832次	城下ノ内町字山台	2008	43	300	
				第833次	城下ノ内町字山台	2008	43	14	120
				第834次	東新町字山	2008	44	800	
				第835次	城下ノ内町字山台	2008	44	345	
平成25年	2013		河川改修事業では下城川沿岸に設置する土蔵戸、東家寺において、第一乗谷川の両岸で石積層を確認。	第836次	安徳賢町字山台	2013	45	11	60
				第837次	東新町字山	2013	45	200	
				第838次	城下ノ内町字山台	2013	46	33	
				第839次	城下ノ内町字山台	2013	47	200	
				第840次	城下ノ内町字山台	2013	47	200	
平成29年 平成30年	2017 2018	改定基本計画 短期 第2次5ヶ年	城下町の防衛施設の一部である土蔵戸について、城下ノ内をつなぐ道路と城下ノ内の構造および周辺地域の様子を明らかに解明する。	第841次	城下ノ内町字山台	2017	48	190	
				第842次	東新町字山	2017	48	190	
				第843次	城下ノ内町字山台	2017	48	190	
				第844次	城下ノ内町字山台	2017	48	190	
				第845次	城下ノ内町字山台	2017	48	190	
令和元年	2019			第152次	城下ノ内町字山台		80		

注 調査時期 城下町第一乗谷町遺跡調査、中山町小学校校舎改築に伴う事前調査報告書1998、南江、美山地区一帯発掘調査一乗谷町遺跡調査、城下町、美山地区調査、上車に伴う発掘調査報告1983、武吉野遺跡一乗谷町遺跡調査、国道38号城改上車に伴う事前調査報告書1985、1、遺跡調査一乗谷町遺跡調査、朝倉郡南灘地区調査報告1997、水辺川第一乗谷町遺跡調査、一乗谷川水辺川整備計画に伴う事前調査報告書1991、3、城下、美山地区一乗谷町遺跡調査、城下町、美山地区調査、上車に伴う事前調査報告書1992、中山町一帯発掘調査一乗谷町遺跡調査、中山町遺跡調査報告書1995、中山町一帯発掘調査一乗谷町遺跡調査に伴う発掘調査一乗谷町遺跡調査報告書1997、第110次、第111次、第116次調査報告書2006、第90次一乗谷町遺跡調査報告書2008、第29巻一乗谷町遺跡調査、発掘調査報告書2009、第112次調査報告書2011、第116次調査報告書2012



※数字は調査次数、網線付は正確資料行跡(小規模調査は除く)を示す

挿図1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図(縮尺1/10,000)

外を区切る下城戸跡の本体の調査にも入った。

昭和62年度から中期第1次10ヵ年計画として上城戸跡や南陽寺跡、西山光照寺跡、御所・安養寺跡などの大規模寺院、そして中徳・権殿・河合殿などの武家屋敷・町屋跡を計画的に調査し、遺跡内の各地に所在する大規模かつ特徴的な遺構を究明した。

平成9年度から中期第2次10ヵ年計画として、町並立体復原地区の北に位置する八地谷川両岸を連続的に発掘調査し、この地区の街路や武家屋敷の構造を明らかにした。また、遊歩道設置に伴う事前調査も実施した。途中、平成16年度は福井豪雨により遺跡や資料館が被災したため、雲正寺地帯内での発掘調査を中断し、災害復旧に全力を注ぐこととなった。

平成17年度から改めて中期第3次10ヵ年計画を施行し、中断した調査を再開した。平成19年度からは、朝倉館跡から上城戸跡に至る遊歩道沿いの整備を進めるため、連続的に字米津や字門ノ内を発掘調査し、刀装具製作工房跡やガラス玉工房跡の存在が明らかとなった。平成22年度からは、西山光照寺跡の平地部北半を調査して、大規模な石垣や建物の存在を確認した。

平成24年度からは、前年度に改定した「特別史跡-乗谷朝倉氏遺跡発掘・整備基本計画」に基づき、城下町の防衛の要である上城戸跡の一角において、城戸内外をつなぐ道路跡と城戸入口の構造および城戸周辺を面的に解明する目的でトレンチ調査を行い、屋敷地や道路跡の一部を確認して現在に至る。

3 調査の方法および組織

発掘調査・環境整備は、国庫補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所(昭和47年4月1日～同56年8月19日)、およびこれを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館(昭和56年8月20日～。平成4年4月1日に乗谷朝倉氏遺跡資料館と名称変更。)が設置され、その任にあたってきた。平成24年度からは、県の機構改革で同資料館が教育庁から知事部局に移管となったことに伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが朝倉氏遺跡グループを設けて引き継いだ。平成29年度の機構改革で、朝倉氏遺跡に関する全業務を知事部局が担うこととなった。また当初から、「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき特別史跡-乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会(平成8年度に福井県朝倉氏遺跡研究協議会と名称変更。)が設置され、その指導と助言を受けている。

本報告書に関係する年度における組織、および経費を以下に記した。

○昭和55・56年度(第40次発掘調査)

朝倉氏遺跡調査研究協議会 ※50音順。役職は昭和55年1月当時。

委員 青園謙三郎(福井テレビ放送社長・郷土史)	委員 石井 進(東京大学教授・歴史)
委員 伊藤 滋(東京大学助教授・都市工学)	委員 岸谷孝一(東京大学教授・建築)
委員 木原啓吉(朝日新聞社編集員・都市環境)	委員 木村竹次郎(朝倉氏遺跡保存協会会長)
委員 近藤公大(奈良女子大学教授・造園)	委員 重松明久(福井大学教授・歴史)
委員 清水英夫(青山学院大学教授・哲学)	委員 田畑貞寿(千葉大学教授・造園)
委員 坪井清足(奈良国立文化財研究所所長・考古)	委員 戸塚文子(評論家)
委員 水上 勉(作家)	委員 城戸ノ内町内会長

朝倉氏遺跡調査研究所(～昭和56年8月)・朝倉氏遺跡資料館(昭和56年8月～)

所長・館長	藤原武二(造園)	次長	中谷 賢(事務)	文化財調査員	水野和雄(考古)
文化財調査員	小野正敏(考古)	文化財調査員	岩出 隆(考古)	文化財調査員	吉岡泰英(建築)
文化財調査員	南洋一郎(考古)	文化財調査員	伊藤正敏(歴史)	事務補助員	吉越 強*
調査補助員	加藤吉剛*	非常勤嘱託	青木研吾*(学芸)	非常勤嘱託	西村 広*(事務)

(*吉越・加藤は昭和55年度、青木・西村は同56年度)

経費 昭和55年度 発掘調査経費 34,000千円(第37・38次調査費含む)

経費 昭和56年度 発掘調査経費 35,000千円(第42次調査費も含む)

○平成28～令和元年度(本報告書作成)

朝倉氏遺跡研究協議会 ※50音順。役職は平成31年1月現在。

委員	網谷克彦(元福井県陶芸館長・考古)	委員	池上裕子(成蹊大学名誉教授・歴史)
委員	小野健吉(和歌山大学教授・遺跡整備)	委員	小野正敏(国立歴史民俗博物館名誉教授・考古)
委員	神吉紀世子*(京都大学大学院教授・景観計画)	委員	岸田 清(朝倉氏遺跡保存協会会長)
委員	久保智康(京都国立博物館名誉館員・美術工芸)	委員	高妻洋成(奈良国立博物館文化財センター長・保存科学)
委員	小浦久了(神戸芸術工科大学教授・都市計画)	委員	杉本 宏*(京都造形芸術大学教授・庭園整備)
委員	富島義幸(京都市立大学大学院教授・建築)	委員	吉田 智(福井教育博物館館長・歴史)

(*神吉委員の任期は平成30年1月24日まで、杉本委員の任期は同1月27日から。)

埋蔵文化財調査センター

所長	工藤俊樹*(考古)	次長	赤澤徳明*(考古)	主任	鈴木篤英*(考古)
主査	木村孝一郎*(考古)非常勤嘱託	壕塚美佐子*(事務)非常勤嘱託	富坂昌代*(事務)		

(*工藤は平成28・29年度、赤澤は同30年度から所長。木村は平成28・29年度、鈴木は令和元年度から資料館併任地勤務。壕塚は平成28年度、富坂は平成29年度から資料館併任地勤務。)

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長	向出宏二(事務)	副館長	月輪 泰(考古)	次長	井上順子*(事務)
次長	下山淳子*(事務)	主任	川越光洋*(考古)	主任	宮永一美(歴史)
主任	宮崎 認*(考古)	主任	田中祐二*(考古)	主任	有馬香織*(歴史)
主査	松本泰典*(考古)	主査	熊谷 透*(建築)	主査	藤田若菜*(庭園)
学芸員	石川美咲(歴史)	学芸員	渡邊英明*(保存科学)	学芸員	大竹桃子*(史跡整備)
文庫調査専門員	佐藤 圭*(歴史)非常勤嘱託	眞保弘恵*(事務)非常勤嘱託	松村良行*(事務)		
非常勤嘱託	花川洋介*(事務)				

(*井上・松村・佐藤は平成28年度、松本は同28～30年度、下山・渡邊・大竹・花川は同29年度から、有馬は同30年度から配属。熊谷、同28年度は文化財調査員。川越・田中・松本・熊谷・眞保は同28年度、藤田は同28・29年度、埋蔵文化財調査センターに併任。)

経費 平成28年度 発掘調査費 4,875千円(報告書遺物整理)

平成29年度 発掘調査費 2,928千円(報告書遺物整理)

令和元年度 発掘調査費 843千円(報告書刊行)

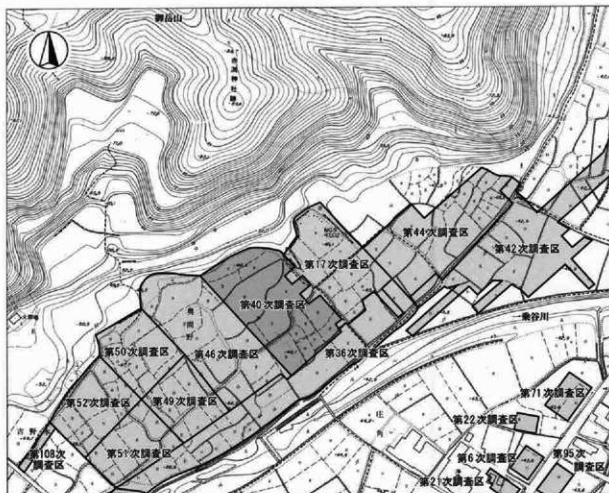
II 調査の概要と経過

1 調査の概要

今回報告する第40次調査地は、福井市城戸ノ内町字奥間野地係に所在し、調査面積は約3,000㎡を測る。当地区は、上城戸・下城戸に区切られた「城戸ノ内」の中央部に位置し、南から東側を足羽川の支流である一乗谷川が流れ、西から北側には福井平野と面する御草山がそびえている。なお、一乗谷川を挟んだ南方にある朝倉館跡からは約400m離れている。

当地区ならびに隣接する赤河・吉野本地区は武家屋敷・寺院・町屋等の遺構が良好に残り、全面的な発掘調査の結果、一乗谷の町並の様相が最も解明された地区の一つとなっている。第40次調査以前には北東側で第17次調査、南東側で第36次調査が実施されており、西側の山裾に比較的大区画の寺院、東側の一乗谷川沿いに南北の幹線道路を基準に展開する小区画の屋敷群の存在が判明していた。これらの調査結果を受け、第40次調査では南北道路の行方や、町屋と考えられる小規模な屋敷跡の構造ならびに町割の変遷の追求に主眼を置いた。

調査の結果、少なくとも4期にわたる遺構面を検出し、比較的大規模な区画が小規模の区画に分割、蚕食されていく町割の変遷過程をとらえることができた。遺物では、石積施設から金隠が出土し、それ



挿図2 第40次調査区周辺地形図(縮尺1/2,000)

が便所であるとの確証に至った。その他、油煙墨やガラス皿、北国船の模型など、それまで出土例のない、あるいは極めて少ない遺物が出土した。

2 調査の経過

調査は昭和55年(1980)7月1日に着手した。調査対象地は山裾から一乗谷川に向かって下る4段の旧水田であり、最上段と下段では約14mの比高差があった。作業は人力による耕作土・床土の除去から行ったが、先行して実施された第36次調査の排土があったことと、天候不順により2ヶ月もの期間を要した。なお、その際の遺物の取り上げは旧水田の地割を基準に1～28区に分けて行っている(挿図3)。その後、山裾側より上層遺構の検出に着手し、同年11月まで調査を行った。その間、陶磁器を収納したバンドコや油煙墨、ガラス皿、そして金隠など重要な発見が相次いだ。

11月11日に上層遺構面の航空測量を実施した後、引き続き下層遺構の調査に着手した。下層の掘り下げは、上層遺構を島状に残した状態で可能な限り遺構の検出を試みた。年内はA・B区を調査し、B区の広い範囲で焼土面や敷物の跡を検出した。T66グリッドでは四角い木枠の中に埋置された擋鉢が出土した(SX1786)。冬季は現場作業を中断し、上層遺構面の概報を作成、刊行した(概報Ⅻ)。下層の調査は昭和56年(1981)4月から再開した。D区から着手し、新たに礎石建物などの遺構を検出するとともに、概報で上層遺構として報告した遺構の一部が下層の遺構面に属することも判明した。次いでC区の掘り下げに着手した。この地区では炭化した床材と整地土が互層をなしており、何度も床面を嵩上げていた様子が明らかとなった。また、それらに混じって多数の木製品が出土した。その後、A・B区についても再度掘り下げを行い、多くの下層遺構を検出した。これら下層遺構の航空測量は、隣接地で行った第42次調査の終了を待って同時に実施し、調査を完了した。



挿図3 床土出土遺物の取り上げ区画

3 調査区の設定

第40次調査区は、先行する第17・36次調査区に接して東西約72m、南北約43mの不整形な長方形で設定した。調査区内は第17次調査で設定した3mグリッドを南へ延長し、南北にI～U・A～C列、東西に49～74列とした。遺物取り上げの区画名としては、グリッド南東の交点を読んだ。なお、本文中における方位の記述は、これまでと同様に町割の方向を基準とし、地図上のものとは異なる。つまり、一乗谷川側を東、御茸山側を西とし、北は実際より約45度東へ振れた方向で用いている。

日誌抄

昭和55年(1980)

- 7・1 発掘調査を開始する。耕作土除去を開始。
- 8・28 耕作土除去終了。
- 8・29 東西道路SS493の西端を檢出。笏谷石が階段状に並ぶ。
- 9・1 A区の遺構檢出に着手。
- 9・2 石敷SX1635檢出。
- 9・3 南北道路SS1564檢出。B区北側の遺構檢出に着手。
- 9・4 SD1555、SF1605、SE1596等掘削。
- 9・12 SB1556、SE1598、SF1607・1608等掘削。
- 9・16 SD1571・1573、SF1609等掘削。
陶磁器を納めたバンドコ檢出。
- 9・17 C区の遺構檢出。SD1572等掘削。
- 9・18 SF1610等掘削。
- 9・19 D区の遺構檢出に着手。SD574、SX1674等掘削。
- 9・22 SD1583・1584等掘削。SA1618檢出。
- 9・24 SD1579・1591等掘削
- 9・25 SD1580・1590、SF1612等掘削。
- 10・1 SF1614・1615・1617等掘削。SF1617より金剛出土。
- 10・6 SD1576、SX1675等掘削。
- 10・17 B区南側の遺構檢出に着手。
- 10・21 SB1556檢出。

11・11 航空測量。

(以上、上層調査)

- 11・14 下層の掘り下げ開始。A区の遺構檢出に着手。
- 11・17 SB1553等檢出。
- 11・20 B区の遺構檢出に着手。
- 11・25 SD1732・1733等掘削。
- 12・2 SD1731等掘削。SS1728檢出。SX1786檢出
- 12・9 T68グリッドで帯敷きの面を檢出。

昭和56年(1981)

- 4・21 D区の遺構檢出に着手。
- 5・11 SB1560北辺、SA1750等檢出。SK1763・1764等掘削。
- 5・14 SB1725、SA1749等檢出。
- 5・21 C区の遺構檢出に着手。SS493の下層に溝SD502確認。
- 5・26 SB1721-1723等檢出。SD1735等掘削。
- 5・27 B区の遺構檢出に着手。SD1731等掘削。
- 6・5 A区の遺構檢出。SB1714・1715等檢出。SF1741等掘削。
- 6・8 A・B区の遺構檢出。SF1742等掘削。
- 9・12 遺構写真撮影
- 9・13 遺構写真撮影
- 10・13 航空測量(第42次調査と同時に実施)



上層遺構面檢出作業



上層遺構掘削作業

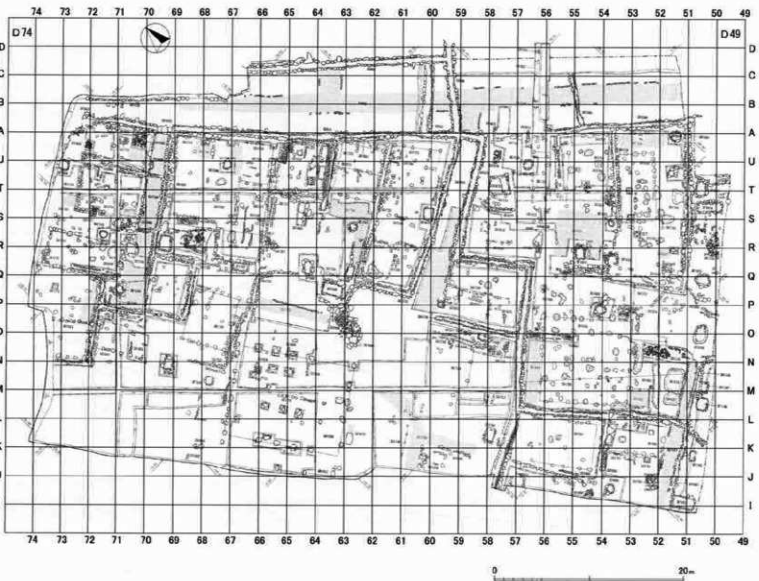


下層遺構面檢出作業



下層遺構掘削作業

挿圖4 作業風景写真



神宮寺 平家正室院(縮尺1/400)

Ⅲ 遺構

検出した主な遺構は上層の調査において道路4、石組溝18、礎石建物9、井戸10、石積施設14、炉4等、下層の調査においては礎石建物8、石積施設4、溝3、通路2、炉3等である。

当調査区は東西道路SS493を軸に、道路や溝によって大きく以下の地区に分けられる(挿図6)。

A区：SS1564より西の小区画群の地区。

B区：SS1564・SD1695以東、SS1565・SD1574以西の広い区画のうち、SD1571とSD1572で画された地区(C区)を除く範囲。さらに本区は下層の遺構面で検出したSD1730・1733の東西方向部分を結んだライン以北をB1区、残りをB2区とする。

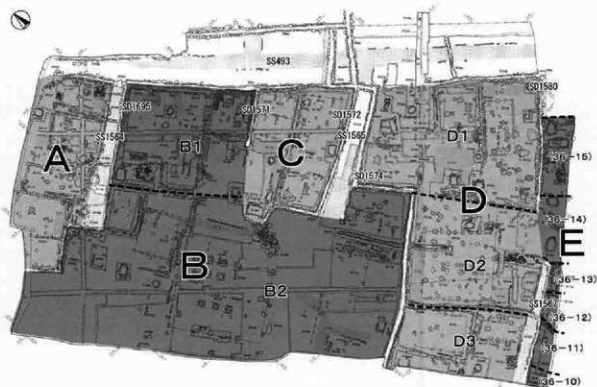
C区：SD1571とSD1572で区画された地区。上層の遺構面においてB区より約0.5m低い。

D区：SD1574以東、SD1580・SS1567以西の小区画群の地区。東西道路SS493に面し、南をSD1574・1581・1582で区画された範囲をD1区、SD1581・1582以南、SD1584以北の範囲をD2区、SD1584以南をD3区とする。

E区：SD1580・SS1567以東の小区画群の地区。第36次発掘調査において、一乗谷川沿いの幹線道路SS495に面して検出した小区画群の一部にあたる。

層序について、当調査区は面積が広い上、各区画が溝で分断されているため全体を貫く土層はないものの、分断している溝が新旧でわずかにずれているため、それを利用して両側の共通土層を決定し、それを繰り返すことによって全体の時期を把握することに努めた(第10図)。

水田の床土を除去した段階で検出した上層の遺構面は、一部を除いて基本的に最終遺構面と捉えられ、この遺構面を含め大きく4期、一部は5期にわたっていることを確認した。



挿図6 区画割図(縮尺1/500)

時期決定の基準となった溝はB1区とC区を分けるSD1571で、新旧2時期ある。(新)に対応する遺構は2面あり、古い方はSX1838とSB1721、新しい方にはSB1557とSX1663がそれぞれ対応している。(旧)にはSB1722がある。SD1695以西(A区)については溝が浅い上に整地層が全く異なっているため、直接対応する遺構面は把握できなかった。SD1574以东(D区)はトレンチ内で4時期の遺構面を確認しているが、面的に発掘したのは2時期のみである。

以下、遺構の記述は上述した地区割りの基準となる遺構からはじめ、つづいてA～D区の順に行う。各区では上層をI遺構面とし、下層へ向かってII、III、IV遺構面とした。また、遺構でも主に礎石建物では、一乗谷の基準寸法に従い、1間を6尺2寸=約1.879mで記述、検討した。井戸や石積施設等の平面規模は特に断らない限り内径・内法である。なお、井戸については作業の安全性を考慮して上部のみの掘削にとどめたため、深さや下部の構造は不明である。

町割に係る遺構(第1・2図、PL.4・5)

SS493 調査区の北縁を東西に走る道路である。東方は第36次調査区で南北の幹線道路SS495とT字に接続し、西方は山裾の屋敷地(未調査)へ登っていく。本来的には「サイゴ寺」(第17次調査区17-1区画)前のように幅約7m、両側に幅約0.5mの石組溝SD499・501が付き、あわせて約8m幅で計画されたと思われるが、かなり早い時期にSD500以东は遺幅5m前後に狭められ、北側の側溝SD499も廃止される。また、西側の登っていく部分約15mも幅が2～3mと狭くなっている。この登り坂の一部で階段状になった4枚の笏谷石SJ1619を検出した。また、登り坂の部分を除いて、道路の中ほどに幅2m前後で砂利が敷かれていた。なお、道路面を断ち割って下層を確認したところ、詳細は不明だが道路とは考えられない遺構SX1824～1826を確認した。計画的な町割以前の遺構とみられる。

SD501 SS493の南側の側溝である。山裾から約42mの所で南へ直角に折れており、そこからはSD1574とした。途中、B・C区を区画するSD1695・1571・1572が南から、SS493を横断するSD500が北から合流する。SD501はIII・IV遺構面の段階にはすでに敷設されていたとみられるが、SD1695との合流点以西はのちに付け足されたようであり、軸もややずれている。

SD1590 同じくSS493の南側の側溝だが、SD501とはつながらない。SD501東端から約7m離れた地点から認められ、SS493に沿って東へ延び第36次調査区で南北の幹線道路SS495の側溝SD518に合流する。途中、SS493を横断するSD1591が北から、D区を区画するSD1579・1580が南から合流する。

SA1752 SS493に面する土塁で、下層の調査で確認した。外側には一部に長さ0.7～0.8mの巨石を配しているが、内側では小さい石を用いている。III・IV遺構面の段階にはすでに存在し、D1区の北辺全体を区画していたようであるが、I遺構面の段階までには廃されたと思われる。

SS1564・SD1695 SS493の西側に取り付く南北道路とその側溝で、A区とB区の境となる。側溝を含む道路幅は1.8m、長さは19.2mの袋小路であり、全面に砂利を敷いて敷き締めている。SS493との接続部、SD501を渡る部分には、自然石3枚からなる石橋SX1623がかかっている。SD1695の北側には、I遺構面の段階でA区内の屋敷境となる石組溝SD1568が合流する。また、同じく中央部には、A区の井戸SE1594とそれに付随する洗場SX1640から延びる石組溝SD1569が合流する。さらにII遺構面の段階には東からSD1730が合流していたようである。なお、SS1564およびSD1695は段階的に南方へ延長されたものとみられる。

SS1565 B区と東西道路SS493をつなぐ道路で、幅2.1m、長さ17.7mを測る。I遺構面の段階には黄色

土を貼って整地している。下層では一部砂利敷面も認められた。

SD1574 B・C区とD区を区画する南北方向の石組溝で、北端はSD501の東端に取り付き、途中、クランクして南へ延びる。当調査区での検出延長は44.7mだが、第46次調査区でさらに約14m南へ延び、東西に分岐(SD2699・2703)して同調査区内を大きく区画する。Ⅲ・Ⅳ遺構面の段階にはすでに敷設されていたとみられ、南側でSD1584と合流する。Ⅰ遺構面の段階にはさらにSD1576・1583が取り付く。

A区の遺構(第1～3図、PL.6～8)

Ⅰ遺構面

石組溝SD1568および石列SX1642により、南北に連なる3つの小区画に分かれる。

北側の区画は間口4.7m、奥行約9mを測り、道路SS1564より一段高くなっている。区画内には礎石建物SB1550が間口一杯に建つ。井戸や石積施設は認められない。

中央の区画は間口11m、奥行約10mを測る。区画内では礎石列SB1551・1552を検出したが、削平のため建物規模は不明である。区画の中央部東寄りに井戸SE1594、同じく南寄りに炉SX1713が、北西隅に石積施設SF1604がある。

南側の区画は西側斜面の南半が未調査であるが、南端を石列SX1647とみなし間口9.5m、奥行約8mと推定できる。加えて北東に井戸SE1595と洗場SX1644が突出して取り付く。区画内にこの段階の建物跡は確認できない。なお、中央部やや南寄りに東西方向の石列SX1646があり、ここで南北に2分される可能性がある。

SB1550 北側の区画に建つ礎石建物である。西辺の礎石が失われているが、南北3.8m(2間)×東西7.1m(4間)と推定した。建物内の北東隅付近に洗場と推定される石敷遺構SX1635があり、その西に近接して円形の笥谷石製盤を利用した炉SX1634が置かれていた。炉内には灰が詰まり、底部中央は火を受けて黒くなっていた。

SF1604 中央の区画の北西隅に位置する石積施設である。山裾の岩盤を掘り込んでおり、西側には石を積んでいない。内部は西から崩れ落ちてきた山土で埋まっていた。

SE1594 中央の区画の中央部東寄りに位置する石積井戸で、径0.7～0.8mを測る。東側に洗場とみられる石敷遺構SX1640が付随し、さらに排水用の石組溝SD1569が取り付く。

SX1713 SE1594の西に位置する炉である。径0.8mの浅い土坑で、底に粘土を敷き詰め、周囲を越前焼の甕の破片で囲い、内部に灰を入れる構造となっている。

SE1595 南端の区画の北東、SS1564の脇に位置する石積井戸で、径0.6～0.7mを測る。南側に洗場とみられるSX1644が付随する。

SX1644 石列による約1m四方の区画内に砂利を敷いた施設で、SE1595に付随する洗場とみられる。南接するSD1695に排水されたようである。

Ⅱ遺構面

A区を分割するような遺構は認められない。中央部にSB1715、南端にSB1553の2棟の礎石建物がある。また、SB1715の東に接して石積施設SF1741がある。

SB1715 東西7.8m(4.5間)、南北3.8m(2間)と東西に細長い礎石建物である。東端を除いて全体が焼上で覆われていた。良好に遺存している西・南辺の礎石列をみると、半間間隔に柱が立っていたようであ

る。建物内に特別な施設はなかったが、礎石を覆っていた焼上中に床材と考えられる板とそれを受ける根太の一部が炭化した状態で残っていた。また、北東に接して石積施設SF1741がある。検出面は一段低い、位置や方向から当建物と関連する遺構で、同時に存在していたと考える。

なお、I遺構面で検出した石列SX1642は、このSB1715を覆う焼土層の上に据えられている。

SF1741 SB1715の北東に接する石積施設である。東西0.8m、南北0.9mを測り、ほぼ正方形を呈す。東側はI遺構面の道路SS1564下で検出した。天端には踏石状に大振りの石を配している。また、北西隅に石敷SX1776が接しており、付属する施設の可能性がある。

SB1553 南北3.8m(2間)を測る礎石建物である。東西方向は西側が山裾の発掘区外へ広がるため不明であるが、6mを越えることはないと考えられる。

なお、このSB1553とSB1715の間に炉と考えられるSX1773を検出したが、これを覆う建物は確認できず、原位置を保っているか否かは不明である。

Ⅲ遺構面

北側に礎石建物SB1714がある。

SB1714 南北5.6m(3間)を測る礎石建物である。東西方向は西側の3.5m分を確認した。外周の礎石は比較的良く残っているが、内部は残りが悪い。SX1769等に礎石が認められるが、位置が少しずれており、検出面も低い、時期が異なるのかもしれない。また、西辺の外側にある石列SX1835とは構造上関連する可能性がある。

B区の遺構(第1・2・4・6図、PL.9～14)

I遺構面

この段階においてはB1区とB2区に分ける遺構は認められない。北西隅と中央部に方位軸をほぼ同じくする2棟の礎石建物SB1555・1556が存在する。どちらもかなり削平されているが、残存している礎石やその抜き跡から規模を推定した。北東部には道路SS1565が北へ向かって延び、東西道路SS493に対してやや西に振る形で接続する。また、SS1565南端付近からは石組溝SD1576が東へ向かって延び、SD1574に合流している。その結果、東西8m、南北6mの小区画が形成されるが、区画内では性格不明の集石遺構SX1680を検出したのみであった。

SB1555 B区の北西隅に位置する礎石建物である。東西10.4m(5.5間)、南北9.5m(5間)を測る。建物内中央北寄りに井戸SE1596があり、その北西側は小砂利敷になっていた。その他、関連する施設として、建物の南西に石積施設SF1605が、その東に接して石敷SX1652がある。

SF1605 SB1555の南西隅の礎石から約1m離れた位置にある石積施設である。東西1m、南北1.5m、深さ1mを測る。約半分は使用中に埋まったものとみられ、黒い有機質土の中に角材や荒く面取りをした材に混じってウリ、ウメ、クルミ等植物の種子が多く含まれていた。

SX1652 SF1605の東辺から約1m離れた位置にある石敷である。3m×3m程の範囲に大小不揃いの石を敷いており、北縁はSB1555に接する。なお、SX1652の南東(Q67グリッド)で完形の陶磁器を取納したバンドコ(口絵2)を検出したが、周辺の遺構との関係は不明である。

SB1556 B区の南側中央部に位置する礎石建物である。礎石の遺存状況は悪く、中でも東辺については全く残っていない。そのため、抜き跡等も手掛かりに規模を東西12.4m、南北9.5mと推定した。礎

石が比較的良く残っている西から3列目の柱間寸法は一間1.89mと測定され、一間6尺2寸5分を基準寸法としているらしい。建物の方向はSB1555と同じで道路SS1564に規制されている。この礎石建物は位置や規模からみて、この区画の中心的な建物と考えられる。付属の施設としては、西辺沿いに雨落ち溝SD1570がある。溝石はほとんど抜かれており、溝内には焼土が入っていた。その他、建物の北東側に井戸SE1598、南東側に庭園の可能性も考えられるSX1670がある。なお、この建物は、Ⅱ遺構面に帰属するSS1728とほとんどレベル差がないことや、同じくⅡ遺構面の建物SB1720との間にある石組溝SD1570が何度も作り変えられていることから、Ⅱ遺構面の段階にすでに存在した可能性がある。

SE1598 SB1556の北東隅から約1.5m離れた所にある石積井戸である。径0.8～0.9mを測り、上部には径約0.5mと比較的大振りの石を配している。井戸の北西側には石敷SX1668が取り付けられており、石組溝SD1572に排水されたものとみられる。

SX1670 SB1556の東辺から約0.5m離れた所にあり、長さ1.2mの伏石とその北側に同程度の範囲に広がる小砂利敷からなる。第24次調査で検出された平庭SG829等との類似性がうかがわれるが、削平により石が失われているため明確でない。

Ⅱ遺構面

SD1695の東側に取り付く石組溝SD1730が認められ、その東西延長線より北をB1区、南をB2区とする。B1区でこの段階の建物跡は確認できない。Ⅰ遺構面のSB1555の直下層では、B1区の南端で性格不明の溝状遺構SX1784を検出した。また、北端東寄りで見出した石敷遺構SX1662も同様の層位にあり、この段階とみる。B2区ではⅠ遺構面で検出した礎石建物SB1556がすでにこの段階に存在した可能性があり、その北辺に並行して通路SS1728が走る。さらに石組溝SD1570・1733を挟んで西側に礎石建物SB1720がある。その他、SS1565南端東側、SD1574とSD1576に囲まれた部分で横列SA1749等の遺構を検出した。

SX1662 井戸枠の転用品を含む笄谷石製の板石で囲んだ中に石を敷き詰めた施設である。SD501に接する1.2m四方の正方形区画の南側に1.2m×0.7mの長方形区画が取り付けられている。洗場とみられる。

SX1784 平面L字形の溝状遺構で、内部には灰と炭が詰まっていた。層位的にはⅠ遺構面のSB1555の整地層である黄褐色土層と下の焼土層との間にあり、レベル的には南側のSB1720に対応する。

SB1720 B2区の北西部に位置する礎石建物で、東西5.65m(3間)、南北4.7m(2.5間)を測る。北東隅に半間×半間の突出部があり、粒の揃った小砂利を敷き詰めている。石組溝SD1733を挟んで東側の通路SS1728とおおよそ対応することから、建物の入口とも考えられる。なお、建物の南側を走る石組溝SD1732との間でも幅約1.5mの砂利敷を検出している。建物内は南北に二分され、南半分は焼土を敷いた上間、北半分は薬を敷き詰めた上間敷になっていた。

SS1728 SB1556の北辺に並行する東西方向の砂利敷通路である。SB1556からは約4.5m離れている。幅約0.9m、長さ約6m分を検出した。両側にやや大振りの石を並べ、中に砂利を敷き詰めたものだが、南の側石は遺存しない。

SD1733 SB1720とSS1728の間を南北に走る石組溝である。南の延長方向にはⅠ遺構面で検出したSD1570が溝幅分食い違っていて存在し、作り変えられたものとする。一方、北方向の延長についてはⅡ遺構面の段階において明らかでないが、ⅢないしⅣ遺構面の段階には東へ折れ曲がり、SD1734を経てSD1735につながっていたと推定する。

SA1749 東西方向に1.2m間隔で5m分杭が並んでおり、柵列と判断した。これに沿って石列SX1814があり、その南側に石列SX1813やSX1815が認められる。いずれも礎石とは考え難く、性格は判然としない。なお、SD1574とSD1576に囲まれたこの部分は、SD1576を越えた南側とは整地状態が異なり、B2区の中でもやや性格の異なる地区であろう。

Ⅲ遺構面

B1区で礎石建物SB1716～1719・1721等を、B2区で礎石建物SB1726や砂利敷通路SS1729等を検出した。いずれも断片的な確認にとどまる。

SB1716～1719 I遺構面で検出したSB1555の真下に位置する礎石建物である。SB1555の礎石を残した状態であることもあり、検出できた各建物の礎石は少ない。同一面に据えられたこれらの礎石は、火災により炭化した床材とみられる藁や竹、板に覆われていた。礎石列のわずかなズレ等から遺構番号を分けたが、全てが別々の建物とは考えられず、根太SX1785の存在等から少なくともSB1717とSB1718は同一の建物の可能性が高い。SX1785は自然木を利用した転根太で、0.85～0.9m間隔で浅い溝を掘って据えられている。その他、SB1716付近に石敷SX1780、SB1719付近に砂利敷SX1783、SB1717・1718付近に四角い木枠の中に挿録(第20図154)を埋置したSX1786等を検出したが、建物との関係は不明である。

SB1721 SB1719の東に隣接する礎石建物である。Ⅱ遺構面に属すSX1662の下層で検出した。規模は東西4.7m(2.5間)、南北5.6m(3間)を測る。建物内には転根太の一部が遺存していた。

SD1731 L字をなす石組溝で、礎石建物SB1717とSB1721の南落溝を兼ねる。SB1721側は溝石が乱れており不明な部分もあるが、SD1571に流れ込んでいたものと考えられる。なお、溝の南端には越前焼の甕の破片を敷き詰めたSX1787がある。

SB1726 SB1556の下層に位置する礎石建物で、規模は不明である。南側には遺構が認められない一方、北側には砂利敷SX1805や灰層があることから、建物は北側へ広がっていたと推定している。軸方向は上層のSB1556と同様とみられる。

SS1729 B2区の南東部で検出した幅約1.3mの砂利敷通路である。三叉路になっており、東と北西方向は交差点から6m程で途切れている。南方向は調査区外へ延びているが、第46次調査では確認できなかった。調査区境付近では砂利が薄くなっていることから、その付近でやはり途切れるのかもしれない。南方向と東方向とは直角に交差しており、囲まれた所には礎石らしい石が認められる。また、交差点西側に南方向の通路に沿って柵列SA1748がある。

SD1736 B2区の東部、上層のSD1576と同じ方向に流れる石組溝で、東半分は壊れているがSD1738に流れ込んでいる形跡がある。付近には石敷SX1810・1811、石積施設SF1743等があり、南側には礎石らしい石も認められる(SB1724)。なお、SD1738とその南の延長方向で検出したSD1737とは、方向が一致するものの、構造が異なっており、同一の溝かどうかは不明である。また、これらはⅢ遺構面に属するものとしたが、直接的には証明できない。特にSD1737・1738はⅣ遺構面に属す可能性がある。

C区の遺構(第1・2・5、PL.15～17)

I遺構面

石組溝SD1573により、東西2つの小区画に分けることができる。

西側の区画は間口5m、奥行17.5mを測る。東西道路SS493に面する北半部に礎石建物SB1557が、南

半部に井戸SE1597や石積施設SF1608・1609等がある。

東側の区画は間口7m、奥行16mを測る。区画の東側中程に石積施設SF1610がある。建物は不明である。

SD1573 C区を東西に分かつ溝としたが、検出できたのは南端の約5m分のみである。南端ではSD1572に合流する。北側の延長方向は下層遺構面で石組溝SD1735を検出しており、同一位置で溝を嵩上げて両区画が維持されたものと判断した。

SB1557 西側区画の間口一杯に建っていたと考えられる礎石建物である。北辺はSD501、西辺はSD1571の溝石を兼ねている。東・南辺の礎石は遺存していない。建物の奥行としては、南にある井戸SE1597を屋内とみるか屋外とみるかで異なるが、この井戸とさらに南にある石積施設SF1609が砂利敷通路SS1629で結ばれていることを考えると、屋外とみるのが妥当であろう。だとすれば、建物の奥行は遺存している西辺の礎石列7.5mを大きく越えることはない。

SF1608 西側区画の南端に位置する石積施設である。東壁の上部の石積は大きく崩れていた。規模は東西1.9m、南北1m、深さ1.7mを測る。

SF1609 西側区画の南東部に位置する石積施設である。東西0.5m、南北0.9m、深さ0.6mを測る。北壁から約0.3mの所に紐で編んだ丸竹を立て、内部を仕切っている。

SF1610 東側区画の東側中程、SD1572に近接して位置する石積施設である。東と南の石積を欠き、内部は黄色土で埋められていた。規模は東西1m、南北1.2m、深さ0.4mを測る。

II 遺構面

石組溝SD1735により、I遺構面と同様の小区画に分かれる。西側の区画には建物の床材が一部焼け残っており(SX1838)、その南に砂利敷SX1794がある。東側の区画で遺構は確認できなかった。

SX1838 西側の区画に建っていた建物の床材が焼け残ったものである(PL15・16)。その状況から、床は桁行・梁行方向とも約0.85m間隔に根太を置き、その上に板を張っていたようである。礎石は一石しか確認できなかったが、これまでの例から建物は間口一杯に建っていたと推定できる。そして、東寄りの半間は床が存在した痕跡がなく、堅く叩き締まっていることから、通路であったと考えられる。また、建物の奥行を床の痕跡がある所までとし、砂利敷SX1794を屋外に想定すると、間口2.5間、奥行3間で東に半間の通り抜けた通路が付いた建物が復元できる。

IV 遺構面

I・II遺構面と同様、東西2つの区画に分かれるが、南端が石組溝SD1734で区画されることから、西側の区画の奥行は15mと若干短くなる。西側の区画では礎石建物SB1722、東側の区画では礎石建物SB1723を検出した。

SB1722 SX1838の下層に位置する礎石建物で、間口4.7m(2.5間)、奥行5.6m(3間)を測る。建物北辺とその前を走る石組溝SD501とが平行でないため、建物の北西隅は溝際にあるが、北東隅では溝との間隔が1m程生じている。敷地の奥では新たな遺構は確認していないが、他の例から推定すると、井戸SE1597はこの段階には既に存在し、敷地の嵩上げに伴い石が積み足されてI遺構面の段階まで存続した可能性がある。なお、敷地の西を区画する石組溝SD1571は途中までしかなく、それより奥は石列SX1790によって区画されている。

SB1723 間口5.6mを測る礎石建物である。奥行は判然としませんが、7.5m(4間)と推定する。間口は前の溝SD501に方向を描えており、梁行方向とは直角にならない。床は全体に藁を敷き詰めている。東側半間分は粘質土を叩き締めた跡があり、SX1838と同様に通り土間の可能性がある。敷地の奥はSX1799付近に礎石らしき石があり、砂利や土が互層になっている所も認められることから、建物が存在したのかも知れない。

D 1 区の遺構(第1・2・5、PL.18～21)

I 遺構面

石組溝SD1578およびSD1579により、東西道路SS493に面して並ぶ3つの小区画に分かれる。

西側の区画は間口7m、奥行13.5mを測る。奥(南辺)が約10mと間口(北辺)より広く、台形の区画となっている。建物は不明だが、北半部に井戸SE1599、炉SX1674を有し、他に石積施設を破壊したものとみられるSX1675がある。中央部に石組溝SD1577が東西方向に延びており、その南側は粗い小砂利敷SX1678になっている。なお、北半部の遺構面は溝以南の遺構面より低く、時期を異にする可能性がある。また、この区画の北辺には道路側溝が延びてかず、石列SX1672・1673が構築されている。

中央の区画は間口6m、奥行14mを測る。北半部に礎石建物SB1558、南半部に井戸SE1600、石積施設SF1611・1612がある。SE1600とSF1612の間には砂利敷SX1684が認められる。奥(南)側に隣接する区画との間には障壁SA1618がある。

東側の区画は間口8m、奥行16.5mを測り、北半部に井戸SE1601と石積施設SF581を有す。建物は不明である。

SX1674 西側区画の北西部で検出した炉跡である。三方を笏谷石、一方を河原石で囲んだ長さ14m、幅0.75mの長方形をなす。底は二段になっており、深さは高い部分が0.2m、低い方が0.3mを測る。高い部分には笏谷石を敷いており、中には焼土と灰が詰まっていた。

SB1558 中央区画の北半部に建つ間口5.6m(3間)の礎石建物である。西辺の礎石はSD1578、東辺の礎石はSD1579の溝石を兼ねているが、前者は遺存状況が悪く判然としない。北辺は道路側溝SD1590から1.7m程奥にあったと想定される。建物の奥行も明らかでないが、井戸SE1600を墨外とみると約6.6m(3.5間)、屋内とみると9m以上になる。

SE1600 SB1558の南東、SD1579に近接した位置にある石積井戸である。口径0.6m弱で非常に小さい。

SF1611 中央区画の南端付近に位置する石積施設である。平面規模は0.9m四方の正方形をなし、深さは0.5mを測る。西側に踏石とみられる四角い石を配している。なお、SF1611は小砂利で覆われていたことから、これを廃棄した後、東側のSF1612を使用したと推定する。

SF1612 中央区画の南東隅に位置する石積施設である。東西1m、南北0.8m、深さ0.6mを測る。西壁に横木を組み込んでおり特異である。

SE1601 東側区画の東辺中程に位置する石積井戸である。方形に近い形状で口径0.5mを測る。東側に洗場とみられる石敷SX1706が付属する。

II 遺構面

D 1 区および後述のD 2 区は一つの大きな区画として把握できる。北半にあたるD 1 区では西側に礎石建物SB1725、東側にSB1559がある。区画の北辺、東西道路SS493との境には土塁SA1752が走る。

SB1725 I遺構面においてD1区を分割する石組溝SD1578の下層で検出した礎石建物である。東西・南北とも約5mの範囲を確認したが、本来の規模は不明である。

SB1559 東西3.8m(2間)、南北7.4m(4間)を測る礎石建物である。建物の西辺はI遺構面のSD1579の側石と重複しており、当初は溝石と礎石を兼用したI遺構面の建物と考えていたが、下層の調査において溝石の下で礎石列を検出したため、認識を改めた。この建物は礎石の周りに黄色粘土を帯状に敷いて固定しており、この付近が焼土による整地で地盤が緩かったためとも推測できる。

D2区の遺構(第1・2・8区、PL.22・23)

I遺構面

石組溝SD1583および道路SS1566を結ぶラインにより、南北2つの小区画に分かれる。北側区画の東端は明確ではないが、両区画とも東西約17m、南北約6.5mとほぼ同規模である。この時期の遺構としては北側区画の中央に位置する井戸SE1602が唯一である。

II遺構面

前述のように、D1区と合わせて一つの大きな区画として把握できる。その南半にあたるD2区では南に寄せて礎石建物SB1560があり、それに付随する遺構群が周囲に認められる。

SB1560 東西9.4m(5間)、南北8.8m(4.7間)を測る正方形に近い礎石建物である。細かい粘質土で整地した上に礎石を据えている。南を除く三方の端の柱間は1.5mと狭く、この部分は広縁と推測される。建物の南東隅に2m四方の張り出し部SX1692があり、砂利敷となっている。SX1692はSB1560と接する部分の礎石を別に設置していることから、後に増築されたのかもしれない。SB1560は火災で焼失したらしく、柱の跡がはっきりと残っている礎石がある。また、SX1692の東にある溝SD1593からは屋根材と思しき炭化した板や葦の束が出土した。さらにその東の土坑SK1627・1628は黒い焼土で埋まっており、土師質皿を中心に多量の遺物が出土している。中でも特筆すべき遺物として紫色をしたガラス小皿(第39図575)がある。なお、I遺構面とした井戸SE1602はこの段階で既に存在した可能性がある。

D3区の遺構(第1・2区、PL.22・23)

I遺構面

南に接する第46次調査区も含め、20～100㎡程度の小規模区画群を形成する。当調査区内では、南北の石組溝SD1586の西側に2区画、東側に1区画が認められるが、西側2区画の内の南側については、ほとんどが当調査区外である。いずれの区画内でもこの段階の建物は不明だが、東側区画の南西隅に井戸SE1603が認められる。

II遺構面

石組溝SD1586の東側の区画はI遺構面と同様だが、西側は一つの区画と把握できる。西側の区画には礎石建物SB1561が、東側の区画にはSB1562がある。

SB1561 西側区画の北端に位置する礎石建物である。東・西辺の礎石が不明だが、東西6～8m、南北約5mの規模と想定される。

SB1562 東側区画の中央部に並ぶ4個の礎石以外は明確でない。区画一杯に建っていたとすれば東西約

6mの規模となる。南西部に井戸SF1603があり、これを屋外とみると南北も7mを越えることはない。中央部礎石列の南側には笏谷石製の炉SX1701(第46図707)があり、その付近は藁と粘土が何層も互層になっていることから、藁敷きの土間であったと考えられる。

E区の遺構(第1・2図、PL24)

I遺構面

本章の冒頭で述べたように第36次調査で検出した小区画群の一部にあたり、6区画分が当調査区にかかっている。各区画の全体については既に報告されているため(『鯖江・美山線』)、ここでは当調査区で検出した遺構についてのみ個別に取り上げる。なお、各区画の呼称については第36次調査の報告にしたがい、南から36-10～15とする。



押図7 SF1617(東壁)

SF1617 36-10の北西隅で検出した石積施設である。東西1.8m、南北1.0m、深さ1.0mを測り、6段

程度の石積をもつ。西側短辺の石積は大きく崩れていたが、東側では石積上部に横木をかませた様子が見え(押図7)、さらに長辺の両側に径15cmほどの杭を3、4本ずつ底に打ち込んでいた。埋土は有機質の泥土であり、多数の板材に混じて便器の一部である「金隠」(第48図738)が出土した。このことから、石積施設に床板を渡して金隠をはめ込み、上に簡素な小屋をかけた便所が復元される。

SF1745 36-11の北西隅で検出した石積施設である。東西0.8m、南北1.0m、深さ0.6mを測る。石積は3段程度である。

SF1746 36-12の北西隅で検出した石積施設である。東西0.9m、南北1.2mを測る。深さと石積の段数は損壊のため不明だが、深さ0.4mで3段程度と推定される。

SF1747 36-13の西端で検出した石積施設である。東西0.6m、南北0.8mを測る。深さと石積の段数は損壊のため不明だが、深さ0.4mで2段程度と推定される。

SF1616 36-14の南西隅で検出した石積施設である。損壊により不明だが、東西0.7m、南北1.4m、深さ0.5mで3段程度の石積と推定される。

SF1615 36-14の北西隅で検出した石積施設である。東西1.1m、南北1.0mを測る。深さと石積の段数は損壊のため不明だが、深さ0.3mで1段と推定される。

SF1614 36-15の北西部で検出した石積施設である。東西2.8m、南北0.8m、深さ0.6mを測る。石積は4段程度で、南辺中央部に杭が1本残存していた。

SF1613 36-15の北西隅、SF1614の北に位置する石積施設である。東西0.9m、南北1.4m、深さ0.45mを測る。SF1614とは長軸が直交し、L字の配置となっている。石積は3段程度である。

IV 遺物

第40次発掘調査出土遺物は総数88,466点で、その内訳は表2に示したとおりである

表2 出土遺物一覽表

器種	鏡片数	%	器種	鏡片数	%	器種	鏡片数	%	器種	鏡片数	%	
副 前 焼	箸	9,14	甕 埴 土	城	407	釘	釘	154	木 製 品	漆塗碗	52	
	立	6,149		埴	644		目釘釘	1		漆塗皿	11	
	鉢	1,077		林	261		鋸	12		漆塗盆	3	
	漆鉢	48.8		繁	14		鍔金	1		漆塗船	2	
	瓦器	6		燈	2		門	1		漆塗製品	16	
	鏡	3		魚	6		瀧止	1		漆	2	
	瓦缶	3		管管	40		打鑿	1		漆	1	
	漆器	3		蓆	1		引下金具	2		門簾形神器	1	
	計	23,183		23.88	その他、不明		115	漆付金具		1	折敷	9
	土 陶 瓦	皿		53,675	小計		1,284	鍔金具		10	曲物	22
大皿		3	鏡	17	漆	4	柄杓	5				
耳皿		30	皿	2,723	織	1	漆器板	4				
土蓋		262	坪	36	陶手次	2	釣籠	3				
土鈴		60	皿	1	口金	2	漆	2				
土鉢		6	香炉	2	手笥	1	蓋	24				
打石押入		1	その他、不明	2	漆	1	漆約	1				
ハコ		9	小計	2,781	蓋	1	漆	15				
阿波		1	鏡	667	紡錘	4	下駄	74				
その他、不明		9	皿	1,622	鏡	2	漆口クロ	1				
計	54,069	61.11	環	13	鉄	5	刀下割	2				
日本 製 陶 器	鏡	1,026	中 國 製 陶 器	鉢	11	公 衆 器 具	五徳	18	漆	刀子割	2	
	皿	32		碗	6		箸	3		付丸	1	
	坪	2		鉢	1		漆	5		引下鉄	1	
	鉢	8		漆	6		漆	6		羽状物	3	
	立	196		ハコ	2,937		漆子把手	1		刀形	1	
	高入	33		鏡	1		漆	1		身取	1	
	徳利	7		茶入	3		六部	1		船形皿	1	
	仏花瓶	1		ハコ	7		香炉	3		下岸皿	1	
	水筒・水注	8		香爐	1		鈴	1		香炉	1	
	香炉	4		漆碗	1		釘刀	1		漆	2	
その他、不明	362	漆物	8	刀子	5	漆手	1					
小計	1,637	煎鍋	5	口金物	2	皿	1					
瀬 川 ・ 美 濃 焼	鏡	93	明 針 製 陶 器	計	6,287	石 製 品	石臼	2	漆	金鐘	1	
	皿	986		陶器	水注		6	陶器		1	その他、不明	83
	坪	1		碗	14		鍔子金具	1		計	250	
	鉢	1		皿	1		小皿	12		竹角製陶器	6	
	鉢	3		小計	15		釘	1		ガラス皿	1	
	盆	9		碗	26		釘	1		正徳ハコ	1	
	仏花瓶	1		鉢	2		漆	7		漆製刀鍔品	1	
	香炉	35		徳利	4		漆白ロ	2		漆器	3	
	蓋	1		その他、不明	128		漆貨	559		漆	1	
	その他、不明	14		小計	163		サカル	4		高化紙	1	
小計	1,144	計	186	漆座	1	漆	2					
東 海 道 焼	鏡	25	外 産 品 合 計	外産品 合計	6,678	漆	その他、不明	72	漆	漆	3	
	皿	1		計	936		漆上	9		漆	9	
	水注	1		碗	152		鏡	18		漆	3	
	漆水	1		鉢	116		鉄石	1		漆	1	
	小計	28		小計	522		バンドコ	22		漆	1	
	鏡	2		鉢	22		鉢	22		漆	4	
	皿	14		漆	3		花紙	1		漆	10	
	小計	16		計	72		釘	3		計	7	
	香炉	7		外産品	186		陶器	26		漆	1	
	計	2,852		3.22	計		186	茶付		3	漆	3
瓦 質	香炉	73	石 製 品 合 計	石製品	1,006	漆	漆	211	漆	漆	10	
	鉢	3		鏡	152		陶器	26		漆	9	
	瓦蓋	7		鉢	116		茶付	3		漆	1	
	湯呑	13		小計	522		サカル	1		漆	1	
	その他、不明	28		鉢	22		乳鉢	1		漆	1	
	計	124		漆	3		棟状石製品	2		漆	6	
	漆座・漆塗・漆箔	37		鐵石	1		棟状石製品	6		漆	6	
磁器 合計	78,202	88.39		五徳	4		漆	6				
瓦器、その他	478	0.54		新谷石片	2		漆	1				
漆	186	0.21		その他	1006		漆	1				
計	78,680	88.93	計	1,866	2.11	計	100					
漆	1,866	2.11	漆	1,866	2.11	計	100					

※須恵器・産地不明陶磁器含む

調査面積3,000㎡に対する1㎡の平均出土点数は29.5点で、一乗谷ではかなり多い部類に属す。後世の削平の程度が少なかったことに加え、下層を比較的広範囲に調査したことがその理由の一つとしてあげられよう。内訳をみると、出土数の9割以上は土器・陶磁器であり、その6割を土師質皿が占めている。また、遺物量相応に、金属や木製品、石製品も数多く出土しており、北国船の模型など他地区で類例のない、あるいは極めて少ない資料も認められる。中でも石積施設の一つから「金隠」と呼ばれる板材が出土し、その多くが便所であるとの確証に至ったことは大きな成果であった。

遺物の報告にあたっては、まず、遺物台帳により出土グリッドと遺構面を参照し、A～E区(排他的に隣接する溝も含む)、Ⅰ～Ⅲ遺構面(各遺構面を覆う整地土および各遺構面に属す遺構埋土)に分けた。その際、グリッドが隣接区画にまたがり、いずれかの区画に帰属させえなかった遺物もある。また、特に陶磁器類において接合した破片が異なる区画にまたがる場合は、残存率のより大きい方に帰属させた。同程度のため判断に迷ったものもあり、これらはその他として一括した。一方、遺構面をまたがって接合したものは残存率を問わず基本的により下層の遺構面に帰属させた。なお、遺物台帳では遺構面が現地調査時の認識のまま記載されており、その後検出面相互の比較によって帰属する遺構面を決定した各遺構の情報が反映されていない。今回の報告にあたって可能な限り整合させるよう努めたが、諸種の制約により多くはかなわなかった。また、掲載資料について、越前焼の甕については整理が十分でなく、調査区全体である程度バラエティを描えるにとどめたため、各区画の様相を反映できていない。さらに膨大な量が出土している土師質皿については、石積施設など遺構から出土した完形もしくはそれに近い一括資料を中心に抽出し、バラエティの不足を整地土などからの出土資料で補うこととした。

上記の整理により、以下、はじめにA～E区ごとにⅠ遺構面、Ⅱ遺構面の順に記述する。次に特定の区画に帰属させることができなかった遺物を同じくⅠ遺構面、Ⅱ遺構面の順に記述する。そして、Ⅲ遺構面として取り上げられた遺物をまとめて記述する。最後に水田の床土から出土、あるいは排土から採取した遺物など、区画や遺構面を特定できない遺物、および写真のみ掲載した遺物をまとめて記述する。なお、銭貨については便宜上別に図版を組んだ。

遺物の分類は、越前焼人甕・擂鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983、土師質皿は『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979、瀬戸・美濃焼は『瀬戸市史 陶磁史編 Ⅳ』1993、中国製陶磁器は『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁』1993に準拠する。

A区Ⅰ遺構面出土遺物(第11～13・60図、PL25～27・74)

越前焼 1は頸部が短く立ち上がる短頸甕で、口縁に水平な面をもち、肩部に突帯が巡る。2は口頸部の直立する四耳甕で、口縁は玉縁状に折り返し丸く仕上げている。3は擂鉢Ⅳ群で、9条1単位の摺目を密に施す。4は卸皿で、卸目は8条1単位である。5は片口をもつ鉢で、体部内面に柳状工具による同心弧を複数重ね、波状および同心円を描いている。

土師質土器 6～11は皿で、6・7がC類、8～11がD類に属す。7・9にはタール痕が認められる。

瀬戸・美濃焼 12は鉄軸を施す小天目碗で、削り出し輪高台をもつ。高台周辺には比較的濃い錆軸を施している。13は同じく水注で、注口部には鉄片が詰まっている。14～16・18は灰釉を施すものである。14は全面施釉の平碗で、底部が非常に薄く、高台を削り成形したものと考えられる。15・16は腰折皿である。見込にトチン跡が3箇所認められる。16は体部以下の器壁が厚く、腰折れも鈍い。18は大皿である。17は緑釉を施した皿で、印花文をもつ。高台内には輪ドナ跡が残る。

中国製陶磁器 19～27は白磁で、19は直口、20・21は端反りの皿である。23は胎土、釉、成形とも良質な輪花鉢で、内面は凸線、外面は凹線で弁間の稜を表現している。外面に「鳳鳴鉢」と呼ばれる、鉄の鏝による接合痕がある。24～27は小杯で、26は高台内に「福」銘をもつ。28～32は染付である。28は腰折れの碗で、外面と見込みに梅月文を描く。一乗谷では類例が少ない。29・30は端反りの皿B1群で、外面に牡丹唐草文、見込みに玉獅子文を描く。32は見込に「福」字を書く碗で華南系とみられる。

朝鮮製陶磁器 33は雑釉碗である。見込と畳付にそれぞれ4箇所以上の砂目跡が残る。

金属製品 34は小柄、985～987は銅銭である。

石製品 35～38は硯で、38が隅丸の形状である他はいずれも長方形のものである。39は小形のバンドコの蓋で、平面楕円形を呈し、中央部に長方形の窓をもつ。40は鍋の縁に引っ掛けて安定させるためのサルと呼ばれる道具である。下部に煤が帯状に付着している。

A区Ⅱ遺構面出土遺物(第13・14・60図、PL27・28・74)

越前焼 41・42は大甕である。41はIV群、42は皿群に属す。43はIV群の摺鉢で、7条1単位の掃目を間隔広く施す。44は鉢で、黒色の付着物を拭ったような痕跡が内外面に認められる。

土師質土器 45～56は皿で、55を除きSF1741から出土したものである。45はA類、46～50はC類、51～56はD類に属す。50は内外に墨書をもち、底外面中央部は「伴衆」と読める。57は小甕である。

瀬戸・美濃焼 58～60は鉄釉を施すものである。58は小天目碗で、内反り高台をもつ。59は水注で、小瓶に把手と注口を付した器形である。60は壺で、底外面には糸切り痕が残る。61～64は灰釉を施すもので、61は端反皿、62～64は腰折皿である。62・63の見込には輪ドチ跡が認められる。65は緑釉を施した丸皿である。

瓦質土器 66は香炉である。無文で口縁は外反する。

中国製陶磁器 67は白磁の後花皿である。鈔皿のような器形で、胴下部を丸盤状の加工具で菊花状に仕上げている。40次調査区ではD1区東端の区画でまとまって出土しているが、他調査区での類例は少ない。68～70は染付の碗で、68・69がB群、70がC群に属す。

朝鮮製陶磁器 71は雑釉碗である。

金属製品 988～995は銅銭である。一乗谷で希少な銭種として995の紹熙元寶がある。

木製品 72は歯と後緒穴のない板状の製品で、草履の鼻緒を通して一体で使用する「雪下駄」と呼ばれるものである。緒穴の周囲に足指の圧痕が、踵側裏面の両側面に横緒が擦れたことによる摩耗が認められる。なお、後者については、横緒が切れるのを防ぐため、元々角を落としていた可能性もある。

石製品 73・74は砥石である。右質から仕上げ砥と考えられる。75は平面D形を呈すバンドコの蓋である。76は球状の石製品で、直径の1/4ほどの深さの穴がある。穴の反対側は平坦面を形成し、掘わりよくなっている。用途不明だが、念珠挽きの錐の重石とも推測されている(正報Ⅱ.22頁)。

B区Ⅰ遺構面出土遺物(第15～18・25・60図、PL29～32・74)

越前焼 77～79は大甕で、78が皿群、他はIV群に属す。いずれも体部に押印が巡り、77にはヘラ記号も認められる。80・81は中甕で、いずれもヘラ記号をもつ。81には押印も認められる。82～84は壺である。82にはヘラ記号が認められる。85は鉢で、縦方向の粗いヘラ削り痕を鍋状の意匠として残したものと考えられる。86は小形の桶である。

土師貫皿 87～94は皿で、87・88を除きSF1605から出土したものである。87～92はB類で、半数に明瞭な布目痕が認められる。93・94はC類に属す。

瀬戸・美濃焼 95～97は鉄釉を施すものである。97は四耳壺で、一般に「祖母懷茶壺」と呼ばれ、底部にヘラで「祖母懷」と刻んでいる。素地は灰色の祖母懷上で薄手に挽き上げる。黒褐色の鉄釉をハケ塗りしているが、釉層は薄く、釉むらが著しい。98は黄瀬戸釉を施す平碗である。削り出し輪高台で、高台周辺には錆釉を施す。同様のものは調査区全体で8個体分出上しており、Ⅱ遺構面にもみられる。99～103は灰釉を施すものである。99は体部内面に丸壺状の工具で刻文(ソギ)を入れた丸皿で、破断面に漆による接着痕が残る。100は腰折皿で、見込にトチン跡が残る。101は140のバンドコ内に収納されていた端反皿で、印花文をもつ。102は丸皿、103は筒形香がである。

中国製陶磁器 104～110は青磁である。104は龍泉窯系B4類の蓮弁文碗で、蓮弁は剣先を波状に、弁間を線刻で無造作に表現する。見込みには「富」字の周囲に蓮弁を配した印花文をもつ。107・108は140のバンドコ内に収納されていた皿である。非常に良質な胎土を用い、端正な作りである。ロクロは逆時計方向で、軸は淡く、見込みと外面下部は露胎のままとしている。広東・福建省方面産と考えられ、類例は少ない。110はいわゆる青磁下蒸瓶で、宋代の作と考えられる。破断面に漆による接着痕が認められる。111～115は白磁の皿、116～118は小坏である。111～114は端反りの皿で、111は140のバンドコ内に収納されていた。113は見込の軸を蛇の目状に剃いで露胎となった部分を赤く塗っている。119～122は染付である。119は140のバンドコ内に収納されていたE群の碗で「宣徳年製」銘をもつ。外面四方に牡丹と雲文を幾何学的に配している。121・122は染付の壺とその蓋で、簡略化された文様をもつ。123は黒釉を施した禾目の天目茶碗である。立ち上がりが高く、口縁のひねり返しは弱い。口縁には覆輪の痕跡が残る。胎土は灰白色の磁質に近く、軸は厚い。高台はわずかに凹面を呈し、ヘラでおこしている。ロクロの回転は逆時計方向である。124は褐釉を施した肩衝茶人、125は壺である。

朝鮮製陶磁器 126・127は白磁碗、128・129は雑輪碗である。128には5箇所、129には8箇所の目跡がそれぞれ見込と畳付にみられる。130は口縁を玉縁状に肥厚させた鉢である。

金屬製品 131は鉄の刃先、132は鉄鍋、133・134は鉄鏝、135は弾丸である。273(第25図)は手斧で、柄上部に鉄製の楔が残り、柄内には木製柄の断片も遺存していた。大きさと形状から石工用と推測される。996～1011は銅銭である。

石製品 136は砥石で、仕上砥とみられる。137・138は茶臼の上臼で、挽木孔の周囲に菱形の台座文様をもつ。白目は8分面である。139・140はバンドコの蓋と身である。蓋が較ざった状態で出土し、内部から灰釉皿(101)、青磁皿(107・108)、白磁皿(111)、染付碗(119)の完形陶磁器5点が見つかった。141は花瓶、142は石仏、143は用途不明の台座状製品である。

B区Ⅱ遺構面出土遺物(第18～27・60～63図、Pl.32～41・74・75)

越前焼 144～146はⅣ群の大甕である。いずれも押印をもち、146にはヘラ記号も認められる。147は中甕である。148・149は肩部下に突帯が巡る短頸甕である。ヘラ記号をもつ149には鉄片の塊が入っていた。150～153は壺で、いずれにもヘラ記号が認められる。大形の150は片口をもつ。小形の151～153はいわゆるお歯黒壺で、152の底には厚い付着物が認められる。155～159は撞鉢で、いずれもⅣ群に属す。155には扇形の同心弧文が認められる。160は破片の周囲を打ち欠いて成形した円盤である。

土師黄土器 161～183は皿である。161・162はB類で、162には布目痕がよく残る。163はA類、164

～181はC類に属し、半数以上にタール痕が認められる。なお、口径6～7cm前後の皿については、I遺構面ではB類、II遺構面ではC類が目立つ。182・183はD類に属す。182の底外面には墨書が認められ、一部は「せた」と読める。184は土釜、185・186は小壺、187・188は灯芯押えである。

瀬戸・美濃焼 189～201は鉄釉を施すものである。189～192は天目茶碗で、189・192は削り出し輪高台、他は内反り高台をもつ。高台周辺の錆釉は189・191がやや濃く、他は薄い。193・194は丸皿で、194は見込にトチン、高台内に輪ドチの痕跡が認められる。195・196は徳利、197は小瓶、198は水滴、199は片口鉢、200・201は建水である。197の底面は糸切り痕未調整で、漆もしくは膠様の付着物が認められる。202～227は灰釉を施すものである。202～204は平碗で、203・204はヘラ彫りで蓮弁文を描く。202の高台内には輪ドチ跡が残る。205～209は丸碗で、207・208の高台内には輪ドチ跡が残る。210～216は端反皿で、多くは見込に印花、高台内に輪ドチ跡が認められる。217～221は丸皿で、218・219は内面に丸彫りの刻文(ソギ)を施すものである。222～224は反皿で、いずれも印花文をもつ。225は後花皿で、高台内に輪ドチ跡が残る。226は口縁下に波状の櫛指文を配す無頸蓋で、底部に糸切り痕が残る。227は小坏で、算盤玉状の体部に小さなつまみが付く。鳥餌皿と考えるものである。

瓦質土器 228・229は香炉である。229の体部には渦状のスタンプ文が巡る。230・231は燈火具(瓦燈)の蓋と台部である。第54次調査でも同形態の蓋部と台部が出土している。蓋の頂部と台部の中央には灯明皿を載せる受け皿がつく。蓋部の皿底には蓋内に抜ける穴があり、灯明の油をためない工夫とみられる。蓋部には正面にあいた大きな窓と背面斜め上方にあいた小さな窓があり、台部の口縁から上へ延びる日隠板との兼ね合いで調光したものと考えられる。なお、231は破片2点のみで日隠板の痕跡も残っていないが、第54次調査の報告(正報Ⅱ51頁)に倣い230とセットになるよう復元した。

須惠器 232・233は須惠器の坏蓋と高坏である。いずれも古墳時代、6世紀後半のものとみられる。

中国製陶磁器 234～239は青磁である。234は龍泉窯系B4類の碗、235・236は内面に草花文をもつ椀花皿、237は輪花皿、238は直口の皿、239は筒形香炉である。240～249は白磁である。240～243は端反りの皿、244・245は菊皿、246は大皿、247は萵筍底で体部が外反する皿、248・249は小坏である。245・247の破断面には漆継ぎ痕が認められる。250～262は染付である。250はB群、251はC群の碗で、251の破断面には漆継ぎ痕が認められる。252は見込の浅い碗で、外面に大振りの唐草文、見込に「福」字をもつ。華南系とみられる。253～258は端反りの皿で、253～256はB1群、257・258はB2群に属す。259・260は萵筍底の皿C群で、259は華南系とみられる。261・262は大皿である。262はいわゆる鈿皿で、体部に丸彫りの溝を縦方向に施している。

朝鮮製陶磁器 263・264は雑釉陶器の碗である。264の畳付には目跡が残る。

産地不明陶磁器 265は鉢である。輪積み痕が顕著で、体部上半にのみ施釉している。

金属製品 266～269は建築金具である。266は門金具、267は壺金、268は錠、269は錠前の部品で、いずれも鉄製とみられる。270は箸としたが、頭部側が緩く湾曲しており、転用の可能性がある。271・272は錠である。272は木製柄が取り付けいた状態で出土したが、現在は失われている。274～276は容器類で、274は水滴、275は六器、276は菊皿である。276には赤色の付着物があり、紅皿として使用したものとみられる。277～281は武器類である。277は斧で、丸で囲んだ草花文を4箇所配置し、間を魚々子で埋めている。278・279は小柄で、278は経通し孔をもつ。280は柄頭で、281の狼手金具と一緒に出土している。282は筋金具とみられ、幾何学的な毛彫文様を施している。283は銅鍍で、下半部のみ検出した。1012～1136は銅銭である。皇宋通寶や元豊通寶、元祐通寶などが比較的多く出土している。

乗谷で希少な錢種としては1068の至和通寶や1123の皇宋元寶、1124の至大通寶が認められる。

木製品 284～289は漆塗碗である。284～287は内外面黒地に赤で扇文や蓬葉文を描く。288・289は内外とも赤色で無文の類だが、289は口唇部のみ黒色である。290・291は漆塗皿で、内面は赤色で無文、外面は黒地に赤で蓬葉文を描く。292は外面黒漆塗の皿もしくは盤で、高台裏に「吉」の朱書がある。293・294は黒漆塗りの容器、295は同じく蓋である。295の頂部にはロクロ目がよく残る。296は桶類の底あるいは蓋で、合釘で接ぎ合わせて使用したものである。接合面に2個一対の合釘穴が認められる。297は箸、298～300はその他の棒状具で、断面方形の298・299は片端を筥状に薄く仕上げている。301は露卯下駄の台部、302は雪下駄である。

石製品 303～305は硯である。すべて長方硯で、305の裏面には「継旭」の線刻が認められる。306・307は砥石である。306には木質と漆様の付着物が、307には文字のような線刻が認められる。308は有溝砥石で、隣接する第36次調査区で確認された水晶製数珠玉の製作跡との関連が考えられる。309は乳棒である。310～314は笏石製品である。310・311は前記76と同様の球状製品だが、310はやや扁平な形状を呈す。312は平面長方形の盤で、四隅に脚が付く。313は粉挽臼の上臼で、白面が著しく偏ってすり減っている。314は分厚い円盤の中央に孔をもつもので、用途は不明である。

骨角製品 315は骨あるいは鹿角製とみられる双六の駒である。両面の中央に円形の窪みがあり、内部は黒くなっている。塗装とも回転穿孔時の摩擦による焦げともみえる。

C区Ⅰ遺構面出土遺物(第28・29・31・63図、PL42・43・75・76)

越前焼 316はⅣ群の播鉢で、播目は7条1単位である。

土師質土器 317～353は皿である。336を除きすべてSF1608から出土したものである。317～327はB類で、ほとんどにタール痕が認められる。320には布目痕がよく残る。328～344はC類で、やはり多くにタール痕が認められる。330は口縁を小さく打ち欠いてそこに灯芯を載せたようである。345～353はD類で半数にタール痕が認められる。

瀬戸・美濃焼 354・355は天目茶碗で、354は鉄釉、355は黄瀬戸釉を施す。いずれも内反り高台をもち、高台周辺には薄く鎗釉を施している。

中国製陶磁器 356～360は青磁である。356・357は稜花皿で、体部内面に草花文、見込に印花をもつ。358は八角形を呈す角皿、359は菊皿、360は筒形香炉である。361～363は白磁で、361は端反りの皿、362・363は小坏である。362は見込の釉を蛇の目状に剥いており、露胎部に漆様の付着物が認められる。364～366・414(第31図)は染付である。364は碗の高台部で、華南系とみられる。365・414は皿B1群である。365のように見込胎に界線がなく、内面全体に唐草文を描く例は少ない。366はF群の罍皿である。

金属製品 367・368は箸である。367は断面八角形で頭部に鋸歯状の刻文をもつ。368は断面出形で頭部は丸みを帯びる。1140～1146は銅銭である。一乗谷で希少な錢種として1146の大和通寶がある。

石製品 369は球状石製品、370は平面楕円形のバンドコ蓋で、いずれも笏石製である。

C区Ⅱ遺構面出土遺物(第29～35・64・65図、PL44～50・76)

越前焼 371・372はⅣ群の大甕で、いずれも肩部に押印が巡る。373・374は壺で、374にはヘラ記号が認められる。375・376はⅣ群、377はⅢ群の播鉢である。376にはヘラ記号が認められる。378・379は鉢である。播鉢と同形の378にはヘラ記号が認められる。

土師質土器 380～387は皿で、主にSD501から出土したものである。380～385はC類、386はG類、387はD類に属す。385は底外面に「せた」と読める歯書をもつ。口縁を打ち欠いて灯芯を載せたのみられ、そこにおみタール痕が認められる。387も見込に墨書が認められるが、文字なのかどうか明らかでない。388は灯芯押えで、タール痕が認められる。

瀬戸・美濃焼 389～394は鉄釉を施すものである。389・390は天目茶碗で、高台周辺の銷軸はいずれも薄い。391は小坏で、口縁部に厚く施釉する。392は丸皿で、見込に3箇所の特チン跡、底部外面に輪ドチ跡が認められる。393は鉢、394は徳利である。395～400は灰釉を施すものである。395は丸碗で、蓮弁文風の押印文をもつ。396～399は端反皿で、底部外面に輪ドチ跡が認められる。400は丸皿である。

瓦質土器 401は香炉である。体部に渦状のスタンプ文が巡る。

中国製陶磁器 402～404は青磁で、402は龍泉窯系統E類、403は同じくD類、404は菊皿である。405～411は白磁で、405は直口の皿、406は体部が外反する萐筍底の皿、407～409は端反りの皿、410は菊皿、411は小坏である。405は椀付から高台内、408は椀付の露胎部分を墨で黒く塗っているようである。412～413・415～422は染付で、412はE群、413はB群の碗、415～417はB1群、418はD群の皿である。417には漆継痕が認められる。419は端反りの皿で、口縁部形状と文様構成はB1群と同様だが、萐筍底となる。420も同類であろう。421・422は萐筍底の皿C群である。423は黒褐釉を施した茶入である。

朝鮮製陶磁器 424は白磁の皿である。見込と椀付に各4箇所の目跡が残る。

金属製品 425は天井や床板を固定するための目録釘で、赤色の付着物が認められる。426は飾金具で、小さな目録穴がある。427は六葉の釘隠で、中央部に直径3cmの円状に黒色漆が残っており、菊座が取り付いていたものと考えられる。428は鉢、429は菊皿である。430・431は刀装具の口金物で、430の側面には魚子地に果実文らしき文様が認められる。432は短刀である。刃区は認められない。433・434は小柄で、434には紐通し孔がある。1147～1220は銅銭で、熙寧元寶が比較的多く出土している。一乗谷で希少な銭種としては1175の治平通寶がある。

木製品 435～442は漆塗椀である。435は内面赤色、外面黒色で、外面に赤色で鶴・亀・松竹の文様を描いている。436～441は内外面黒地に赤色で蓮葉文などの文様を描く。442は端反りの椀で、内外面赤色の無文である。木胎にケヤキを用い、漆下地の上質品といえる。443は内外面黒色の漆塗皿で、口唇部に細かい刻み、体部に穿孔を施している。444は腰折れの漆塗容器で豆子とみられる。内面赤色、外面黒色(腰折部より上は赤色か)である。木胎はケヤキでやはり上質品といえる。445は粗くロクロ成形した壺である。447は刀柄で、2つ接してあいた目録穴のひとつを木でふさいでいる。448は刀子の鞘である。446・450・451は蓋底板で、450・451には接ぎ合わせのための合釘穴・木釘が認められる。452は結桶の側板で、蓋の圧痕が認められる。449は板状の部材で、対向する2側面に釘穴が並ぶ。453～455は箸である。456～458は露卯下駄で、台部の平面形が長方形に近いもの(456)と長円形のもの(457・458)がある。459・460は陰卯下駄で、台部に逆台形の納を彫り、その形状に合わせて接合部を成形した溝を横から差し込み「蝶鎌ぎ」方式を採用している。歯は著しく摩耗して短くなっている割に、台前後の摩耗は少ない。461～475は露卯下駄で、一部には線刻などによる模様が表示面に認められる。476は草履下駄の一種と考えられるもので、ヘギ板を加工した上板が一部残存しており、本体との間に植物繊維の痕跡が認められる。477は舟形で、ヒノキの板目材を削り抜いている。478は棒状の部材で、断面半円形の棒に穿孔し、木釘を差し込んでいる。

石製品 479は長方碗である。皿中央部は摩耗により深く窪み、穴さえあいている。480は方形盤の口縁

部破片とみられる。内外面とも平滑に仕上げられており、内面には煤らしき黒色の付着物が認められる。外面に「于時天文川辛亥年」[「月十六日敬(白)』と刻んでおり、出土したⅡ遺構面が天文20年(1551)以降であることを示している。481は平面D形のバンドコの蓋、482は平面楕円形のバンドコの身である。骨角製品 483は竹製の双六駒である。484は鹿角製で、刀装具などの未製品と考えられる。

D区Ⅰ遺構面出土遺物(第36～39・41・65～67図、PL51～54・76・77)

D区には帰属がⅠ遺構面からⅡ遺構面に改められた遺構が数多く存在する。土坑埋土のように出土場所が明白な遺物はそれに従って改めたが、整地土等については分別が困難であり、当初のままとした。よって、ここで報告する遺物にはⅡ遺構面に属するものを少なからず含んでいると想定される。

越前焼 485は中甕で、ヘラ記号が認められる。486・487はⅢ群の大甕で、486には押印が認められる。488・489は突帯をもつ短頸甕、490はⅣ群の播鉢である。

土師質土器 491～510・602(第41図)はⅢで、主にSD1574、SF1612から出土したものである。491～493はB類に属し、492・493には布目痕がよく残る。494・495・497～502・602はC類、496はA類、503～509はD類、510はG類に属す。496は内面のナダが粗く、板状工具によるものと考えられる。602は成形段階で口縁に抉りを作出しており、タール痕がその脇に認められる。また、焼成後に底部穿孔を施している。511は土釜、512は土鈴である。

瀬戸・美濃焼 513～518は鉄釉を施すものである。513・514は天日茶碗で、削り出し輪高台をもつ。高台脇の削り幅が狭く、高台内の削り込みも浅い。515は壺である。底部は露胎で、糸切り痕を残す。516は徳利、517・518は茶入である。519～522は灰釉を施すものである。519は丸甕で、高台内に輪ドチ跡が残る。520は端反皿、521は丸皿で、印花文をもつ。520の高台内には輪ドチ跡が残る。522は茶入の甕で、つまみ頂部と内面は露胎とする。523・524は須恵質で無釉の筒形香炉である。体部の上・中・下段に3本一組の平行沈線を巡らせ、底部には指で両側面をつまんだ三足を付す。内面と底外面には回転ヘラ削り調整の痕跡が明瞭に認められる。

瓦質土器 525は香炉で、体部に菊花のスタンプ文をもつ。

中国製陶磁器 526～532は青磁である。526は細い線描蓮弁文をもつ見込の浅い碗で、見込脇に沈線が巡る。527は小碗で、外面に2～3条単位の縦の刻線を間隔広く配す。高台以下は露胎で薬が附着している。528はやや端反りとなる皿、529は稜花皿である。530は袴腰香炉で、宋～元代の優品である。531は口が大きく開く鉢で、漆継痕が認められる。532は胎形の花甕で、觥をかたどった耳が付く。14世紀の南宋の製品とみられる。533は青白磁の輪花皿である。平面楕円形で、口縁が唇皿状となっている。534～541は白磁の皿、542～544は同じく小坏である。534～536は胴下部が菊花様となる稜花皿で、534には漆継ぎの痕跡が認められる。541は高台内に文字の朱書がある。545～551は染付で、545はC群、546はE群の碗、547～549はB1群、550はC群の皿、551は小坏である。550は華南系とみられる。

朝鮮製陶磁器 552・553は雑釉碗で、見込と壺付に各7ないし8箇所の目跡がある。554は青磁の水注で、把手や口縁部を欠く。注口部の直上と腰部に白象嵌の圏線を巡らせ、間を同じく兩滴文で埋めている。施釉は全面におよび、高台内には胎土目状の粘土塊が附着する。

産地不明陶磁器 555は竹節状の高台をもつ底部片である。壺付全体に重ね焼きの痕跡が認められる。

金属製品 556は鏝である。557は箸で、木柄を取り付けるための茎をもち、接着のための漆が附着している。558は熊丁状の金具である。爪は2本で、基部は鉤形をなす。559は毛抜である。560は香炉とみ

られ、口縁は内面が肥厚して玉縁となる。頸部外面に細い沈線が2条巡る。561～565は武器類で561・562は鉄鎌、563は弾丸、564は小柄、565は鞋である。566は丁形の金具で、用途は不明。567も用途不明のもので、断面略長方形のやや湾曲する棒状部から屈曲して薄く広がった板状部に別の薄い板材を重ねてかしている。仏具の常花などの可能性を考えている。1224～1282は銅銭である。皇宋通寶が最も多く、熙寧元寶がそれに次ぐ。一乗谷で希少な銭種として1273の正隆元寶、1274の淳熙元寶、1281の朝鮮通寶、1282の宣徳通寶がみられる。

木製品 569は雪下駄で、表面踵部に三角形の線刻をもつ。570は継手とみられる部材である。

石製品 571～574は砥石である。571・572は石質から荒砥とみられ、形状も近似する。573・574は中砥もしくは仕上げ砥とみられる。574は硯を転用しており、陸部であったところに文字線刻をもつ。

その他 568はSB1558の焼土面から出土した墨である。奈良の興福寺二諦坊で油煙を利用して作られたもので、表には蛟龍文様を、裏には「李家燵」の文字を型押しする。なお、同じ焼土面から「旨・自・入・啓」などの文字がみえる炭化紙片も出土している。

D 区Ⅱ遺構面出土遺物(第39～47・67・68図、PL55～60・77・78)

越前焼 576・577はⅣ群、578・579はⅢ群の大甕で、前者には押印、ヘラ記号が認められる。580は片口をもつ小壺で、ヘラ記号が認められる。581～583・585はⅣ群の甕鉢で、582には漆継ぎの痕跡が認められる。584は鉢で、胴部内面と見込に櫛状工具で描いた扇形の同心弧文をもつ。

土師質土器 586～601・603はⅢで、586はG類、587・588・601はB類、589～594はC類、595～600はD類に属す。603はH類の耳皿である。B・C類の多くにはタール痕が認められる。599・600には墨書があり、それぞれ「かへ」、「御大」と読める。また、601には「大門口」の線刻がある。なお、600の内面ナデは板状工具を用いているようである。604・605は土釜で、羽部以下には煤が付着する。606は小壺である。607は土鈴で、墨線を放射状に施している。608は円盤で、ⅢD類の底部を利用している。

瀬戸・美濃焼 609～613は天目茶碗で、612は黄瀬戸釉、他は鉄釉を施す。614～617も鉄釉を施すもので、614は丸皿、615は坏、616は水注、617は水滴である。618～630は灰釉を施すものである。618・619は丸碗で、618はヘラ彫りの蓮弁文、619は押印による蓮弁文風文様をもつ。620～624は端反皿で、620・621は印花文をもつ。622・623の高台内には輪ドチの痕跡が認められる。624の見込は施釉が及ばず露胎となっている。625は椀皿で、印花文をもつ。626・627は小形の丸皿である。628～630は椀皿で、底部内外に輪ドチの痕跡が認められる。629・630の印花やその周りには炭化物が付着している。

瓦質土器 631～633は香炉で、胴部にスタンプ文が巡る。

中国製陶磁器 634～637は青磁碗で、634・635は龍泉窯系碗B4類、636はE類、637はD類である。638～644は青磁皿で、638は椀花皿、639・640は輪花皿、641～644は菊皿である。645～658は白磁で、645は碗、646～648は直口の皿、649～654は端反りの皿、655は椀花皿、656～658は小坏である。651の体部内面には不明瞭ながら唐草文らしき型押し浮文が認められる。645・654には漆継ぎの痕跡が認められる。659～671は染付で、659～662は碗C群、663はⅢB1群、664～671はⅢC群である。

朝鮮製陶磁器 672・673は口縁が鈎状をなす鉢である。672は口縁部付近に薄く釉がかかっている。

金属製品 674は大型の鉄釘で、先端が振れている。上部には木質が付着している。675は箸で、持ち手部分の断面は長方形をなす。676は紡錘で、回転軸となる紡莖とその下部に取り付く皿形の紡輪からなる。紡莖は紡輪との接合部より上部がS字状に振じれている。また、他の例からその上端には糸を引つ

掛ける鉤があったとみられる。表面全体は緑青に覆われているが、内部には鉄錆が認められ、鋼分の多い鉄製品、もしくは鉄地に青銅を張っている可能性が考えられる。677は鈍で、刃部に木質が付着している。678は菊皿で、紅皿に使用したものと考えられる。679は八双金物で、鍍金の痕跡が認められる。680は鞍のように2つの円孔をもつが、薄手の作りから飾金具とした。1283～1338は銅銭である。皇土通寶が最も多く、熙寧元寶がそれに次ぐ。

木製品 681・682は漆塗椀である。681は内面赤色で無文、外面は黒地に赤色で開扉文を描く。682は内外黒色の高台破片で、見込に何らかの漆絵、高台内に記号らしき痕跡が認められる。683は内外面黒色の漆塗皿で、見込に蓬葉文らしき文様がある。684は蓋で、全体が炭化している。685は小形の曲物容器である。686は「中村□□」・「因因十六さし」との墨書がある付札である。687は傘口クロで、全体が炭化している。688は全面黒色の漆塗製品である。家具類の部材と考えられる。689は刀子の鞘で、櫃を表現したとみられる細工を施している。690は羽子板、691・692は箸である。693は断面方形の棒状部材で、直交する2方向に細い木釘があり、一部には木釘が残る。694は片面に「金」の文字が残る将棋駒である。朝倉館外濠で出土した駒がへぎ板を利用したものであるのに対し、これは先端から尻部に向かって厚くなり、駒の体裁を整えている。695・696は釣瓶で、696は柄杓に転用したものとみられる(挿図8)。697は手桶の把手で、頂部からの亀裂を留めるため、側面から鉄釘を打ち込んでいる。698～700は連歯下駄で、歯はいずれも著しく摩耗している。700には台表面に模様とみられる線刻がある他、所々に意味不明の小さな穴が認められる。701～706は雪下駄である。701～703は表面踵部に線刻文様をもつ。704の前緒穴部分はU字の抉りとなっており、再加工かもしれない。大きさと形状が近似する705・706は一足分であろう。



挿図8 釣瓶696出土状況

石製品 707は炉(SX1701)、708はバンドコの蓋、709・710はバンドコの身である。

その他 575(第39図)はガラス製の小皿で、透明度の高い紫色を呈す。金属製鋳型による型押成形で、型抜き痕の研磨は省略されている。科学分析の結果、材質はカリウム鉛ガラスと判明した。

E区I遺構面出土遺物(第47・48図、PL.61・62・78)

土師質土器 711～727はSF1617から出土した皿である。727がD類、他はC類に属す。

中国製陶磁器 728・729は青磁である。728は青磁の稜花皿で、見込に界線と印花文をもつ。729は大型の香炉の胴部破片で、算木文を配している。730は白磁の菊皿である。高台に砂が付着している。731～733は端反りの染付皿で、731・732がB1群、733がB2群に属す。

金属製品 1339～1345は銅銭である。一乗谷で希少な銭種としては1345の紹熙元寶がある。

木製品 734は漆塗皿で、体部は内外赤、口唇および皿付～高台内は黒色とする。ケヤキ製の上質品である。735は漆塗椀の高台部である。内外黒色で、見込に漆絵をもつ。736は解櫛である。737は将棋の駒で、「飛車・(龍)王」で、694と同じく駒の形状を整えている。738はSF1617から出土した板部材で、便所の床にはめ込む金隠と考えられる。片面中央部には墨で描いたような円が認められ、部分的には三重線となっている。739は連歯下駄、740は露卯下駄、741は雪下駄である。739の前歯中央部は前方から後方へ向かって強く弧状に摩耗しており、特殊な使われ方をしたのかもしれない。また、表面踵部から後歯に向かって打ち込まれた鉄釘が3本遺存し、歯の補修によるものと考えられる。

E区Ⅱ遺構面出土遺物(第48図、PL.62・78)

瀬戸・美濃焼 742は鉄釉を施す天目茶碗である。内反り高台で、高台周辺にはやや薄い錆釉を施している。743・744は灰釉を施す端反皿で、高台内に輪ドチ跡が残る。743は見込に菊の印花文をもつ。

中国製陶磁器 745は高台を弧状に挟る白磁皿である。

朝鮮製陶磁器 746は白磁碗である。

金属製品 1346～1350は銅銭である。

木製品 747は露卯下駄、748は雪下駄である。748の表面腫部に線刻が認められる。

その他Ⅰ遺構面出土遺物(第49・50図、PL.63・64・78)

Ⅰ遺構面の遺物の中で、区画境とした溝などから出土した遺物を一括した。中でもB区とD区を分けるSD1574の出土遺物が多い。

越前焼 749はⅢ群の大甕、750は壺、751は瓶である。

土師質土器 752～760は皿である。752はB類、753～758はC類、759・760はD類に属し、多くにケール痕が認められる。761・762は土釜である。761の羽部上面には刻み列が認められる。763は灯芯押え、764～766は管状の土鉢である。

瀬戸・美濃焼 767は黄瀬戸釉を施す平碗である。高台周辺には比較的濃い錆釉を施す。768は鉄釉、769は灰釉を施す丸皿である。高台内に輪ドチ跡が認められる。769は見込に印花をもつ。770は緑釉の皿である。見込に菊の印花をもつ。高台内に輪ドチ跡が認められる。771は灰釉を施す仏花瓶で、底外面に糸切り痕を残す。772は無釉で須恵質の香炉である。

備前焼 773は瓶である。

中国製陶磁器 774～776・782は青磁である。774は稷花皿で、口縁部内面に波状文を配している。見込の釉は蛇の目状に剥ぎ取る。775は輪花皿、776は香炉である。782は盤で、輪高台にさらに山形の脚を貼り付けている。見込にはうっすらと牡丹らしき文様が認められる。高台内周縁の釉は剥ぎ取っている。777～781は白磁である。777は稷花碗で、型押しにより成形している。778は端反りの皿である。779は直口の皿で、外面胴下部を露胎とする。780は萐筍底の小坏である。781は壺もしくは水甕で、型押しの草花風文様をもつ。783～787は染付である。783は直口の碗で、花唐草文と芭蕉葉文風の文様をもつ。784・785はⅢB1群、786・787はⅢC群である。786は華南系とみられる。

朝鮮製陶磁器 788・789は口縁が玉縁状となる鉢、790は徳利の口頸部である。

産地不明陶磁器 791は須恵質の鉢で、鉄鉢形を呈す。11～12世紀の灰釉陶器の可能性が考えられる。

金属製品 792は箸である。上部に鏤歯状の刻み目を施している。1351～1365は銅銭である。一乗谷で希少な銭種としては1363の景定元寶がある。

木製品 793は漆塗皿である。内面は赤色で無文、外面は黒色で果実文らしき文様をもつ。794は梳櫛、795は連傘下駄である。

石製品 796は砥石で、浄教寺産とみられる。797は平面D形のバンドコの蓋で、中央部に方形の窓が並ぶ。798は用途不明の円盤状製品で、縁に段、中央に孔をもつ。

その他Ⅱ遺構面出土遺物(第51～55図、PL.65～69・78・79)

Ⅱ遺構面の遺物の中で、区画境とした溝などから出土した遺物を一括した。Ⅰ遺構面と同様、B区と

D区を分けるSD1574の出土遺物が大半を占める。

越前焼 799はIV群の大甕である。肩部に押印が認められる。800は口縁が内湾する鉢である。

土師質土器 801～827は皿である。801・802はG類、807・808はB類、803～806・809～818・824～826はC類、819～822・827はD類に属す。824には「妙久」、826には「正」、825・827には「大」の墨書が認められる。823はナデを板状工具で行ったもので、見込の周囲には工具の爪痕が回り、中央部には焼成後に穿孔を施している。828は小甕である。見込は兜山状に盛り上がる。829～831は土釜である。830には植物の莖で描いたような記号が認められる。832は埴壇で、器壁断面は薄い層状となっている。底外面にガラス質の付着物が認められる。833・834は管状の上継、835～838は土鈴である。

瀬戸・美濃焼 839～852は鉄釉を施すものである。839～844は天目茶碗で、内反り高台となるものが多い。高台周辺の錆釉は比較的濃い。845は丸碗で、やはり内反り高台をもつ。846・847は丸皿で、高台内に輪ドチ跡が認められる。847の見込にはトチン跡が3箇所残る。その他、848・849は茶入、850は水注、851は水滴、852は仏花瓶である。853～855は黄瀬戸釉を施すものである。853は建水で、底部内外面を除く全面に施釉している。854・855は平碗で、高台周辺には比較的濃い錆釉を施している。856～868は灰釉を施すもので、856・857は丸碗、858は反皿、859～863は端反皿、864～868は丸皿である。皿の多くは高台内に輪ドチ跡を残している。858の口縁には黒色の付着物が認められる。

瓦質土器 869～872は香炉である。872以外はスタンプ文を施す。無文の872は輪高台をもつ。

備前焼 873は徳利で、ヘラ記号が認められる。

中国製陶磁器 874～876は青磁である。874は龍泉窯系統B4類、875は同じくE類で、875は見込脇に浅い段状の界線をもつ。876は後花皿で、内面に草花文を描く。見込の印花は不明瞭である。877～881は白磁である。877～880は端反りの皿で、877は露胎の畳付周辺を黒く塗っている。881は直口の皿で、底部内外面に擦痕が認められる。882～885は染付である。882～884は碗で、882はD群、883はC群に属す。885は皿C群である。884・885は華南系とみられる。

朝鮮製陶磁器 886は雑釉、887は白磁の碗である。887の見込と畳付には目跡が4箇所認められる。

金属製品 888～890は建築金具で、888は総、889は引手金具、890は飾金具である。889の裏側には接着のための漆が残っている。表面にも黒色の付着物があり、漆を塗っていたのかもしれない。891は刀子、892は提子の把手である。893は菊皿で、鍍金したものとみられる。894は用途不明の筒形製品である。板材を曲げて接合した部分の内側に幅の狭い板を貼り付けて補強している。895は包丁のような形の鉄製品で、第54次調査出土で銹鉄と推測されている資料に断面形状や厚さがよく似ている。1366～1395は銅銭である。一乗谷で出土例の少ないものとしては1381の至和通寶がある。

木製品 896・897は漆塗碗で、いずれも内面赤色、外面黒色である。896は内面に漆が輪状に付着しており、塗装や補修の際の漆容器に利用したものとみられる。897は高台を刃物で削り取っている他、体部に横並びで2箇所穿孔を施している。ここに柄を取り付けて杓子として利用した可能性がある。898は黒漆塗りの甕である。内側にはロクロ目がよく残る。899は曲物等の蓋底板である。表面に刃物傷が認められる。900は将棋の「金将」駒である。ヒノキのヘギ板を利用している。901は鑿柄で、鉄製の冠が遺存する。902は栓で、ヒノキの丸木を素材としている。903は刀子の柄である。赤彩痕が所々に認められ、漆塗製品と考えられる。904は釣瓶である。各部材の接合には鉄釘を用いている。905は榎としたが、上部に方形の釘穴が認められ、何らかの部材かもしれない。906は桶類の蓋底板で、接ぎ合わせる際の合釘が遺存する。907は大型船の模型である。本体はヒノキ材を削り抜き、側面に船梁を固定する

方形の穴を3個穿つ。船べりの板を木釘で固定し、そこにも船梁の穴を設けている。帆柱の両脇には簡括みを固定する窪みも表現している。帆柱の位置が台床船梁の前にあることや、丸みを帯びた船首の形状などから「北国船」の模型と考えられる。

石製品 908は淨教寺産とみられる砥石である。端部に施溝分割の痕跡が認められる。909は平面円形の笏谷石製盤である。

Ⅲ遺構面出土遺物(第20・55・56・65・70図、PL.34・70・71・76・79)

Ⅲ遺構面出土として取り上げられた遺物を一括する。区画としてはほぼB・C・D区に限られ、中でも主要な区画溝であるSD501・1574から出土したものが大半を占める。

越前焼 910はⅢ群の大甕である。東西道路SS493の下層から出土した。154(第20図)は四角い木枠の中に埋置されていたⅣ群の播鉢(SX1786)である。片口をもち、古い要素を残す。胴下部と見込の播目はすり減ってはほぼ消失し、内面全体に炭化物が付着している。

土師質土器 911～923は皿である。911～921はC類、922・923はD類に属す。ほとんどにタール痕が認められる。915は底部に穿孔を施している。924は土釜で、羽部上面に線刻が認められる。

瀬戸・美濃焼 925・926は鉄釉を施すものである。925は天目茶碗で、高台周辺には比較的濃い錆釉を施している。926は壺で、底部付近は露胎である。927は灰釉を施す端反皿で、高台内には輪ドチ跡が認められる。

中国製陶磁器 928は青磁で、龍泉窯系統B4類に属す。胎土は黄土色で、釉調も黄褐色を呈す。

朝鮮製陶磁器 929は雑釉徳利である。底の大きいいわゆる舟徳利で、タタキ成形により器壁を非常に薄く仕上げている。胴部には線刻が認められる。

金属製品 930は鑿とみられる鉄製品で、鍛造品らしく層状に剥離している。931は558を小型にしたような熊手状の金具で、口金が付属する。932は断面U字形の金具で、端部に目釘穴をもつ。内側には接着のための漆が残っており、何らかの縁金具と考えられる。933は小柄、934は用途不明の円盤、1221～1223・1396～1398は銅銭である。

木製品 935・936は漆塗椀である。いずれも内外黒色で、935の見込には蓮葉文が認められる。937は内外黒色で無文の漆塗皿である。ケヤキ製の上質品である。938は折敷の底板である。

正方形の四隅を切った形状で、側板を取り付け固定するための2個一対の穴が対向する2辺にあいている。同様のものと共に10枚程度重なって出土した(挿図9)。939・940は桶の側板で、簀による擦痕や摩耗が認められる。941は草履下駄、942は雷下駄である。943は組物の部材とみられる。側面には中央部の挟りの他、端部に小さな穴がある。また、両面のおおよそ同じ位置に「三」の墨書が認められる。



挿図9 折敷938出土状況

石製品 944・945は大きさや形状がよく似た砥石である。石質から仕上げとみられる。

床土出土・表探他遺物(第56～59・70図、PL.71～73・79)

水田床土から出土したのや排土等で採取したもの、グリッドや遺構面が不明なものを一括する。

越前焼 946は短頸甕である。947は片口をもつ壺で、ヘラ記号が認められる。948は小壺で底面にシカ

のような動物を描いた線刻が認められる。

備前焼 949は徳利、950は壺である。

中国製陶磁器 951は青磁の稜花皿で、体部内面に草花文を配す。見込には「富」銘の印花をもつ。952～960は白磁である。952～955は碗、956～958は端反りの皿、959は高台に弧状の挟りをもつ皿である。960は皿の底部で、高台内に呉須による「大明年造」銘をもつ。961は見込に梅月文を描く染付碗、962はB1群の染付皿である。

朝鮮製陶磁器 963は白磁の皿である。見込に4箇所の目跡が残る。

金属製品 964は焔止である。引っ掛けた先の金具が錆付いている。965は引手金具の縁の部分である。周囲に細かい線を刻んで菊花状に仕上げた上に鍍金したものとみられる。裏側には接着のための漆が付着している。966は周囲に刻みを施した切羽である。表面と側面に黒色漆が付着している。1399～1427は銅銭である。一乗谷で出土例の少ない銭種としては1427の延寧通寶がある。

木製品 967は露卯下駄である。表面は踵部に烏らしき線刻模様がある他、全体に点々と黒色の漆様付着物が認められる。また、後緒穴には横緒を留めるための楔が遺存している。968は雪下駄とみられるが、両側縁と後端部にも穿孔を施している。969は纏挽きの痕跡をよく残す板材である。

骨製品 970・971は双六の駒である。971は両面に各6個の目があり、赤色顔料の付着もみられる。

石製品 972は箱形のミニチュア製品で、用途は不明である。973は球状石製品である。974は鉢で、内外面とも平滑に仕上げている。975は平面円形の盤で、三足を削り出している。976は粉挽白の上白、977・978は同じく下白である。白面はいずれも8分画で、976には鉄製の、977には木製の芯棒が遺存している。979・980は石仏である。979は如意輪観音像で、両脇に「/善秀童子也」、/庚「/□月三日」の銘文を彫刻している。銘文内には赤彩色が遺存する。980は地藏菩薩像で、赤彩色とその上の金彩色が遺存する。981は組合五輪塔の水輪である。982～984は一石五輪塔である。982は「妙法蓮華経」の題目と「水祿□年」「妙栄童女」「正月十四日」の銘文をもつ。983は「妙法蓮華経」の題目をもつ。984は表面の剥落が著しいが、金彩を施した「正月十三日」の銘文が認められる。

最後に写真のみ掲載(PL.79・80)した遺物について記述しておきたい。出土位置などの詳細については表9(PL.80)に記載した。

1428～1431は墨書のある土師質皿で、「高」「型」「般」「實」といった文字が読み取れる。1431は中央に「大般若」、周囲に「實」など十二支の文字を配したものと推定され、般若経を守る十六善神(十二神将および四天王)を表現した可能性がある。1432～1435は金箔を施した土師質皿である。1433の外縁は金箔が剥がれ、接着に利用した漆様の付着物がわずかに遺存している。1436は元様式染付の稜花皿で、体部内面に唐草文、見込に蓮の葉と思しき文様を描く。1437は朝鮮製の雑釉碗で、見込と側面に各8箇所の目跡がある。欠失部を含めると10箇所あったものと考えられる。1438は漆塗皿の高台部である。内面と裏付は黒色、外側面は赤色で、高台内に朱書の文字をもつ。1439は皮札を綴じ合わせて漆を施した小札である。1440・1441は数珠珠で、1440は藤色のガラス製、1441は水晶製である。1442は雲母片で、香道具と想定される。1443はスサを含む壁土で、径2cmの竹小舞の圧痕が認められる。壁土はD1区SX1822付近のⅡ遺構面で多く採取されている。1444は量表である。経糸が確認でき、その間隔は6mm程度でほぼ均等である。一目の中に2本の経糸を織り込んだ諸目表とみられる。1445は炭化糊で、表面に量表やへぎ板が張り付いている。炭化糊はD1区東側のⅡ遺構面で集中的に出土している。

表3 土器・陶磁器調査表

注1: 上の記号は次の通り。①(砂粒径(径1mm以下)を少量含む、②(砂粒径(径1mm以下)を多量含む、③砂粒(径1~2mm)を含む、④小石(径2mm以上)を含む。
 注2: 産地は前掲「埼玉土器2000年展」に基づく。

No	産地		形状	用途	層/遺構	法量(cm)			胎土		色澤		備考	図	PL
	大野	野積				口径	器高	底径	外野	内面	外野	内面			
1	熊谷	野積	A	T72	石瓦	19.8	-	-	①	灰白	黄	黄赤		11	25
2	熊谷	田耳野	A	P73	瓦	11.6	-	-	①	灰白	黄	黄赤		11	25
3	熊谷	野積	A	S、T49、T70、U72	SV1622、SS1564地	42.8	16.2	19.0	②	灰白	黄	黄赤	目付	11	25
4	熊谷	野積	A	S70、T2、T、U72	石瓦	19.3	3.7	13.6	①	灰黄赤	黄赤	黄赤	目付	11	25
5	熊谷	野積	A	U70、T2	粘土、SV1622	28.5	6.8	13.6	②	灰白	黄	黄赤	目付	11	25
6	土師	野積	A	P73	石瓦	9.1	2.2	4.4	①	灰黄赤	黄	黄赤		11	25
7	土師	野積	A	T70	石瓦	9.8	2.3	4.8	①	灰黄赤	黄	黄赤		11	25
8	土師	野積	A	T70	SD1568	10.7	2.1	5.0	①	灰黄赤	黄	黄赤		11	25
9	土師	野積	A	S70	石瓦	10.6	2.1	6.0	①	灰黄赤	黄	黄赤		11	25
10	土師	野積	A	U72	SV1622	15.4	2.5	10.4	①	灰	黄	黄赤		11	25
11	土師	野積	A	P73	石瓦	14.3	2.6	10.2	①	灰黄赤	黄	黄赤		11	25
12	熊谷・美濃	木目茶碗	A	U72	石瓦	8.8	4.8	3.2	①	灰	黄	黄赤		12	26
13	熊谷・美濃	灰物水作	A	S72	石瓦	4.8	-	-	①	灰	黄	黄赤		12	26
14	熊谷・美濃	灰物水作	A	T70	石瓦	16.3	5.8	6.1	①	灰	黄	黄赤		12	26
15	熊谷・美濃	灰物水作	A	T70、T2	粘土、SV1622	11.0	2.4	3.2	①	灰	黄	黄赤		12	26
16	熊谷・美濃	灰物水作	A	U72	SV1622	11.5	2.5	4.2	②	灰	黄	黄赤		12	26
17	熊谷・美濃	灰物水作	A	Q72	石瓦	9.2	2.6	5.8	①	灰	黄	黄赤		12	26
18	熊谷・美濃	灰物水作	A	P73	石瓦	29.8	-	-	①	灰	黄	黄赤		12	26
19	中国	白磁瓶	A	N62、U72	SV1622	12.3	3.0	6.8	①	灰	黄	黄赤		12	26
20	中国	白磁瓶	A	Q71、T2	粘土、雄土	11.4	2.5	5.0	①	明緑	灰	見込黄		12	26
21	中国	白磁瓶	A	Q72	粘土、雄土	11.0	2.9	5.8	①	灰	黄	黄赤		12	26
22	中国	白磁瓶	A	A70	SD501	-	-	9.8	①	灰	黄	黄赤		12	26
23	中国	白磁瓶	A	T70	石瓦	-	-	-	①	灰	黄	黄赤		12	26
24	中国	白磁瓶	A	P65、S70	石瓦	6.6	4.0	2.8	①	灰	黄	黄赤		12	26
25	中国	白磁瓶	A	P73	石瓦	-	-	2.3	①	灰	黄	黄赤		12	26
26	中国	白磁瓶	A	Q72	石瓦	-	-	2.4	①	灰	黄	黄赤		12	26
27	中国	白磁瓶	A	T72	石瓦	-	-	2.6	①	灰	黄	黄赤		12	26
28	中国	白磁瓶	A	T70	石瓦	-	-	5.1	①	明緑	灰	黄赤		12	26
29	中国	白磁瓶	A	T70	石瓦、雄土	11.7	2.9	6.4	①	明緑	灰	黄赤		12	26
30	中国	白磁瓶	A	U72	SV1622	11.7	2.8	6.4	①	明緑	灰	黄赤		12	26
31	中国	白磁瓶	A	R71	雄土	-	-	1.6	①	明緑	灰	黄赤		12	26
32	中国	白磁瓶	A	P73	石瓦	-	-	4.4	②	灰	黄	黄赤		12	26
33	朝鮮	緑磁瓶	A	T、T70	石瓦、雄土	-	-	8.7	①	灰	黄	黄赤		12	26
41	熊谷	土器	A	Q71、T2	雄土、黄赤、雄土	-	-	-	②	灰	黄	黄赤		15	27
42	熊谷	土器	A	P72、Q71	雄土、雄土	-	-	-	②	灰	黄	黄赤		15	27
43	熊谷	土器	A	Q71	SK174	33.6	11.2	22.6	②	灰	黄	黄赤		15	27
44	熊谷	土器	A	S70、Q72、U68	雄土、雄土	42.8	11.9	20.4	①	明緑	灰	黄赤		15	27
45	土師	土器	A	Q72	SF174	6.9	1.7	3.4	①	灰	黄	黄赤		15	27
46	土師	土器	A	Q72	SF174	7.1	1.8	3.1	①	灰	黄	黄赤		15	27
47	土師	土器	A	Q72	SF174	8.4	2.1	4.5	①	灰	黄	黄赤		15	27
48	土師	土器	A	Q72	SF174	8.5	2.0	4.8	①	灰	黄	黄赤		15	27
49	土師	土器	A	Q72	SF174	8.6	1.9	5.3	①	灰	黄	黄赤		15	27
50	土師	土器	A	Q70	SF174	8.6	2.0	6.5	①	灰	黄	黄赤		15	27
51	土師	土器	A	Q70	SF174	9.8	2.2	4.4	①	明緑	灰	黄赤		15	27
52	土師	土器	A	Q70	SF174	10.9	2.0	5.5	①	灰	黄	黄赤		15	27
53	土師	土器	A	Q70	SF174	11.3	2.4	3.8	①	灰	黄	黄赤		15	27
54	土師	土器	A	Q70	SF174	12.5	1.9	6.9	①	灰	黄	黄赤		15	27
55	土師	土器	A	Q70	雄土	20.8	2.7	15.6	①	灰	黄	黄赤		15	27
56	土師	土器	A	Q70	SK174	21.1	2.3	15.0	①	灰	黄	黄赤		15	27
57	土師	土器	A	T73	雄土	3.8	3.4	3.0	①	灰	黄	黄赤		13	17
58	熊谷・美濃	木目茶碗	A	P73	雄土	6.8	5.0	3.0	①	灰	黄	黄赤		14	26
59	熊谷・美濃	灰物水作	A	R73	雄土、石目下層	2.6	3.8	3.0	①	灰	黄	黄赤		14	26
60	熊谷・美濃	灰物水作	A	U70	SK1778	-	-	10.0	①	灰	黄	黄赤		14	26
61	熊谷・美濃	灰物水作	A	O72	雄土	10.4	2.8	6.2	①	灰	黄	黄赤		14	26
62	熊谷・美濃	灰物水作	A	Q72	雄土	10.4	2.2	4.3	①	灰	黄	黄赤		14	26
63	熊谷・美濃	灰物水作	A	Q71	雄土	10.4	2.2	4.8	①	灰	黄	黄赤		14	26
64	熊谷・美濃	灰物水作	A	S70	雄土	10.8	-	-	①	灰	黄	黄赤		14	26
65	熊谷・美濃	灰物水作	A	Q72	雄土	10.3	2.7	5.5	①	灰	黄	黄赤		14	26
66	野積	野積	A	T71	雄土	12.3	5.4	8.9	①	灰	黄	黄赤		14	26
67	中国	白磁瓶	A	P23、Q72	雄土、雄土	16.0	-	-	①	灰	黄	黄赤		14	26
68	中国	白磁瓶	A	Q72	雄土	11.2	-	-	①	灰	黄	黄赤		14	26
69	中国	白磁瓶	A	O72	雄土	12.8	-	-	①	明緑	灰	黄赤		14	26
70	中国	白磁瓶	A	Q72、T2、U66	雄土	13.0	7.0	4.9	①	灰	黄	黄赤		14	26
71	朝鮮	緑磁瓶	A	P72、T3、S72	雄土、石瓦	16.4	-	-	①	灰	黄	黄赤		14	26
72	熊谷	土器	A	T67	T70、雄土	-	-	-	①	灰	黄	黄赤		15	29
73	熊谷	土器	A	Q57	T70、雄土	-	-	-	①	灰	黄	黄赤		15	29
74	熊谷	土器	A	X69、M71、T72	T70、雄土	-	-	-	①	灰	黄	黄赤		15	29
79	熊谷	土器	A	T69、U68	SD1995、501物	38.4	-	-	①	灰	黄	黄赤		15	29
81	熊谷	土器	B	S、T69	SC1698、SS1064	17.2	-	-	①	灰	黄	黄赤		15	29
82	熊谷	土器	B	S、T69	SC1698、SS1064	18.2	28.3	7.0	①	灰	黄	黄赤		15	29
83	熊谷	土器	B	S、T69	雄土	16.3	-	-	①	灰	黄	黄赤		15	29
84	熊谷	土器	B	S、T69	雄土	16.2	-	-	①	灰	黄	黄赤		15	29
85	熊谷	土器	B	M55、67、P61他	SK1566、SD1572物	29.8	13.1	16.2	①	灰	黄	黄赤		16	30
86	熊谷	土器	B	T64	雄土	11.2	8.2	10.1	①	灰	黄	黄赤		16	30
87	土師	土器	B	P59	SD1575	6.4	2.0	3.4	①	灰	黄	黄赤		16	30
88	土師	土器	B	R89	SF1604有雄土	6.8	1.6	4.3	①	灰	黄	黄赤		16	30

No.	種別		区画	面	地区	種/用途	位置 (cm)		助土	色別		備考	国	PL		
	大別	小別					口径	群高		底径	外周				内周	
89	土質改良	草	B	E	R69	SP1605有機質土	6.8	1.7	2.2	◎	にんじん	にんじん	日照	市目	16	-
90	土質改良	草	B	E	R69	SP1605有機質土	7.4	2.0	5.1	◎	にんじん	にんじん	日照	市目	16	30
91	土質改良	草	B	E	R69	SP1605有機質土	6.7	1.6	3.6	◎	にんじん	にんじん	日照	市目	16	30
92	土質改良	草	B	E	R69	SP1605有機質土	7.5	1.6	5.3	◎	にんじん	にんじん	日照	市目	16	30
93	土質改良	草	B	E	R69	SP1605有機質土	5.7	1.5	2.4	◎	灰白	灰白	C草	ケール漬	16	30
94	土質改良	草	B	E	R69	SP1605有機質土	8.5	1.7	4.8	◎	にんじん	にんじん	C草	ケール漬	16	30
95	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	11.5	-	-	◎	腐植	腐植	大草	2	16	30
96	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	11.8	6.4	4.1	◎	腐植	腐植	大草	2	16	30
97	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	11.4	39.2	15.1	◎	腐植	腐植	大草	2	16	30
98	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	12.8	4.0	4.1	◎	灰白	灰白	大草	2	16	30
99	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	11.2	28	6.5	◎	灰白	灰白	大草	2	16	30
100	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	11.8	26	4.4	◎	灰白	灰白	大草	2	16	30
101	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	10.9	24	6.4	◎	灰白	灰白	大草	2	16	30
102	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	8.7	23	4.5	◎	灰白	灰白	大草	2	16	30
103	圃口・水溝	天目草類	B	E	R69	SP1605有機質土	8.2	6.0	8.0	◎	灰白	灰白	大草	2	16	30
104	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	2.02	59	3.4	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
105	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	2.40	38	6.0	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
106	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	2.44	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
107	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	1.10	27	3.6	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
108	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	0.97	29	3.5	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
109	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	2.14	-	-	◎	明緑灰	明緑灰	見込み	見込み	16	31
110	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	-	-	-	◎	明緑灰	明緑灰	見込み	見込み	16	31
111	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	11.7	31	6.4	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
112	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	10.8	26	5.2	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
113	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	10.4	27	5.3	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
114	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	12.0	29	5.9	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
115	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	16.0	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
116	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	6.9	23	0.1	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
117	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	-	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
118	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	-	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
119	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	-	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
120	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	11.6	61	4.3	◎	明緑灰	明緑灰	見込み	見込み	16	31
121	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	8.7	37	3.2	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
122	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	9.8	66	6.3	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
123	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	11.1	79	3.3	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
124	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	2.4	-	-	◎	明緑灰	明緑灰	見込み	見込み	16	31
125	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	7.8	-	-	◎	明緑灰	明緑灰	見込み	見込み	16	31
126	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	-	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
127	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	13.2	54	5.0	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
128	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	-	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
129	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	-	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
130	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	33.3	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
131	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	33.3	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
132	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	88.0	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
133	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	72.4	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
134	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	83.4	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
135	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	38.2	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
136	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	20.4	-	-	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
137	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	16.2	22.9	13.4	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
138	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	14.0	26.3	18.0	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
139	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	6.9	26.0	9.0	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
140	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	4.6	10.6	7.2	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
141	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	22.6	91	11.5	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
142	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	23.8	8.0	12.5	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
143	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	37.6	13.9	16.0	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
144	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	32.3	10.6	13.8	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
145	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	41.9	18.2	17.5	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
146	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	7.2	17	3.7	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
147	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	7.1	15	3.2	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
148	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	8.6	20	2.8	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
149	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	8.7	19	4.4	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
150	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	8.3	19	5.0	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
151	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	9.0	20	4.6	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
152	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	9.3	20	3.4	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
153	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	9.2	19	4.8	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
154	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	9.0	23	4.4	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
155	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	9.8	25	5.5	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31
156	中国	青磁	B	E	R69	SK1786, SB1785	10.8	24	6.0	◎	灰白	灰白	見込み	見込み	16	31

No.	船名		区画	画	地区	船/造船	寸法(cm)			色調		備考	PL		
	口徑	船高					底深	外周	内周						
540	中環	白雲里	D	I	L54	SD1660	84	27	32	①	灰白	灰白	37	52	
541	中環	白雲里	D	I	K53	SX1697*	-	-	42	①	灰白	灰白	37	52	
542	中環	白雲里	D	I	S38-99	SD1574, SS1565	64	-	-	①	灰白	灰白	37	52	
543	中環	白雲里	D	I	J51	實上	-	-	20	①	灰白	灰白	見込船の目録別表	37	52
544	中環	白雲里	D	I	Q- R57- M	-	-	-	25	①	灰白	灰白	見込船の目録別表	37	52
545	中環	康化橋	D	I	U35	SD1578	72	55	50	①	灰白	明緑灰	C帯	38	53
546	中環	康化橋	D	I	R59, U59船	SS1621, SD1624船	116	62	40	①	明緑灰	明緑灰	B帯	38	53
547	中環	康化橋	D	I	M59, R58	SD1574	72	55	78	①	灰白	灰白	B帯	38	53
548	中環	康化橋	D	I	Q52	SD1574	72	55	66	①	灰白	明緑灰	B帯	38	53
549	中環	安仔仔	D	I	S56, T57	SX1675, 機士	88	22	50	①	灰白	灰白	B1帯	38	53
550	中環	康化橋	D	I	L54, S59	機士船	-	-	34	①	青黄	青黄	C帯 青黄系	38	53
551	中環	康化橋	D	I	Q53	SA1618	65	37	24	①	灰白	灰白	見込船の目録別表	38	53
552	中環	機輪船	D	I	L56, A- B32-50	SS492, SD1990機	134	51	47	①	チロ-灰	チロ-灰	見付に昇降8	38	53
553	中環	機輪船	D	I	L54, Q- A51	SD1590, 1994	-	-	52	①	黒船	黒船	見込に1日輪7, 隻付に8	38	53
554	中環	寶龍水注	D	I	A- B32-50機	SD1590, SS492機	-	-	49	①	機士船	明緑灰	東洋通商 橋本船工 機付船	38	53
555	不明	機輪船	D	I	J58	SD1574	-	-	86	①	機士	チロ-灰	見付に昇降	38	53
576	船前	大環	D	E	S55-99, A56機	SD1574, SS492機	68	0	-	①	機灰	機赤機	2層ヘラ配弁 機付	39	53
577	船前	大環	D	E	M51	SK1628	-	-	-	①	機灰	機赤	2層ヘラ配弁	40	53
578	船前	大環	D	E	R50, S53	SD1590, 機士	-	-	-	①	機灰	機灰	見付	40	53
579	船前	大環	D	E	N54	SK1660	-	-	-	①	機灰	機赤	見付	40	53
580	船前	小環	D	E	T54	機士	4.8	11.2	8.2	①	黒船	明緑	出口ヘラ配弁	40	55
581	船前	船排	D	E	T53	-	33.6	11.4	7.4	①	機灰	機赤	見付 機付	40	55
582	船前	船排	D	E	R57	機士	33.6	10.7	7.3	①	機灰	機赤	見付 機付 機付	40	55
583	船前	船排	D	E	Q51	機士	34.6	10.3	7.2	①	機灰	機赤	見付 機付	40	55
584	船前	機	D	E	R57, A59	機灰, SD2601	26.7	8.5	7.0	①	機灰	機赤	見付 機付	40	55
585	船前	船排	D	E	S52	機士	41.6	14.2	7.6	①	機灰	機赤	見付 機付	41	55
586	土師質	瓦	D	E	J54	SX1629	6.7	1.2	7.8	①	浅黄機	機赤	見付	41	56
587	土師質	瓦	D	E	L55	SK1627	6.5	2.1	3.3	①	機灰	機赤	見付	41	56
588	土師質	瓦	D	E	M52	SK1627	6.9	1.8	4.4	①	機灰	機赤	見付	41	56
589	土師質	瓦	D	E	K52	SD1584	6.8	1.6	3.4	①	機灰	機赤	見付	41	56
590	土師質	瓦	D	E	S55	SK1764	8.1	1.9	4.6	①	浅黄機	機赤	見付	41	56
591	土師質	瓦	D	E	S55	SK1765	8.7	2.1	4.1	①	浅黄機	機赤	見付	41	56
592	土師質	瓦	D	E	L54	SD1584	9.0	2.0	4.7	①	機灰	機赤	見付	41	56
593	土師質	瓦	D	E	L55	SK1627	8.7	2.0	4.7	①	機灰	機赤	見付	41	56
594	土師質	瓦	D	E	L55	SK1627	8.7	2.2	3.9	①	機灰	機赤	見付	41	56
595	土師質	瓦	D	E	L51	SK1627	9.5	2.2	3.4	①	浅黄機	機赤	見付	41	56
596	土師質	瓦	D	E	L51	SK1627	10.0	2.2	3.6	①	浅黄機	機赤	見付	41	56
597	土師質	瓦	D	E	S51	SK1764	10.1	2.3	3.8	①	機灰	機赤	見付	41	56
598	土師質	瓦	D	E	L54	SD1584	10.6	2.4	3.0	①	機灰	機赤	見付	41	56
599	土師質	瓦	D	E	T54	SD1574	12.6	1.7	4.0	①	機灰	機赤	見付	41	56
600	土師質	瓦	D	E	L53	機士	12.7	1.9	3.5	①	機灰	機赤	見付	41	56
601	土師質	瓦	D	E	T54	機士	7.7	1.5	2.6	①	機灰	機赤	見付	41	56
602	土師質	瓦	D	I	R59	SD1574	9.2	2.3	3.0	①	浅黄機	機赤	見付	41	56
603	土師質	瓦	D	E	R58	機灰	2.7	1.6	3.4	①	灰白	灰白	見付	41	56
604	土師質	土	D	E	J51	SK1667	6.8	5.5	4.6	①	機灰	機赤	見付	41	56
605	土師質	土	D	E	R56	SX1666	8.8	6.8	4.4	①	機灰	機赤	見付	41	56
606	土師質	小	D	E	R51	機士	2.2	3.0	0.6	①	灰白	灰白	見付	41	56
607	土師質	小	D	E	L53	SD1584	3.4	3.5	-	①	灰白	灰白	見付	41	56
608	土師質	内	D	E	S56	機士	11.8	6.5	4.2	①	機灰	機赤	見付	41	56
609	土師質	瓦	D	E	S51	機士	11.8	6.5	4.2	①	機灰	機赤	見付	41	56
610	土師質	瓦	D	E	S52	機士	11.8	6.5	4.0	①	機灰	機赤	見付	41	56
611	土師質	瓦	D	E	S56-57	SX1702*	11.6	8.1	3.9	①	機灰	機赤	見付	41	56
612	土師質	瓦	D	E	S58	SD1574	12.2	6.9	4.2	①	機灰	機赤	見付	41	56
613	土師質	瓦	D	E	R58, T58船	SD1574, 康1船	8.4	4.6	3.0	①	機灰	機赤	見付	41	56
614	土師質	瓦	D	E	X52	SD1584	10.2	2.6	4.6	①	機灰	機赤	見付	41	56
615	土師質	瓦	D	E	S58	SD1574	5.6	-	-	①	機灰	機赤	見付	41	56
616	土師質	瓦	D	E	T56	機士	2.6	3.7	3.6	①	機灰	機赤	見付	41	56
617	土師質	瓦	D	E	R53	機士	2.6	2.0	3.4	①	機灰	機赤	見付	41	56
618	土師質	瓦	D	E	R56	機士	11.6	-	-	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
619	土師質	瓦	D	E	S52	機士	11.6	-	-	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
620	土師質	瓦	D	E	Q51	SX1632	12.0	3.9	6.0	①	機灰	機赤	見付	42	57
621	土師質	瓦	D	E	S55	SD1584	11.4	2.7	6.0	①	機灰	機赤	見付	42	57
622	土師質	瓦	D	E	S58	SD1574	9.0	2.6	4.6	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
623	土師質	瓦	D	E	S58	機士	8.9	2.2	5.2	①	機灰	機赤	見付	42	57
624	土師質	瓦	D	E	S51, M51	SK1628機	16.8	3.6	8.4	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
625	土師質	瓦	D	E	R56	機士	9.1	2.6	4.2	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
626	土師質	瓦	D	E	S58	SD1574	5.5	1.4	3.0	①	機灰	機赤	見付	42	57
627	土師質	瓦	D	E	L54	SD1584	5.4	1.3	2.8	①	機灰	機赤	見付	42	57
628	土師質	瓦	D	E	R57機	機士, 機灰	12.2	2.6	5.0	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
629	土師質	瓦	D	E	U56-57	機士船	12.0	2.7	3.4	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
630	土師質	瓦	D	E	T55	機士	12.8	2.7	6.2	①	浅黄機	機赤	見付	42	57
631	土師質	瓦	D	E	L58	機士	12.9	-	12.2	①	機灰	機赤	見付	42	57
632	土師質	瓦	D	E	R52	機士	14.1	-	12.5	①	機灰	機赤	見付	42	57
633	土師質	瓦	D	E	R53	機士	10.3	-	9.9	①	機灰	機赤	見付	42	57
634	土師質	瓦	D	E	S51	SK1769	10.6	-	9.0	①	明緑機	明緑機	見付	42	57
635	土師質	瓦	D	E	L54	SD1584	9.7	-	-	①	チロ-灰	チロ-灰	見付	42	57
636	土師質	瓦	D	E	K51機	SD1594, 機士色	12.2	5.4	5.5	①	灰白	機赤	見付	42	57
637	土師質	瓦	D	E	M51	SK1628	11.8	-	-	①	機灰	機赤	見付	42	57
638	土師質	瓦	D	E	S- U58機	SD1574, 康1	13.5	3.3	5.8	①	チロ-灰	チロ-灰	見付	42	57
639	土師質	瓦	D	E	S53, T52	實上, 機士	12.8	3.3	7.3	①	チロ-灰	チロ-灰	見付	42	57

№	種別	大洲	国	種	区画	種	地区	種/産地	洗米(cm)		粒土	色澤		備考	備	PL
									口徑	篩高		直徑	外側			
640	中国	古塩田	D	E	S51, T, R52種	横土、横土、横土	136	3.2	7.2	○	白	白	洗米、洗米、洗米	42	58	
641	中国	青塩田	D	F	Q51, R, S52種	横土、横土	152	3.2	7.2	○	白	白	洗米、洗米、洗米	42	57	
642	中国	青塩田	D	E	R52, S, T51種	横土、横土、横土	9.8	3.0	4.5	○	淡黄	淡黄	洗米	42	57	
643	中国	青塩田	D	E	R52	横土、横土	10.1	3.2	4.8	○	淡黄	淡黄	洗米	42	57	
644	中国	青塩田	D	E	R52, S8, T70	横土、横土	9.8	3.2	4.5	○	淡黄	淡黄	洗米	42	57	
645	中国	白塩田	D	E	J56	横土	12.0	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
646	中国	白塩田	D	E	R52, S51	横土	9.6	2.0	4.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
647	中国	白塩田	D	E	S51	横土	9.3	1.9	4.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
648	中国	白塩田	D	E	R52, S51	横土、横土	9.0	1.8	4.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
649	中国	白塩田	D	E	M51	横土、横土	8.8	1.9	4.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
650	中国	白塩田	D	E	Q51, R52, P50	横土、横土	11.2	3.1	6.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
651	中国	白塩田	D	E	R52	横土	17.3	3.2	10.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
652	中国	白塩田	D	E	S51	横土	13.0	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
653	中国	白塩田	D	E	Q, S51	横土、横土	11.4	3.0	6.2	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
654	中国	白塩田	D	E	R52	横土	12.2	2.6	6.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
655	中国	白塩田	D	E	R51, S2, S5	横土、横土	5.3	2.9	8.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
656	中国	白塩田	D	E	M51	横土	7.6	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
657	中国	白塩田	D	E	R58	横土	6.5	3.1	2.3	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
658	中国	白塩田	D	E	M51	横土	-	-	3.1	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
659	中国	白塩田	D	E	U58	横土	5.4	6.2	5.8	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
660	中国	白塩田	D	E	S5	横土	3.6	6.8	4.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
661	中国	白塩田	D	E	S5	横土	2.0	3.9	5.5	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
662	中国	白塩田	D	E	R58	横土	3.0	4.8	4.8	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
663	中国	白塩田	D	E	Q51, S58種	横土	9.1	2.2	5.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
664	中国	白塩田	D	E	R5, S2, S51	横土	9.4	2.4	2.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
665	中国	白塩田	D	E	Q, S51, S50, S2	横土	9.7	2.7	3.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
666	中国	白塩田	D	E	R52, S51	横土、横土	10.3	3.0	3.2	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
667	中国	白塩田	D	E	S5	横土	10.0	2.9	2.7	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
668	中国	白塩田	D	E	Q, S51, S51, S2	横土	9.5	3.0	3.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
669	中国	白塩田	D	E	R52, S5	横土	10.1	3.0	2.8	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
670	中国	白塩田	D	E	R51, S2, S50, S5	横土	10.0	3.0	2.9	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
671	中国	白塩田	D	E	R52, S5, S66	横土、横土	10.4	2.6	3.1	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
672	中国	白塩田	D	E	T, S53	横土	23.0	6.8	11.9	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
673	中国	白塩田	D	E	Q51	横土	23.3	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
711	中国	白塩田	E	F	S51	横土	6.5	1.5	3.1	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
712	中国	白塩田	E	F	S51	横土	6.9	1.5	3.2	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
713	中国	白塩田	E	F	S51	横土	6.7	1.5	3.2	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
714	中国	白塩田	E	F	S51	横土	6.8	1.5	3.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
715	中国	白塩田	E	F	S51	横土	7.8	1.8	3.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
716	中国	白塩田	E	F	S51	横土	8.6	2.0	4.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
717	中国	白塩田	E	F	S51	横土	8.7	1.8	5.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
718	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.3	2.0	4.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
719	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.0	1.9	4.3	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
720	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.0	1.8	4.9	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
721	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.3	2.1	6.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
722	中国	白塩田	E	F	S51	横土	8.8	2.0	4.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
723	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.1	1.6	4.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
724	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.2	1.8	5.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
725	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.9	2.0	4.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
726	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.1	2.1	4.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
727	中国	白塩田	E	F	S51	横土	9.9	2.1	4.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
728	中国	青塩田	E	F	J50	横土	13.2	3.2	5.2	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
729	中国	青塩田	E	F	T50	横土	-	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
730	中国	白塩田	E	F	Q50	横土	-	-	6.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
731	中国	白塩田	E	F	Q50	横土	13.6	4.0	8.9	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
732	中国	白塩田	E	F	Q50	横土	14.2	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
733	中国	白塩田	E	F	Q50	横土	14.7	3.2	7.3	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
734	中国	白塩田	E	F	S49	横土	12.4	6.1	3.7	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
735	中国	白塩田	E	F	S49	横土	11.8	3.9	3.8	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
736	中国	白塩田	E	F	S49	横土	11.5	2.2	6.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
737	中国	白塩田	E	F	S49	横土	9.2	2.2	3.5	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
738	中国	白塩田	E	F	R52	横土	14.3	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
739	中国	白塩田	E	F	Q59	横土	-	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
740	中国	白塩田	E	F	N56, S7	横土	16.4	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
751	中国	白塩田	E	F	Q56	横土	3.8	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
752	中国	白塩田	E	F	U58	横土	6.1	1.6	2.8	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
753	中国	白塩田	E	F	Q56	横土	5.9	1.6	2.5	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
754	中国	白塩田	E	F	U58	横土	7.2	2.0	3.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
755	中国	白塩田	E	F	R57	横土	8.4	2.0	4.5	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
756	中国	白塩田	E	F	M57	横土	8.5	2.2	4.0	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
757	中国	白塩田	E	F	U58	横土	8.5	1.8	4.2	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
758	中国	白塩田	E	F	U58	横土	8.9	2.5	4.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
759	中国	白塩田	E	F	U58	横土	10.5	2.8	5.4	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
760	中国	白塩田	E	F	U58	横土	10.3	2.4	5.6	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
761	中国	白塩田	E	F	K57	横土	6.6	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
762	中国	白塩田	E	F	U58	横土	17.0	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
763	中国	白塩田	E	F	P53	横土	18.30	5.05	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
764	中国	白塩田	E	F	S57	横土	18.28	4.76	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
765	中国	白塩田	E	F	S57	横土	18.28	4.76	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
766	中国	白塩田	E	F	S57	横土	18.28	-	-	○	淡白	淡白	洗米	42	58	
767	中国	白塩田	E	F	M58	横土	12.9	3.7	4.3	○	淡白	淡白	洗米	42	58	

No.	種類		区画	面	地区	層/道幅	流量 (cm)			助土	色塗		備考	面	PL
	大別	詳細					口径	管長	底径		外壁	内壁			
886	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	1/57	SD1574	11.6	-	-	○	浅黄	浅黄	大宮1	52	67	
887	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	K57	SD1574	11.6	-	-	○	浅黄	浅黄	大宮1	52	67	
888	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	Q56	SD1574	9.3	2.2	6.0	○	浅黄	浅黄	口掛に緩急付管物	52	67	
889	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	P26, Q57	SD1574	10.6	2.6	6.0	○	灰白	灰白	大宮1 印花 輪子ナ葺	52	67	
890	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	1/57	SD1574	11.0	2.5	6.0	○	灰白	灰白	大宮1 印花 輪子ナ葺	52	67	
891	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	O16	SD1574	9.1	2.7	4.8	○	浅黄	浅黄	大宮1 印花 輪子ナ葺	52	67	
892	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	D/E	1/51	SS-567	9.0	2.5	4.4	○	浅黄	浅黄	大宮1 輪子ナ葺	52	67	
893	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	K57	SD1574	8.6	2.3	4.2	○	浅黄	浅黄	大宮1 輪子ナ葺	52	67	
894	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	O56, M66, N56	SD1570-574	10.9	2.3	6.4	○	浅黄	灰白	大宮2 内面ゾビ 輪子ナ葺	52	67	
895	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/C	N57, S58	SD1574-738	11.4	2.6	6.2	○	灰白	浅黄	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	67	
896	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/C	N57, O56, S58, T59	SD1572-574	11.3	2.9	4.6	○	灰白	浅黄	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	67	
897	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	K57	SD1574	11.7	3.0	4.8	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	67	
898	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B/D	1/57	SD1574	5.9	1.3	3.0	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	67	
899	瓦葺	普灯	S/D	L・N57, O56	SD1574-1737-1738	7.8	5.0	6.8	○	黒	黒	河原スタンプ文	52	68	
900	瓦葺	普灯	B/D	N56, Q57	SD1574	9.3	4.7	8.2	○	黒	黒	河原スタンプ文	52	68	
901	瓦葺	普灯	B/D	K57	SD1574	11.2	-	10.0	○	黒	黒	河原スタンプ文	52	68	
902	瓦葺	普灯	B/C	P68	SD1734	5.4	3.1	3.8	○	黒	白	輪子ナ葺	52	68	
903	瓦葺	普灯	B/D	1・K57	SD1574	-	-	-	○	黒	黄	ヘア記号	52	68	
904	中區	青磁焼	B/D	1/57	SD1574	10.0	-	-	○	白	白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
905	中區	白磁焼	B/D	L57, M66, P59	SD1574	12.2	4.7	4.6	○	白	白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
906	中區	青磁焼	B/D	1・K・1/57	SD1574	11.8	3.2	5.8	○	白	白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
907	中區	白磁焼	B/D	K・Q57	SD1574	17.8	3.6	10.2	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
908	中區	白磁焼	B/C	1/57	SD1574	12.0	3.4	5.4	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
909	中區	白磁焼	B/D	K57	SD1574	9.6	2.6	4.8	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
910	中區	白磁焼	B/D	1/57	SD1574	8.6	1.9	5.0	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
911	中區	白磁焼	B/D	1/57	SD1574	12.4	2.5	7.0	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
912	中區	白磁焼	B/D	R63, T58	SD1574 兼上	13.8	5.0	4.2	○	明緑	明緑	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
913	中區	白磁焼	B/D	P59	SD1574	-	-	4.4	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
914	中區	白磁焼	B/D	U62・A64	SD501, 兼下	9.6	2.7	3.6	○	浅黄	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
915	中區	白磁焼	B/D	Q57	SJ-574	14.1	-	-	○	灰	灰	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
916	中區	白磁焼	B/D	Q59	SD-574	-	-	5.9	○	灰白	灰白	大宮2 印花 輪子ナ葺	52	68	
917	越前	大塚	-	A56トレンチ	SS493 F種	-	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
918	上野賢	瓦	C	A59	SD501	6.3	1.7	3.0	○	浅黄	浅黄	大塚	52	70	
919	上野賢	瓦	C	A59	SD501	6.9	1.7	3.0	○	浅黄	浅黄	大塚	52	70	
920	上野賢	瓦	B	P59	-	6.2	1.5	3.1	○	浅黄	浅黄	大塚	52	70	
921	上野賢	瓦	B	A29	-	6.7	1.5	3.0	○	浅黄	浅黄	大塚	52	70	
922	上野賢	瓦	D	Q59	SD-574	7.3	1.7	3.5	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
923	上野賢	瓦	D	Q59	SD-574	7.2	1.9	3.8	○	浅黄	浅黄	大塚	52	70	
924	上野賢	瓦	D	Q59	SD-574	7.2	1.7	3.2	○	浅黄	浅黄	大塚	52	70	
925	上野賢	瓦	C	A60	S501	8.6	2.0	4.4	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
926	上野賢	瓦	C/D	A58	S501	8.7	2.0	4.4	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
927	上野賢	瓦	C/D	A58	S501	8.6	1.8	4.4	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
928	上野賢	瓦	D	Q59	SD1574	8.9	1.7	4.6	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
929	上野賢	瓦	D	Q59	SD1574	10.8	2.4	3.4	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
930	上野賢	瓦	C/D	A58	SD501	10.8	2.5	6.0	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
931	上野賢	瓦	C/D	Q59	SD1574	9.6	-	-	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
932	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	B	P68	特別格上葺	8.8	4.2	3.4	○	白	白	大塚	52	70	
933	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	C	A59	特別格上葺	9.6	-	-	○	白	白	大塚	52	70	
934	瀬戸・東濃	灰物瓦葺	D	S56	特別格上葺	12.0	3.0	5.9	○	浅黄	浅黄	大塚	52	70	
935	中區	青磁焼	C/D	A58, Q59	SD501-1574	13.2	8.1	4.6	○	明緑	明緑	大塚	52	70	
936	中區	青磁焼	D	S56, T・U53	特別格上葺	6.5	1.8	12.6	○	灰白	灰白	大塚	52	70	
937	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	14.0	19.4	14.0	○	灰	灰	大塚	52	70	
938	中區	青磁焼	D	15・56区	灰葺	10.0	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
939	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
940	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
941	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
942	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
943	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
944	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
945	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
946	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
947	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
948	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
949	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
950	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
951	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
952	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
953	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
954	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
955	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
956	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
957	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
958	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
959	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
960	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
961	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
962	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	
963	中區	青磁焼	D	18・28区	灰葺	6.2	-	-	○	灰	灰	大塚	52	70	

表4 金属製品観察表(銭貨を除く)

注1: 274~276, 429, 679, 880の重量については「長」の「径」, 「幅」の「厚」, 「厚」の「径」を示す。

注2: 表裏の「」は裏面に存在を示す。

注3: 材質については表裏から顕微鏡に観察したものであり、化学分析を施した結果ではない。

No.	種類	材質	区画	面	地区	層/濃縮	径長(cm)			備考	国	PL					
							長	幅	厚								
134	小柄	鉄	A	I	R71	鍍土	1.9	0.4	刀身欠	19	26						
131	拳銃	鉄	B	I	R68	鍍土	19.6	13.9	1.5		17	32					
132	銃	鉄	B	I	L71	鍍土			銃径22.8		17	32					
133	銃	鉄	B	I	O87		6.8	1.2	1.0	基部4.2cm		17	32				
134	銃	鉄	B	I	N70	鍍土張り土	3.9	1.1	0.9	全长1.7cm	先端部刃状		17	32			
136	刀身	鉄	B	I	A66	S-2601				径1.3			17	32			
296	門金具	鉄	II	II	S65	鍍銀	13.5	13.2	0.85		先端の4cm程度が曲がる		25	39			
267	鍍金	鉄	B	II	L57	鍍土	9.8	1.9	1.4				25	39			
268	銃	鉄	II	II	O57	焼土	10.2	4.0	0.9				25	39			
269	銃	鉄	B	II	T64	鍍土	6.5	(2.2)	0.6				25	39			
270	銃	鉄	B	II	Q67	SD1780	15.8			径0.4			25	39			
271	銃	鉄	B	II	T68	鍍銀	20.2	3.8	0.4				25	39			
272	銃	鉄	B	II	E61	鍍銀色上	15.5	4.4	0.5		大型の削りきで刃先		25	39			
273	手斧	鉄	II	I	O58	SD1576	17.0	3.5	2.8		柄と柄に銃撃の痕が遺存		25	39			
274	水筒	青銅	B	II	N71	黄銅色上	0.9	2.9	3.0				25	39			
275	六疊	古銅	B	II	T66	鍍銀	4.2	1.8	2.0				25	39			
276	曲刀	古銅	B	II	U64	鍍土	5.1	2.3	1.8		赤色付塗物		25	39			
277	斧	青銅	B	II	S59	鍍土	(18.3)	1.2	0.2		先端・耳が欠	毛彫文字 魚々イ	25	39			
278	小柄	古銅	B	II	T68	鍍銀	10.0	1.6	0.6		刀身欠	基部に鍍銀の孔		25	39		
229	小柄	鋼	B	II	Q69	黄銅色上層	(9.4)	1.4	0.4		刀身欠			25	39		
280	短刀	古銅	B	II	T64	SK1755	4.0	3.5	1.5		鍍銀			25	39		
281	短手金具	青銅	B	II	T64	SK1755	2.5	2.0	0.4		280に付属			25	39		
282	短手金具	真鍮	B	II	N57	SD1758	3.1	0.9	0.3					25	39		
283	短刀	鋼	II	II	O57	鍍銀色上	(1.0)			径1.8			25	39			
267	斧	青銅	C	I	T63	SP1808	1.80			径0.3	下帯のみ			29	43		
398	斧	青銅	C	I	A59	SD501	23.6			径0.5	鋸面刃部	上帯は丸みを帯びる	漆塗		29	43	
425	目録別	鉄	C	II	A59	SD501	5.8	2.4	0.2		赤色付塗物あり			31	47		
426	短手金具	真鍮	C	II	T61	-	(12.8)	1.0	0.1		人様の遺物あり			31	47		
427	切刃	鉄	C	II	R61	鍍土	8.3	7.3	0.4		六重	中央部に黒色塗物が遺存			31	47	
428	銃	鉄	C	II	S59	SD1572	(16.0)	(1.2)	0.3					31	47		
429	拳銃	青銅	C	II	U62	鍍銀	6.3	2.4	2.1					31	47		
430	口金物	青銅	C	II	T62	-	4.2	2.1	0.6		鍍銀は魚々字様に朱書き	接合部欠			32	47	
431	口金物	青銅	C	II	Q60	鍍銀	3.5	1.4	2.8						32	47	
432	刀	鉄	C	II	S62	鍍銀	(27.2)	2.1	0.4		刃先欠				32	47	
433	小柄	真鍮	C	II	T61	-	9.6	1.5	0.5		鍍銀は魚目のみ				32	47	
434	小柄	真鍮	C	II	S61	鍍銀	9.5	1.4	0.5		刃先は魚目のみ	料通し孔あり			32	47	
556	銃	鉄	D	I	L51	SP1617	6.1	3.1	0.5						38	54	
557	斧	青銅	D	I	N54	鍍土	31.7	1.0	0.8		木柄を削りつけた裏あり	裏に磨付			38	54	
558	短手杖	鉄	D	I	S54	-	13.9	(6.0)	0.9		2系				38	54	
559	短手杖	鉄	D	I	L51	SP1617	8.3	0.65	0.15						38	54	
560	曹摺	古銅	D	I	S58	SD1574	-	-	-		元元17mm20mm	鋸面刃部に沈黙2条			38	54	
561	銃	鉄	D	I	K63	鍍土	(7.5)	1.1	1.0		先端部欠				38	54	
562	銃	鉄	D	I	K55	鍍土	(8.3)	1.2	1.1						38	54	
563	短刀	鉄	D	I	O51	鍍土				径1.2					38	54	
564	小柄	古銅	D	I	K56	鍍銀	(9.0)	1.4	0.6		刀身欠	鍍銀塗物			38	54	
565	短刀	青銅	D	I	H84	鍍土	6.3	1.9	0.5						38	54	
566	丁字柄	青銅	D	I	N55	鍍土層	6.8	3.3	0.6		鋸面刃部				38	54	
567	短手杖	青銅	D	I	S58	SD1574	(6.9)	(3.2)	(3.2)		仏具(曹摺)				38	54	
674	釘	鉄	D	II	S56	鍍土	17.7	2.6	2.1		先端部欠	上帯に木製の表彫			44	59	
675	斧	古銅	D	II	T54	鍍銀色上	20.3	0.5	0.3						44	59	
676	短手杖	鉄	D	II	L54	SD1584	(18.5)	4.2	4.2		結末上帯部欠	鍍銀一帯欠あり			44	59	
677	銃	鉄	D	II	T56	鍍土	26.2	4.8	0.6		刃部に木質付物				44	59	
678	拳銃	青銅	D	II	L52	鍍土	5.0	2.0	2.1		赤色付塗物				44	59	
679	短手金具	青銅	D	II	Q51	SK1832	5.8	1.7	0.1		2系金物	鍍金			44	59	
680	短手金具	青銅	D	II	T56	鍍土	4.2	(2.0)	0.3		孔あり				44	59	
782	金	青銅	B/C	I	T62	SD1272	17.8	2.8	2.0		径0.3	鋸面刃部	上帯部に鋸目		50	64	
888	短刀	鉄	B/D	I	S56	SK1574	5.8								53	68	
889	引手金具	青銅	-	-	-	-				径1.4	0.8				53	68	
890	短手金具	真鍮	B/C	II	T61	鍍・鍍土	8.0	0.9	0.5						53	68	
891	刀身	鉄	B/D	II	M57	SD1274	(21.5)	1.4	0.2						53	68	
892	短手杖	青銅	B/D	II	M57	SD1274	7.5	3.2	0.5						53	68	
893	拳銃	古銅	B/D	II	L57	SD1274	4.2	1.4	1.5						53	68	
894	短手杖	青銅	B/D	II	N56	SD1274				径2.3	2.3				53	68	
895	短手杖	鉄	B/D	II	K57	SD1274	22.1	5.8	0.8		鍍銀				53	68	
920	斧	鉄	B/D	II	Q57	鍍銀色上	(23.7)	2.5	1.8						56	71	
931	短手杖	鉄	B	II	L58	鍍銀色付塗物	(13.0)	(7.0)	(3.5)		2系	口金付物			56	71	
922	短手杖	青銅	C/D	II	A58	SD1272	33.2	0.7	0.8			鋸面刃部	目打欠	内帯に磨付		56	71
933	小柄	青銅	D	II	S56	鍍土	9.6	1.4	0.5		刀身欠				56	71	
934	内帯	青銅	C	II	T62	赤色鍍土上				径2.5	0.4				56	71	
994	短手杖	-	-	-	22R	鍍土	8.1	2.3	-						57	72	
960	引手金具	古銅	-	-	-	-	9.7	4.9	0.7						57	72	
980	切刃	青銅	-	-	22R	鍍土	4.3	2.4	0.2						57	72	

No	種類	材質	区画	面	地区	種/遺構	寸法(cm)			備考	図	
							長	幅	厚			
136	礎石	凝灰岩	B	1	Q66	SD1570	140	34	17	柱止限、小口と側面に割渡	17/32	
137	素土	安山岩	B	1	Q57	SD1570				柱止限、小口と側面に割渡	17/32	
138	素土	安山岩	B	1	S69	SD1570				柱止限、小口と側面に割渡	17/32	
139	バンドコシ	凝灰石	B	1	Q49	SD1666	171	232	24	平削内形、素土と素土	18/30	
140	バンドコシ	凝灰石	B	1	Q67		187	252	36	平削内形、素土と素土	18/32	
141	瓦版	凝灰石	B	1	K99		76	130	74		18/32	
142	石仏	凝灰石	B	1	T68	SD301	110(9)	128(6)	160	1→素土、素土、赤土、黒色土(赤土)付	18/32	
143	台座状	凝灰石	B	1	Q69		308	336	82	底面にツル状土の高低加工あり	18/32	
303	礎石	凝灰岩	B	3	T64	素土	152	89	23	素土	27/41	
304	礎石	凝灰岩	B	3	T68	素土	106	48	166	長方形	27/41	
305	礎石	凝灰岩	B	3	N71	黄褐色土	159	69	18	長方形、素土付	27/41	
306	礎石	凝灰岩	B	3	L59	赤土	107	32	14	水受けおよび排水の付具等、軽い瓦版	27/41	
307	礎石	凝灰岩	B	3	M66	赤土	82	34	14	文字線、側面	27/41	
308	瓦版	凝灰岩	B	3	T68	素土	152	89	23		27/41	
309	瓦版	凝灰岩	B	3	P68	赤土	57	21	21		27/41	
310	瓦版	凝灰石	B	3	N71	黄褐色土	148	34	24	隅部から長さ2.2cmの孔、反対側は平削	27/41	
311	瓦版	凝灰石	B	3	N71	黄褐色土	160	46		隅部から1.7cmの孔、反対側は平削	27/41	
312	礎石	凝灰石	B	3	O・P57・Q56他	バット、SD1574他	131(1)	122(4)	24	平削長方形	27/41	
313	礎石	凝灰石	B	3	Q69	素土(SD1666)	143	304	304	上口、8分角、素土付	27/41	
314	礎石	凝灰石	B	3	P68		125	68			27/41	
315	瓦版	凝灰石	B	3	T63	素土	170	20	67	目の間に縦線もしくは素土より黒色	27/41	
369	瓦版	凝灰石	B	3	N61	素土	150	67	16	隅部から長さ2.2cmの孔、反対側は平削	29/43	
370	バンドコシ	凝灰石	C	1	P40・K1	SD1572	170	216	36	平削内形	36/30	
439	瓦版	凝灰岩	C	1	U62	素土	150	67	16	平削長方形、素土付	36/30	
480	礎石	凝灰石	C	3	T61	赤土	(15.1)	(24.4)	30	内側面	36/30	
481	バンドコシ	凝灰石	C	3	R40	素土	134	172	27	平削D形、全面素土	36/30	
482	バンドコシ	凝灰石	C	3	Q62	R60・61	SD1735、素土	152	228	280	平削内形、素土付、素土付	36/30
483	瓦版	凝灰石	C	3	T62	素土	150	67	16	平削内形、素土付	36/30	
484	瓦版	凝灰石	C	3	S61	素土	19	26	30	刀痕、素土付	36/30	
588	瓦版	凝灰石	C	3	T32	SB1656素土	(3.0)	18	0	素土、素土、素土、素土	38/54	
571	礎石	安山岩	D	1	M51		167	77	64	素土	39/54	
572	礎石	凝灰岩	D	1	S57		170	65	60	素土	39/54	
573	礎石	凝灰岩	D	1	S52	赤土	104	51	33	素土、素土、素土、素土	39/54	
574	礎石	凝灰岩	D	1	T54	赤土	72	33	05	素土、素土、素土、素土	39/54	
575	瓦版	安山岩	D	1	L51	SK1627	84	19	48	素土、素土、素土、素土	39/54	
737	礎石	凝灰石	D	3	L52	赤土	571	623	42	1→素土、素土、素土、素土	46/60	
738	バンドコシ	凝灰石	D	3	Q51	SK1832	130	115	27	平削長方形	47/60	
739	バンドコシ	凝灰石	D	3	S56	素土	206	211	42	平削内形	47/60	
740	バンドコシ	凝灰石	D	3	Q51	SK1832	182	178	163	平削は長方形に素土付	47/60	
796	礎石	凝灰岩	B/C	1	P62	SD1672	110	47	33	素土、素土、素土、素土	50/61	
797	バンドコシ	凝灰石	B/D	1	K57	SD1874	147	110	30	平削D形、中央部に長方形の窪みあり	50/64	
798	瓦版	凝灰石	-	1	A61	SK493	167	78	49	中央に凹、素土、素土、素土	50/66	
908	瓦版	凝灰石	3/C	3	P61	SD1672	195	80	59	素土、素土、素土、素土	56/62	
909	瓦版	凝灰石	3/D	3	P56、K56、65、S38	SD1574	92	111	290	平削内形、素土付	55/69	
944	瓦版	凝灰石	B	1	L57	黄褐色土	60	32	11		56/71	
945	瓦版	凝灰石	B	1	Q59	黒色イロコシ	19	19	05	素土	56/73	
970	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	19	19	04	素土	58/73	
971	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	19	19	04	素土	58/73	
972	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	30	19	09	素土	58/73	
973	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	178	43		隅部から長さ1.8cmの孔、反対側は平削	58/73	
974	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	520	160	226	全面平削に仕上げ、外側に浅い溝	58/73	
975	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	344	126	300	平削内形、素土、素土、素土	58/73	
976	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	170	112		平削、素土、素土	58/73	
977	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	118	118		平削、素土、素土	58/73	
978	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	118	118		平削、素土、素土	58/73	
980	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	118	118		平削、素土、素土	58/73	
981	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	118	118		平削、素土、素土	58/73	
982	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	118	118		平削、素土、素土	58/73	
983	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	118	118		平削、素土、素土	58/73	
984	瓦版	凝灰石	-	-	-	-	118	118		平削、素土、素土	58/73	

表8 线货观察表

No	线货名	区画	面	地区	号/通称	径长(mm)			条件	卸船年	番号	国	PL
						径	厚	重					
985	德元通	A	I	A70	SD501	26.0	1.4	3.1	真骨	南	621	60	71
986	德元通	A	I	J72	SV1822	23.7	1.0	2.3	(真骨)	南	621	60	71
987	德元通	A	I	J72	SK1835	24.4	1.1	2.7	真骨	北北	621	60	71
988	德元通	A	II	J70	SK1728	25.0	0.9	1.8	(真骨)	南	621	60	71
989	德元通	A	II	P72	德元	23.5	1.5	3.6	(真骨)	南	621	60	71
990	天能元	A	II	Q71	德元	21.9	1.4	4.5	真骨	北北	1023	60	71
991	德元通	A	II	Q72	德元	23.3	1.1	3.0	真骨	北北	1026	60	71
992	德元通	A	II	Q70	德元	22.6	0.7	1.7	真骨	北北	1026	60	71
993	德元通	A	II	Q72	德元	23.2	1.2	2.2	打骨	北北	1023	60	71
994	德元通	A	II	P71	德元	23.9	0.9	1.9	真骨	北北	1026	60	71
995	德元通	A	II	P71	德元	24.1	1.1	2.5	(真骨)	南北	1190	60	71
996	德元通	B	I	N68	德元	24.3	1.1	2.5	(真骨)	南	621	60	71
997	德元通	B	I	P62	ND1572	21.0	0.9	2.7	(真骨)	南	621	60	71
998	德元通	B	I	A68	SD501	24.3	1.0	2.9	真骨	北北	995	60	71
999	德元通	B	I	N66	SD1996	24.4	1.1	3.1	真骨	北北	995	60	71
1000	德元通	B	I	O66	德元	24.8	1.0	2.6	真骨	北北	1023	60	71
1001	德元通	B	I	U64	德元	23.9	1.0	3.2	真骨	北北	1026	60	71
1002	德元通	B	I	S66	德元	23.7	0.8	1.9	真骨	北北	1054	60	71
1003	德元通	B	I	N68	德元	24.3	1.1	3.3	真骨	北北	1056	60	71
1004	德元通	B	I	T68	德元	23.9	1.1	2.6	真骨	北北	1061	60	71
1005	德元通	B	I	P62	SD1572	24.5	1.1	3.2	真骨	北北	1026	60	71
1006	德元通	B	I	O57	德元	24.3	1.0	3.2	(真骨)	北北	1023	60	71
1007	德元通	B	I	N70	德元	24.1	1.3	3.8	真骨	北北	1026	60	71
1008	德元通	B	I	P62	SD1572	23.7	1.0	3.1	打骨	北北	1026	60	71
1009	德元通	B	I	O71	德元	23.5	0.6	1.5	(真骨)	北北	1107	60	71
1010	德元通	B	I	P62	SD1572	23.8	1.0	3.1	真骨	北北	1111	60	71
1011	德元通	B	I	S69	SD1996	23.9	1.0	2.7	(真骨)	南	1208	60	71
1012	德元通	B	I	L64	德元	24.1	0.9	2.6	真骨	南	621	60	71
1013	德元通	B	I	M66	德元	24.3	1.1	3.1	真骨	北北	621	60	71
1014	德元通	B	I	M66	德元	24.3	1.0	2.9	(真骨)	南	621	60	71
1015	德元通	B	I	P67	德元	22.9	1.0	2.4	(真骨)	北	621	60	71
1016	德元通	B	II	S66	德元	23.5	0.8	2.3	(真骨)	南	621	60	71
1017	德元通	B	II	U63	德元	23.3	0.8	2.1	(真骨)	南	621	60	71
1018	德元通	B	II	T68	德元	23.7	0.9	2.7	(真骨)	南	621	60	71
1019	德元通	B	II	T67	德元	24.1	0.9	2.3	(真骨)	南	621	60	71
1020	德元通	B	II	L64	德元	24	1.0	2.7	(真骨)	北北	976	60	71
1021	德元通	B	II	N57	SD1738	24	1.0	3.0	(真骨)	北北	976	60	71
1022	德元通	B	II	M66	德元	24.6	1.1	3.6	(真骨)	北北	976	60	71
1023	德元通	B	II	M66	SD1570	24.5	1.1	3.4	真骨	北北	990	60	71
1024	德元通	B	II	O68	德元	26.3	1.0	2.6	真骨	北北	990	60	71
1025	德元通	B	II	P57	德元	25.3	1.0	3.0	真骨	北北	990	60	71
1026	德元通	B	II	O68	德元	24.7	1.1	3.5	真骨	北北	990	60	71
1027	德元通	B	II	L62	德元	24.2	1.1	3.4	真骨	北北	990	60	71
1028	德元通	B	II	T64	SK1755	24.4	1.1	3.1	真骨	北北	1004	60	71
1029	德元通	B	II	L64	德元	24	1.2	3.2	真骨	北北	1004	60	71
1030	德元通	B	II	K72	德元	23.6	1.1	3.0	真骨	北北	1004	60	71
1031	德元通	B	II	O68	德元	25.1	1.2	3.8	真骨	北北	1026	60	71
1032	德元通	B	II	L64	德元	25.1	1.1	3.2	真骨	北北	1026	60	71
1033	德元通	B	II	L58	德元	25.1	1.1	3.4	真骨	北北	1026	60	71
1034	德元通	B	II	N70	德元	23.5	1.1	3.0	真骨	北北	1026	60	71
1035	德元通	B	II	S57	德元	24.4	1.0	2.9	真骨	北北	1026	60	71
1036	德元通	B	II	O68	德元	24.0	1.1	2.7	真骨	北北	1026	60	71
1037	德元通	B	II	L64	德元	24.7	1.1	3.7	真骨	北北	1026	60	71
1038	德元通	B	II	S66	德元	24.7	0.9	3.4	真骨	北北	1026	60	71
1039	德元通	B	II	S66	德元	24.2	1.1	2.7	真骨	北北	1026	60	71
1040	德元通	B	II	S66	德元	24.7	1.0	2.9	真骨	北北	1026	60	71
1041	德元通	B	II	T67	德元	24.0	1.1	3.4	真骨	北北	1026	60	71
1042	德元通	B	II	S67	德元	23.7	1.1	2.7	真骨	北北	1026	60	71
1043	德元通	B	II	O68	德元	24.7	1.1	3.8	真骨	北北	1026	60	71
1044	德元通	B	II	N67	德元	24.8	0.9	2.8	真骨	北北	1026	60	71
1045	德元通	B	II	S68	SK1652	24.8	1.1	2.8	真骨	北北	1026	60	71
1046	德元通	B	II	S66	德元	24.6	1.1	3.4	真骨	北北	1026	60	71
1047	德元通	B	II	S66	德元	24.9	1.1	3.3	真骨	北北	1026	60	71
1048	德元通	B	II	S66	德元	26.2	1.0	3.2	真骨	北北	1026	60	71
1049	德元通	B	II	L64	德元	24.8	0.9	3.0	真骨	北北	1026	60	71
1050	德元通	B	II	L64	德元	24.5	1.0	2.9	真骨	北北	1026	60	71
1051	德元通	B	II	S66	德元	24.8	1.1	3.9	真骨	北北	1026	60	71
1052	德元通	B	II	T67	德元	24.7	0.8	2.1	真骨	北北	1026	60	71
1053	德元通	B	II	L63	德元	25.1	1.0	2.8	真骨	北北	1026	60	71
1054	德元通	B	II	L59	德元	26.0	0.9	3.1	真骨	北北	1026	60	71
1055	德元通	B	II	L59	德元	24.5	1.2	3.9	真骨	北北	1026	60	71
1056	德元通	B	II	L64	德元	24.1	0.9	2.9	真骨	北北	1026	60	71
1057	德元通	B	II	S67	德元	23.8	1.0	3.2	真骨	北北	1026	60	71
1058	德元通	B	II	T67	德元	24.3	0.9	2.6	真骨	北北	1026	60	71
1059	德元通	B	II	L64	德元	23.1	1.1	2.8	真骨	北北	1026	60	71
1060	德元通	B	II	O68	德元	24.1	1.0	3.0	真骨	北北	1026	60	71
1061	德元通	B	II	T68	德元	24.3	1.0	2.9	真骨	北北	1026	60	71
1062	德元通	B	II	M64	德元	24.8	1.1	3.4	真骨	北北	1026	60	71
1063	德元通	B	II	L64	德元	23.9	0.9	2.6	真骨	北北	1026	60	71
1064	德元通	B	II	S66	德元	24.6	1.1	3.4	真骨	北北	1026	60	71
1065	德元通	B	II	S68	德元	23.1	0.8	1.4	真骨	北北	1026	60	71
1066	德元通	B	II	O66	德元	24.0	0.9	2.7	真骨	北北	1026	60	71
1067	德元通	B	II	L64	德元	25.6	0.9	2.6	真骨	北北	1026	60	71
1068	德元通	B	II	T67	德元	23.9	1.1	3.2	真骨	北北	1026	60	71
1069	德元通	B	II	L59	德元	25.1	1.0	3.1	真骨	北北	1026	60	71
1070	德元通	B	II	L64	德元	25.9	0.9	2.6	真骨	北北	1026	60	71
1071	德元通	B	II	A68	SD501	23.1	1.2	3.1	真骨	北北	1026	60	71

№	船名	区画	画	地区	原/造船	長さ(m)			骨体	初年	備考	備	PL
						全	厚	容					
1072	北平元寶	B	F	T68	炭質	21.0	1.0	3.0	真骨	北平	1064	62	75
1073	北平元寶	B	F	T68	炭質	21.1	1.2	3.8	真骨	北平	1064	62	75
1074	北平元寶	B	F	L59	粘土	23.8	1.1	3.1	真骨	北平	1064	62	75
1075	北平元寶	B	F	L62	炭質	23.1	1.3	3.3	真骨	北平	1064	62	75
1076	北平元寶	B	F	N57	SD178	21.8	0.8	2.7	真骨	北平	1064	62	75
1077	北平元寶	B	F	L59	粘土	23.0	1.1	3.7	真骨	北平	1068	62	75
1078	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	24.2	1.1	3.4	真骨	北平	1068	62	75
1079	北平元寶	B	F	T68	炭質	24.8	1.0	3.5	真骨	北平	1068	62	75
1080	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	21.0	1.3	3.9	真骨	北平	1068	62	75
1081	北平元寶	B	F	O68	粘土	24.4	1.2	2.9	真骨	北平	1068	62	75
1082	北平元寶	B	F	O69	炭質	24.7	1.0	3.2	真骨	北平	1068	62	75
1083	北平元寶	B	F	P68	粘土	21.0	1.0	2.6	真骨	北平	1068	62	75
1084	北平元寶	B	F	L59	粘土	24.1	1.0	3.2	真骨	北平	1078	62	75
1085	北平元寶	B	F	L59	粘土	24.4	0.9	2.9	真骨	北平	1078	62	75
1086	北平元寶	B	F	S66	炭質	23.8	1.0	3.5	真骨	北平	1078	62	75
1087	北平元寶	B	F	S66	炭質	23.8	0.9	2.6	真骨	北平	1078	62	75
1088	北平元寶	B	F	T68	硬質粘土	24.3	1.4	3.6	真骨	北平	1078	62	75
1089	北平元寶	B	F	O68	粘土	25.0	1.1	3.1	真骨	北平	1078	62	75
1090	北平元寶	B	F	L67	粘土	23.8	1.0	2.9	真骨	北平	1078	62	75
1091	北平元寶	B	F	L58	粘土	23.7	1.2	3.6	真骨	北平	1078	62	75
1092	北平元寶	B	F	L59	粘土	24.7	1.1	3.8	真骨	北平	1078	62	75
1093	北平元寶	B	F	L59	粘土	23.7	1.2	3.2	真骨	北平	1078	62	75
1094	北平元寶	B	F	N57	SD178	23.7	1.1	3.9	真骨	北平	1078	62	75
1095	北平元寶	B	F	O69	粘土	24.0	1.1	3.6	真骨	北平	1078	62	75
1096	北平元寶	B	F	L68	粘土	24.0	0.9	2.4	真骨	北平	1078	62	75
1097	北平元寶	B	F	O66	粘土	23.1	1.1	3.7	真骨	北平	1078	62	75
1098	北平元寶	B	F	T64	SK178	23.9	1.0	3.3	真骨	北平	1078	62	75
1099	北平元寶	B	F	L59	粘土	23.9	1.3	3.6	真骨	北平	1086	62	75
1100	北平元寶	B	F	L61	硬質粘土	24.9	1.2	3.9	真骨	北平	1086	62	75
1101	北平元寶	B	F	O68	粘土	23.0	1.0	2.2	真骨	北平	1086	62	75
1102	北平元寶	B	F	P27	粘土	21.6	1.1	3.3	真骨	北平	1086	62	75
1103	北平元寶	B	F	O68	粘土	24.3	0.9	2.6	真骨	北平	1086	62	75
1104	北平元寶	B	F	T68	炭質	24.2	1.1	3.1	真骨	北平	1086	62	75
1105	北平元寶	B	F	O63	粘土	23.3	1.0	2.3	真骨	北平	1086	62	75
1106	北平元寶	B	F	O68	粘土	23.2	0.8	1.9	真骨	北平	1086	62	75
1107	北平元寶	B	F	S59	粘土	24.1	1.1	3.6	真骨	北平	1086	62	75
1108	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	24.4	1.0	3.0	真骨	北平	1086	62	75
1109	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	23.8	1.1	3.1	真骨	北平	1086	62	75
1110	北平元寶	B	F	O68	粘土	24.1	1.0	2.8	真骨	北平	1086	62	75
1111	北平元寶	B	F	T68	炭質	24.1	1.0	3.0	真骨	北平	1086	62	75
1112	北平元寶	B	F	N67	真骨	23.5	1.0	3.0	真骨	北平	1086	62	75
1113	北平元寶	B	F	T66	硬質粘土	21.5	0.8	2.3	真骨	北平	1086	62	75
1114	北平元寶	B	F	O68	粘土	22.9	0.9	2.5	真骨	北平	1086	62	75
1115	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	23.0	0.9	3.1	真骨	北平	1086	62	75
1116	北平元寶	B	F	O69	炭質	23.9	1.0	2.4	真骨	北平	1086	62	75
1117	北平元寶	B	F	S66	炭質	23.6	1.2	3.5	真骨	北平	1,01	62	75
1118	北平元寶	B	F	N66	粘土	23.9	1.2	3.2	真骨	北平	1,01	62	75
1119	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	24.2	1.3	3.3	(真骨)	北平	1,01	62	75
1120	北平元寶	B	F	L57	粘土	23.2	0.9	2.6	公称	北平	1,11	62	75
1121	北平元寶	B	F	L59	粘土	21.6	1.2	3.4	真骨	北平	1,11	62	75
1122	北平元寶	B	F	P27	粘土	25.1	1.1	2.9	真骨	北平	1,11	62	75
1123	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	24.1	0.7	2.8	(真骨)	北平	1,21	62	75
1124	北平元寶	B	F	T68	炭質	21.3	1.3	3.5	(真骨)	北平	1,31	62	75
1125	北平元寶	B	F	L67	SD174	23.4	1.2	3.1	(真骨)	北平	1,36	62	75
1126	北平元寶	B	F	N70	-	23.9	1.2	3.0	(真骨)	北平	1,36	62	75
1127	北平元寶	B	F	S66	炭質	23.2	1.2	3.0	(真骨)	北平	1,36	62	75
1128	北平元寶	B	F	T68	炭質	21.6	0.8	2.0	(真骨)	北平	1,36	62	75
1129	北平元寶	B	F	O67	SK178	26.7	1.1	2.9	(真骨)	北平	1,45	62	75
1130	北平元寶	B	F	L57	粘土	25.9	1.6	3.4	(真骨)	北平	1,48	62	75
1131	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	25.7	1.2	3.2	(真骨)	北平	1,48	62	75
1132	北平元寶	B	F	L64	硬質粘土	25.0	1.1	3.2	(真骨)	北平	1,48	62	75
1133	北平元寶	B	F	N68	粘土	23.4	0.9	1.9	(真骨)	北平	1,48	62	75
1134	北平元寶	B	F	L64	粘土	21.5	1.2	3.4	(真骨)	北平	1,48	62	75
1135	北平元寶	B	F	T67	粘土	25.4	1.1	2.6	(真骨)	北平	1,48	62	75
1136	北平元寶	B	F	T67	粘土	25.2	1.2	3.4	(真骨)	北平	1,48	62	75
1137	北平元寶	B	F	N57	SD178	24.9	1.1	3.4	真骨	北平	1,48	62	75
1138	北平元寶	B	F	L58	黄色有膜質土	23.9	1.1	3.7	真骨	北平	1,48	62	75
1139	北平元寶	B	F	S67	黄色硬粘土	24.0	0.5	1.2	-	-	-	62	75
1140	北平元寶	C	F	T62	粘土	24.0	0.9	2.3	(真骨)	北平	1,48	62	75
1141	北平元寶	C	F	Q61	SK179	25.0	1.2	3.7	(真骨)	北平	1,48	62	75
1142	北平元寶	C	F	T62	炭質	24.0	1.0	2.4	(真骨)	北平	1,48	62	75
1143	北平元寶	C	F	S59	-	24.4	1.1	2.7	真骨	北平	1,48	62	75
1144	北平元寶	C	F	R63	粘土	24.6	1.1	3.7	真骨	北平	1,48	62	75
1145	北平元寶	C	F	O61	粘土	24.0	1.0	2.4	真骨	北平	1,48	62	75
1146	北平元寶	C	F	Q61	SK_799	24.0	1.2	3.6	(真骨)	北平	1,48	62	75
1147	北平元寶	C	F	A60	SD101	24.3	1.1	2.7	(真骨)	北平	1,48	62	75
1148	北平元寶	C	F	L62	炭質	24.4	0.9	3.1	(真骨)	北平	1,48	62	75
1149	北平元寶	C	F	S62	硬質粘土	24.6	0.7	1.8	(真骨)	北平	1,48	62	75
1150	北平元寶	C	F	S62	硬質粘土	24.6	1.2	3.4	(真骨)	北平	1,48	62	75
1151	北平元寶	C	F	T60	-	24.6	1.0	2.9	(真骨)	北平	1,48	62	75
1152	北平元寶	C	F	T62	-	24.4	1.0	2.9	真骨	北平	1,48	62	75
1153	北平元寶	C	F	O62	SD101	23.7	1.0	3.1	真骨	北平	1,48	62	75
1154	北平元寶	C	F	O60	炭質	23.8	0.9	2.9	真骨	北平	1,48	62	75
1155	北平元寶	C	F	O61	SK175	24.1	0.7	2.1	真骨	北平	1,48	62	75
1156	北平元寶	C	F	O61	炭質	23.8	0.8	2.7	真骨	北平	1,48	62	75
1157	北平元寶	C	F	O62	炭質	23.9	0.9	2.8	真骨	北平	1,48	62	75
1158	北平元寶	C	F	O62	炭質	21.6	1.0	2.6	真骨	北平	1,48	62	75
1159	北平元寶	C	F	R60	炭質	21.8	1.2	2.3	真骨	北平	1,48	62	75
1160	北平元寶	C	F	Q60	SD178	25.0	1.0	3.0	真骨	北平	1,48	62	75

No.	観覧名	区画	道	地区	種/道標	法量(中心)		書体	初脚年	備考	図	Pl.
						径	量					
1161	天宮通	C	II	R61	原簿	24.9	-0.32	真書	北宋	1017		64.76
1162	天宮通	C	II	S61	在原簿上	24.8	-2.35	真書	北宋	1020		64.76
1163	天宮通	C	II	U62	原簿	25.0	-1.32	真書	北宋	1020		64.76
1164	天宮通	C	II	Q61	原簿	23.1	-1.0	真書	北宋	1022		64.76
1165	天宮通	C	II	A59	SD1501	24.8	-0.33	真書	北宋	1024		64.76
1166	神楽通	C	II	S68	原簿	25.0	0.9	真書	北宋	1024		64.76
1167	景福通	C	II	T62	原簿	23.7	1.0	真書	北宋	1031		64.76
1168	山本通	C	II	S61	SD1735	24.6	0.9	真書	北宋	1038		64.76
1169	山本通	C	II	R62	SD1735	24.2	1.1	真書	北宋	1038		64.76
1170	山本通	C	II	U62	原簿	24.2	1.1	真書	北宋	1038		64.76
1171	山本通	C	II	Q61	原簿	24.5	1.0	真書	北宋	1038		64.76
1172	山本通	C	II	A59	SD1735	23.8	1.0	真書	北宋	1044		64.76
1173	景福通	C	II	S62	SD1735	24.8	0.8	真書	北宋	1054		64.76
1174	景福通	C	II	Q61	原簿	24.0	1.0	真書	北宋	1056		64.76
1175	山本通	C	II	U62	原簿	23.7	0.9	真書	北宋	1064		64.76
1176	山本通	C	II	Q60	原簿	23.3	1.7	真書	北宋	1068		64.76
1177	山本通	C	II	R61	原簿	24.3	1.7	真書	北宋	1068		64.76
1178	山本通	C	II	R60	原簿	24.1	1.7	真書	北宋	1068		64.76
1179	山本通	C	II	R62	SD1735	24.1	1.7	真書	北宋	1068		64.76
1180	山本通	C	II	R60	原簿	24.0	1.7	真書	北宋	1068		64.76
1181	山本通	C	II	R60	原簿	24.7	0.8	真書	北宋	1068		64.76
1182	山本通	C	II	R63	原簿	23.8	1.3	真書	北宋	1068		64.76
1183	山本通	C	II	T60	原簿	23.1	1.2	真書	北宋	1068		64.76
1184	山本通	C	II	R61	原簿	24.2	0.9	真書	北宋	1068		64.76
1185	山本通	C	II	R61	原簿	24.1	1.3	真書	北宋	1068		64.76
1186	山本通	C	II	T60	原簿	24.5	1.3	真書	北宋	1068		64.76
1187	山本通	C	II	R61	原簿	23.6	1.0	真書	北宋	1068		64.76
1188	山本通	C	II	U62	原簿	24.0	1.1	真書	北宋	1068		64.76
1189	山本通	C	II	T60	原簿	23.7	1.0	真書	北宋	1078		64.76
1190	山本通	C	II	S65	原簿	25.0	1.0	真書	北宋	1078		64.76
1191	山本通	C	II	S60	町角色土	24.3	1.1	真書	北宋	1078		64.76
1192	山本通	C	II	U61	原簿	23.9	1.2	真書	北宋	1078		64.76
1193	山本通	C	II	A59	SD1501	24.5	1.3	真書	北宋	1078		64.76
1194	山本通	C	II	S62	町角色土	24.1	1.1	真書	北宋	1078		64.76
1195	山本通	C	II	R61	原簿	23.6	-2.35	真書	北宋	1088		64.76
1196	山本通	C	II	U62	原簿	24.0	-1.3	真書	北宋	1088		64.76
1197	山本通	C	II	Q60	SD1572	23.7	1.1	真書	北宋	1088		64.76
1198	山本通	C	II	Q61	原簿	24.1	1.0	真書	北宋	1088		64.76
1199	山本通	C	II	T61	原簿	23.6	-0.27	真書	北宋	1094		64.76
1200	山本通	C	II	R62	SD1735	23.8	-2.35	真書	北宋	1094		64.76
1201	山本通	C	II	R61	原簿	23.8	0.8	真書	北宋	1094		64.76
1202	山本通	C	II	U62	原簿	23.8	0.9	真書	北宋	1094		64.76
1203	山本通	C	II	U60	原簿	24.5	1.0	真書	北宋	1101		64.76
1204	山本通	C	II	Q61	原簿	25.0	-2.31	真書	北宋	1101		64.76
1205	山本通	C	II	U62	原簿	24.9	1.3	真書	北宋	1101		64.76
1206	山本通	C	II	Q60	SD1572	24.6	1.3	真書	北宋	1101		64.76
1207	山本通	C	II	R61	原簿	23.6	1.0	真書	北宋	1101		64.76
1208	山本通	C	II	R61	原簿	24.7	1.1	真書	北宋	1111		64.76
1209	山本通	C	II	R60	原簿	24.5	1.2	真書	北宋	1111		64.76
1210	山本通	C	II	Q61	原簿	23.9	1.0	真書	北宋	1111		64.76
1211	山本通	C	II	U62	原簿	23.3	0.9	真書	北宋	1111		64.76
1212	山本通	C	II	U62	原簿	23.7	1.0	真書	南宋	1174	竹月並	65.76
1213	山本通	C	II	U60	原簿	23.9	1.3	真書	南宋	1368		65.76
1214	山本通	C	II	Q61	原簿	23.2	0.9	真書	明	1368		65.76
1215	山本通	C	II	S81	有線貫土	30.5	1.4	真書	明	1368	竹月並	65.76
1216	山本通	C	II	Q62	SD1735	30.3	0.7	真書	明	1368		65.76
1217	山本通	C	II	A59	SD1501	26.5	1.5	真書	明	1408		65.76
1218	山本通	C	II	Q61	原簿	25.3	1.4	真書	明	1408		65.76
1219	山本通	C	II	Q61	原簿	24.9	1.1	真書	明	1408		65.76
1220	山本通	C	II	Q61	原簿	24.9	1.2	真書	明	1408		65.76
1221	山本通	C	II	A60	SD1501	24.7	1.1	真書	北宋	1004		65.76
1222	山本通	C	II	A59	SD1501	24.7	1.2	真書	北宋	1008		65.76
1223	山本通	C	II	A59	SD1501	23.9	0.8	真書	北宋	1008		65.76
1224	山本通	D	I	Q53	SD1666	23.7	1.2	真書	北宋	621		65.77
1225	山本通	D	I	J52	原簿	24.0	1.4	真書	北宋	621		65.77
1226	山本通	D	I	M54	原簿	26.1	1.4	真書	北宋	621		65.77
1227	山本通	D	I	M54	原簿	24.0	1.2	真書	北宋	621		65.77
1228	山本通	D	I	S56	SD1574	23.6	1.1	真書	北宋	621		65.77
1229	山本通	D	I	A58	SD493	24.3	1.3	真書	北宋	996		65.77
1230	山本通	D	I	A59	SD1890	24.5	0.9	真書	北宋	996		65.77
1231	山本通	D	I	M54	原簿	26.3	1.3	真書	北宋	1004		65.77
1232	山本通	D	I	R52	SD1359内線土	24.3	1.3	真書	北宋	1004		65.77
1233	山本通	D	I	S58	原簿	24.2	1.0	真書	北宋	1004		65.77
1234	山本通	D	I	A52	SD1500	24.1	0.9	真書	北宋	1008		65.77
1235	山本通	D	I	Q56	原簿	25.0	1.2	真書	北宋	1008		65.77
1236	山本通	D	I	R51	原簿	24.8	0.8	真書	北宋	1008		65.77
1237	山本通	D	I	M54	原簿	26.5	1.3	真書	北宋	1008		65.77
1238	山本通	D	I	R56	原簿	24.5	1.2	真書	北宋	1020		65.77
1239	山本通	D	I	M55	ボット内線土	24.7	1.1	真書	北宋	1020		65.77
1240	山本通	D	I	M51	原簿	24.7	1.1	真書	北宋	1020		65.77
1241	山本通	D	I	M54	原簿	24.1	1.0	真書	北宋	1020		65.77
1242	山本通	D	I	Q56	原簿	24.9	1.3	真書	北宋	1020		65.77
1243	山本通	D	I	T56	SD1674	24.6	0.9	真書	北宋	1020		65.77
1244	山本通	D	I	T54	原簿	24.7	0.9	真書	北宋	1020		65.77
1245	山本通	D	I	A62	SD1580	24.8	-0.25	真書	北宋	1038		65.77
1246	山本通	D	I	T57	SD1676	24.0	-0.29	真書	北宋	1038		65.77
1247	山本通	D	I	U56	原簿	24.6	1.4	真書	北宋	1038		65.77
1248	山本通	D	I	Q56	原簿	24.9	1.1	真書	北宋	1038		65.77
1249	山本通	D	I	U62	原簿	24.7	1.4	真書	北宋	1038		65.77

№	銘柄名	区画	面	地区	層/建数	位置(mm)			方位	初年	備考	面	PL
						深	厚	重					
1250	皇天通資	D	I	Q52	橋土	223	10	26	東面	北米	1038	66	77
1251	皇天通資	D	I	152	橋土	210	09	26	東面	北米	1038	66	77
1252	皇天通資	D	I	M54	橋土	241	11	29	東面	北米	1068	66	77
1253	皇天通資	D	I	Q56	橋土	205	12	30	東面	北米	1068	66	77
1254	皇天通資	D	I	A52	SD1990	234	13	29	東面	北米	1068	66	77
1255	皇天通資	D	I	A38	SD1990	237	13	33	東面	北米	1088	66	77
1256	皇天通資	D	I	G33	橋土	234	11	30	東面	北米	1098	66	77
1257	皇天通資	D	I	M54	橋土	237	14	37	東面	北米	1098	66	77
1258	皇天通資	D	I	G37	SK1273	236	12	31	東面	北米	1098	66	77
1259	皇天通資	D	I	U54	橋土	241	10	30	東面	北米	1098	66	77
1260	元島通資	D	I	U55	SD1578	247	10	27	東面	北米	1078	66	77
1261	元島通資	D	I	A36	SD1990	244	12	29	東面	北米	1078	66	77
1262	元島通資	D	I	Q32	橋土	244	12	34	東面	北米	1088	66	77
1263	元島通資	D	I	M56	SD1574	236	07	26	東面	北米	1088	66	77
1267	元島通資	D	I	152	橋土	241	11	31	東面	北米	1088	66	77
1265	元島通資	D	I	A52	SD1990	245	10	29	東面	北米	1088	66	77
1266	元島通資	D	I	N55	橋土	246	08	20	東面	北米	1101	66	77
1267	皇天通資	D	I	T58	SD1574	247	10	23	東面	北米	1101	66	77
1268	皇天通資	D	I	M54	橋土	240	09	27	東面	北米	1101	66	77
1269	皇天通資	D	I	G38	橋土	241	12	26	東面	北米	1101	66	77
1270	大船通資	D	I	U53	SD1579	249	10	26	東面	北米	1107	66	77
1271	大船通資	D	I	T54	橋土	241	14	35	東面	北米	1111	66	77
1272	大船通資	D	I	A57	橋土	238	10	30	東面	北米	1111	66	77
1273	正島通資	D	I	T54	橋土	238	09	19	東面	北米	1157	66	77
1274	正島通資	D	I	M54	橋土	241	11	29	東面	南米	1174	66	77
1276	川島通資	D	I	M54	橋土	230	15	32	東面	南米	1188	66	77
1276	川島通資	D	I	U53	SD1579	226	11	27	東面	南米	1268	66	77
1277	川島通資	D	I	M56	SD1583	232	13	30	東面	南米	1368	66	77
1278	川島通資	D	I	K56	橋土	250	13	34	東面	南米	1368	66	77
1279	水島通資	D	I	K56	橋土	256	12	27	東面	南米	1408	66	77
1280	水島通資	D	I	K52	橋土	231	08	12	東面	南米	1408	66	77
1281	明船通資	D	I	T58	SD1574	241	11	29	東面	南米	1492	66	77
1282	富島通資	D	I	156	SD1386	248	09	13	東面	南米	1432	66	77
1283	藤子通資	○	E	538	橋土	235	11	27	東面	南米	621	66	77
1284	平島通資	○	E	538	橋土	230	09	23	東面	北米	995	66	77
1285	平島通資	○	E	T54	橋土	247	10	26	東面	北米	995	66	77
1286	平島通資	○	E	U58	SD1574	246	09	33	東面	北米	995	66	77
1287	平島通資	○	E	154	橋土	242	11	28	東面	北米	995	66	77
1288	平島通資	○	E	N54	橋土	240	10	26	東面	北米	995	66	77
1289	平島通資	○	E	Q56	橋土	231	09	22	東面	北米	995	66	77
1290	平島通資	○	E	R52	橋土	245	09	25	東面	北米	1038	66	77
1291	平島通資	○	E	T52	橋土	249	08	21	東面	北米	1038	66	77
1292	平島通資	○	E	S56	橋土	240	11	28	東面	北米	1047	66	77
1293	天島通資	○	E	T53	橋土	248	15	39	東面	北米	1092	66	77
1294	天島通資	○	E	R58	SD1574	221	09	26	東面	北米	1092	66	77
1295	明島通資	○	E	K56	橋土	247	11	28	東面	北米	1092	66	77
1296	明島通資	○	E	T54	橋土	249	09	24	東面	北米	1092	66	77
1297	皇天通資	○	E	A54	SD1580	240	08	20	東面	北米	1092	66	77
1298	皇天通資	○	E	R52	橋土	239	10	25	東面	北米	1098	66	77
1299	皇天通資	○	E	U58	S15124	259	10	32	東面	北米	1098	66	77
1300	皇天通資	○	E	54	SD1584	245	10	20	東面	北米	1098	66	77
1301	皇天通資	○	E	R58	橋土	240	12	33	東面	北米	1098	66	77
1302	皇天通資	○	E	S51	橋土	245	10	30	東面	北米	1098	66	77
1303	皇天通資	○	E	U54	SK1738	238	11	22	東面	北米	1098	66	77
1304	皇天通資	○	E	152	橋土	245	10	25	東面	北米	1098	66	77
1305	皇天通資	○	E	154	橋土	245	10	28	東面	北米	1098	66	77
1306	皇天通資	○	E	T56	橋土	247	11	32	東面	北米	1098	66	77
1307	皇天通資	○	E	R58	橋土	242	10	27	東面	北米	1098	66	77
1308	皇天通資	○	E	Q51	SK1832	233	11	27	東面	北米	1094	66	77
1309	皇天通資	○	E	R52	橋土	246	11	29	東面	北米	1098	66	77
1310	皇天通資	○	E	G34	SK1839	231	10	23	東面	北米	1098	66	77
1311	皇天通資	○	E	T56	橋土	236	12	35	東面	北米	1094	66	77
1312	皇天通資	○	E	R56	橋土	248	08	27	東面	北米	1088	66	77
1313	皇天通資	○	E	Q51	SK1832	246	11	31	東面	北米	1098	66	77
1314	皇天通資	○	E	R52	橋土	241	10	27	東面	北米	1098	66	77
1315	皇天通資	○	E	R56	橋土	246	12	31	東面	北米	1098	66	77
1316	皇天通資	○	E	A54	SK1839	240	12	36	東面	北米	1098	66	77
1317	皇天通資	○	E	R51	SK1264	235	13	30	東面	北米	1098	66	77
1318	皇天通資	○	E	Q51	SK1832	242	11	29	東面	北米	1098	66	77
1319	皇天通資	○	E	S51	SK1794	232	10	27	東面	北米	1098	66	77
1320	皇天通資	○	E	S56	橋土	241	12	36	東面	北米	1078	66	77
1321	皇天通資	○	E	T53	橋土	238	12	31	東面	北米	1078	66	77
1322	皇天通資	○	E	R56	橋土	240	11	37	東面	北米	1078	66	77
1323	皇天通資	○	E	R52	橋土	236	10	24	東面	北米	1088	66	77
1324	皇天通資	○	E	158	SD1575	241	11	37	東面	北米	1088	66	77
1325	皇天通資	○	E	R56	橋土	244	10	31	東面	北米	1088	66	77
1326	皇天通資	○	E	R56	橋土	237	10	20	東面	北米	1088	66	77
1327	皇天通資	○	E	S58	SD1874	242	10	33	東面	北米	1088	66	77
1328	皇天通資	○	E	R52	橋土	237	12	29	東面	北米	1088	66	77
1329	皇天通資	○	E	R52	橋土	237	11	28	東面	北米	1094	66	77
1330	皇天通資	○	E	R52	橋土	236	11	27	東面	北米	1098	66	77
1331	皇天通資	○	E	S51	橋土	243	14	31	東面	北米	1101	66	77
1332	皇天通資	○	E	T58	橋土	245	11	28	東面	北米	1111	66	77
1333	皇天通資	○	E	U54	SK1738	247	10	26	東面	北米	1111	66	77
1334	皇天通資	○	E	U58	SD1574	246	09	24	東面	南米	1119	66	77
1335	皇天通資	○	E	S58	SD1654	250	08	21	東面	南米	1368	66	77
1336	皇天通資	○	E	S51	橋土	231	12	26	東面	南米	1368	66	77
1337	皇天通資	○	E	Q56	橋土	244	11	28	東面	南米	1408	66	77
1338	皇天通資	○	E	T53	橋土	243	11	28	東面	南米	1408	66	77

№	鋼貨名	区画	面	地区	製造廠	採量(個)	採量	書体	初辨年	備考	国	PL
1309	関心通貨	E	I	F51	SD1587	24.5	1.1	30 (真鍮)	621	減下取。	68	78
1340	大坂元寶	E	I	F51	伊豆石中	25.0	1.3	31 真鍮	621		68	78
1341	大坂元寶	E	II	F51	伊豆石中	24.7	1.3	35 真鍮	621		68	78
1342	関心通貨	E	-	F51	SF1617	24.8	1.0	31 真鍮	621		68	78
1343	元禄通貨	E	-	F51	SF1617	23.9	1.0	32 真鍮	621		68	78
1344	大坂通貨	E	I	F50	徳上	24.0	1.2	24 (真鍮)	621		68	78
1343	関心通貨	E	-	F51	伊豆石中	23.1	1.1	25 (真鍮)	621	内開	68	78
1345	関心通貨	E	II	F49	徳上	23.2	0.8	24 (真鍮)	621		68	78
1347	大坂元寶	E	II	F51	伊豆石中	23.6	0.6	24 真鍮	621		68	78
1348	関心通貨	E	II	F50	砂州	24.2	1.1	31 真鍮	621		68	78
1349	関心通貨	E	II	F50	砂州	24.3	1.0	24 真鍮	621		68	78
1350	関心通貨	E	II	F50	砂州	24.1	1.1	30 真鍮	621		68	78
1351	関心通貨 (C)	I	A61	SS393	24.0	1.1	24 真鍮	621		68	78	
1352	関心通貨	D/E	I	F31	伊豆石中	23.8	0.8	23 真鍮	621		68	78
1353	大坂元寶	D/C	I	F53	徳上	23.7	0.9	24 真鍮	621		68	78
1354	大坂元寶	D/E	I	F51	S1382	25.2	1.4	34 真鍮	621		68	78
1355	徳上通貨	D/D	I	F56	SD1574	23.0	1.1	32 真鍮	621		68	78
1356	徳上通貨	D/E	I	F51	SD1382	23.8	1.5	39 真鍮	621		68	78
1357	徳上通貨	D/E	I	F51	SD1382	23.0	0.8	20 真鍮	621		68	78
1358	徳上通貨	D/D	I	F58	SD501	23.3	1.2	35 真鍮	621		68	78
1359	徳上通貨	D/D	I	F54	SD1682	25.1	1.1	35 真鍮	621		68	78
1360	徳上通貨	D/D	I	F51	SD1582	23.7	1.2	27 真鍮	621		68	78
1361	徳上通貨	D/D	I	F58	SD501	24.4	1.0	32 真鍮	621		68	78
1362	徳上通貨	D/E	I	F51	SD1582	24.0	1.1	30 真鍮	621		68	78
1363	徳上通貨	D/E	I	F50	SD1580	23.5	0.7	21 (真鍮)	621	関心通貨	68	78
1364	徳上通貨	D/D	I	F56	SD1574	23.3	1.1	26 (真鍮)	621	関心通貨	68	78
1365	徳上通貨	D/D	I	F51	SD560	24.1	0.9	21 (真鍮)	621		68	78
1366	徳上通貨	D/C	I	F51	SF1572	25.5	1.2	34 (真鍮)	621		68	78
1367	徳上通貨	D/C	I	F56	SD1574	24.2	1.0	29 真鍮	621		68	78
1368	徳上通貨	D/C	II	F56	SD1574	23.1	1.3	35 (真鍮)	621		68	78
1369	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	23.2	1.1	26 (真鍮)	621		68	78
1370	徳上通貨	D/E	II	F31	SD380	23.5	1.1	25 (真鍮)	621		68	78
1371	徳上通貨	D/D	II	F37	S1373	23.9	0.9	29 (真鍮)	621		68	78
1372	徳上通貨	D/D	II	F51	SD1574	23.6	0.8	25 真鍮	621		68	78
1373	徳上通貨	D/C	II	F51	SF1572	25.0	1.2	38 真鍮	621		68	78
1374	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	25.0	1.0	32 真鍮	621		68	78
1375	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	24.0	1.1	31 真鍮	621		68	78
1376	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	22.8	0.8	18 真鍮	621		68	78
1377	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	24.4	1.1	33 真鍮	621		68	78
1378	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	24.3	1.2	32 真鍮	621		68	78
1379	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	24.5	1.0	32 真鍮	621		68	78
1380	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	24.0	1.3	37 真鍮	621		68	78
1381	徳上通貨	D/C	II	F57	SD1574	24.5	1.1	30 真鍮	621		68	78
1382	徳上通貨	D/C	II	F56	SD1574	24.2	1.4	45 真鍮	621		68	78
1383	徳上通貨	D/C	II	F57	SD1574	23.6	0.8	24 真鍮	621		68	78
1384	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	23.1	1.2	36 真鍮	621		68	78
1385	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	23.7	1.1	34 真鍮	621		68	78
1386	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	23.0	0.9	28 真鍮	621		68	78
1387	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	24.8	1.3	40 真鍮	621		68	78
1388	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	22.3	0.9	24 真鍮	621		68	78
1389	徳上通貨	D/E	II	F51	SD1380	24.2	1.1	26 真鍮	621		68	78
1390	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	23.9	1.2	28 真鍮	621		68	78
1391	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	23.8	1.1	30 真鍮	621		68	78
1392	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	23.1	1.0	24 真鍮	621		68	78
1393	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	24.5	1.4	34 (真鍮)	621		68	78
1394	徳上通貨	D/D	II	F56	SD1574	23.4	1.2	36 真鍮	621		68	78
1395	徳上通貨	D/D	II	F57	SD1574	22.5	1.3	24 (真鍮)	621		68	78
1396	徳上通貨	D/D	II	A(1)F58	SD501	22.3	1.0	24 真鍮	621		68	78
1397	徳上通貨	D/D	II	F57	徳上	24.7	0.9	27 真鍮	621		68	78
1398	徳上通貨	D/D	II	A(1)F58	SD501	23.8	1.2	27 真鍮	621		68	78
1399	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.0	0.8	21 (真鍮)	621		68	78
1400	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.4	1.0	28 (真鍮)	621		68	78
1401	徳上通貨	-	II	真鍮	-	22.8	1.0	19 真鍮	621		68	78
1402	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.0	1.1	26 真鍮	621		68	78
1403	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.1	0.9	24 真鍮	621		68	78
1404	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.3	1.2	29 真鍮	621		68	78
1405	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.5	1.0	21 (真鍮)	621		68	78
1406	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.9	1.2	29 真鍮	621		68	78
1407	徳上通貨	-	II	真鍮	-	22.5	0.9	23 真鍮	621		68	78
1408	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.1	1.1	31 真鍮	621		68	78
1409	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.8	0.9	24 真鍮	621		68	78
1410	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.5	1.1	24 真鍮	621		68	78
1411	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.8	0.9	30 真鍮	621		68	78
1412	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.0	1.0	20 真鍮	621		68	78
1413	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.2	1.3	18 真鍮	621		68	78
1414	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.0	1.1	38 真鍮	621		68	78
1415	徳上通貨	-	II	真鍮	-	22.5	1.2	16 真鍮	621		68	78
1416	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.5	1.0	23 真鍮	621		68	78
1417	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.9	1.3	17 真鍮	621		68	78
1418	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.1	1.1	28 真鍮	621		68	78
1419	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.2	1.5	39 真鍮	621		68	78
1420	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.4	1.0	26 真鍮	621		68	78
1421	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.3	1.3	30 真鍮	621		68	78
1422	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.9	1.1	27 (真鍮)	621		68	78
1423	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.7	1.3	39 (真鍮)	621		68	78
1424	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.7	1.3	34 (真鍮)	621		68	78
1425	徳上通貨	-	II	真鍮	-	24.7	1.1	36 (真鍮)	621		68	78
1426	徳上通貨	-	II	真鍮	-	25.0	1.5	19 (真鍮)	621		68	78
1427	徳上通貨	-	II	真鍮	-	23.8	1.0	22 (真鍮)	621		68	78

V まとめ

第40次発掘調査区は、B区とした中央部の大規模な区画が第46次発掘調査区へ、E区とした小規模な区画群が第36次発掘調査区へと続いており、町割の区画単位としては完結していない。一方、赤渕・奥間野・吉野本地区として括られるこの一帯の調査成果については、一乗谷の都市計画を語るうえで欠かせないものとして、すでに多くの場所で総合的に紹介、論じられている(小野1997、小野・水藤編1990等)。ここでは、それらの内容にも触れつつ、若干のまとめを行う。

遺構面の時期について

本報告では検出した各遺構面を上層から下層へ向かってⅠ～Ⅳ遺構面とした。これは当調査区における相対的な区分であって、一乗谷全体に敷衍できるものではない。一乗谷全体の時期区分としては小野正敏氏が、Ⅰ期：一乗谷が町になる前の14～15世紀前半、Ⅱ期：越前国の首都としての「一乗谷」が成立した15世紀後半、Ⅲa期：文明14年(1482)の大火後に再建された町、Ⅲb期：Ⅲa期とⅢc期の中間、Ⅲc期：天正元年(1573)に滅亡した時の町、といった具合に整理し、これまで発掘された町の面のほとんどは同じ町割を踏襲したⅢ期のグループに含まれると述べている(小野前掲)。当調査区においても、東西道路SS493の下層で検出した遺構SX1824～1826が計画的な町割以前の遺構としてⅡ期に遡る可能性があるものの、Ⅰ～Ⅳ遺構面はすべてⅢ期に対比できる。Ⅰ遺構面をⅢc期、Ⅳ遺構面をⅢa期とすると、20～30年に1回は土地の嵩上げと建て替えが行われたことになる。各遺構面に炭・灰・焼土層が形成されていることから、その契機の多くは火災によるものであろう。なお、Ⅱ遺構面については、紀年銘のある石製盤(480)の出土から、天文20年(1551)以降と知ることができる。

町割の変遷について

挿図10は、各遺構面における遺構配置の模式図である。これによると、Ⅳ遺構面からⅠ遺構面まで東西道路SS493を基軸に、南北方向の石組溝SD1568・1572・1574・1580、同じく通路SS1564・1565・1567は一部作り替えられながらも位置を踏襲しており、A～E区とした大区画は維持されたといえよう。ただし、B区とD区の境界に比べて他はさほど明瞭なものではない。以下、各区画についてみる。

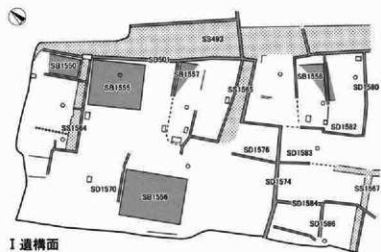
A区はⅡ遺構面までは一つの大きな区画であったようだが、Ⅰ遺構面の段階で小さな区画に分割される。ただし、B区との境界は一貫して明瞭さを欠く。

B区はⅡ遺構面まではB1区とした北西部とB2区とした南部との間が溝でおおよそ分けられるが、Ⅰ遺構面ではその境が認められなくなる。

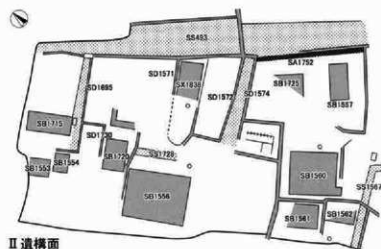
C区はⅣ遺構面の段階から区割がなされ、Ⅰ遺構面まで続いている。なお、C区はⅡ遺構面まではむしろB1区と一体の区画であったようにもみえる。

D区はⅡ遺構面まではD1区とした北側とD2区とした中央部が一つの大きな区画であったが、Ⅰ遺構面の段階で分かれ、D1区は南北方向、D2区は東西方向に分割される。なお、南側のD3区との境界は一貫して存在する。

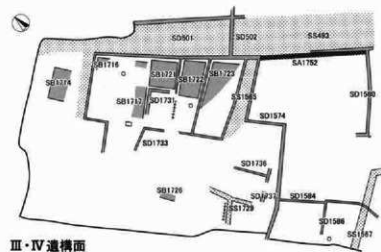
E区については、調査が各小区画の一部のみであり、他の区画のように区割の変遷を追うことはできない。残りの大部分を調査した第36次発掘調査においても、いくつかの小区画内で上下2面の遺構を検出しているが、区割の動向については不明である。



I 遺構面



II 遺構面



III・IV 遺構面

※概観XII.挿図2-4を一部改変

挿図10 遺構面概念図

第40次発掘調査区の性格について

本調査区の中心的な区画であるB区については、周辺部も含め一石五輪塔や石仏、墨書土器などが出土したことで、当初から寺院跡と推測されていた。その後、第46次発掘調査において、B区の南端にあたる場所(C区)で墓地が検出され、それは確定的となった。本調査区についてみると、中央部に位置する礎石建物SB1556は本堂、そこから東西道路SS493へ向かって延びるSS1565は参道と理解されており、Ⅱ遺構面の段階にはすでに存在していたとみられる。なお、第46次調査区の墓地も下層で検出されたものである。また、本堂と目されるSB1556は、東側が広い空閑地となっていることや参道SS1565の取り付き状況からみて、東向きの建物であったと考えられる(南1999)。

次にD区について、Ⅱ遺構面までの広い区画は、東西道路SS493に面する土塁SA1752を有すること、区画内に比較的大きな建物が複数存在することなどから武家屋敷と推測されるが、Ⅰ遺構面の段階にはこれが小規模な区画に分割され、町屋群を形成したと考えられる。注目されるのは、これらの中に井戸や石積施設(便所)をもたず、独立性を欠くといえる区画が存在する点であり、さらに南側のD3区から第46次調査区にかけては両方をもたない小区画が群をなしている。街路に直接面さない路地裏空間にあるこの小区画群について小野正敏氏は、共同井戸・便所をもつ町屋群で「借家」と推定している。これはE区の一部を、主には第36次調査区で確認された町屋群が、南北の基幹道路に面し、各戸に井戸と便所を備えていることと対照的であり、そこには住人の社会的階層差も想定されている(小野前掲)。

同様の状況はA区においても認められる。分割される前の性格については明らかでないが、B区との境界が不明瞭であることから、その敷地の一部とも考えられる¹⁾。また、分割された後の小区画群についても、同様の理解をするならば、B区つまり寺院に従属する立場の居住者が想定されよう。

C区もA区と同じく元々B区の敷地であったところを切り取る形で造成されたと推測される。一方、早い段階に成立し何度も建て替えられていること、街路に面し、敷地も比較的大きいことなどから、A区とはやや異なる立場の居住者を想定してもよいかもしれない。

出土物について

土器・陶磁器については、寺院を彷彿させる墨書土器(1431)や線刻土器(601)の他、白磁輪花鉢(23)や黒釉天目茶碗(123)、青磁鱗耳花瓶(532)、朝鮮半島製青磁水注(554)など、高級品とされる輸入陶磁器が目立つ。これらも寺院あるいは武家屋敷という当地区の性格を表しているといえよう。また、国産品でも一乗谷で出土例の少ない黄瀬戸釉を施す瀬戸・美濃製品(98・355・767・853～855)などがまとまって出土しており、住人の嗜好がうかがえる。

金属製品では建築金具の豊富さが特筆される。中でも日鏡釘(425)については従来注目されておらず、一乗谷の建築を考える上で今後重要な資料となるだろう²⁾。その他、工具・武具類も多種多様で、石工用とみられる手斧(273)や紡錘(676)といった職人の存在をうかがわせる道具も出土している。

木製品で特筆すべきは北国船の模型(907)である。これについては、青森県西津軽郡門党寺に奉納されている船絵馬に描かれた北国船と共通する点が多く、それと確定された(水野2001)。細部まで表現した精巧な作りであり、船大工の手によるものとも考えられる。船絵馬と同じく奉納されたものとするれば、寺院に関連する遺物といえる。その他、多数出土した漆塗椀・皿が目される。ほとんどは黒地に赤色で漆絵を描いた普及品とみられるものだが、中には漆下地の上質品(442)も複数認められ、やはり寺院や武家屋敷に関係すると考えられる。また、石積施設を便所とする大きな根拠となった金隠(738)も重

要である。もちろん石積施設のすべてが便所というわけではなく、屋敷地内での位置や寄生虫卵分析などを踏まえて総合的に判断する必要があることはいうまでもない。さらに、金剛と特定された遺物は一乗谷のこれまでの調査で他になく、便所に必ずしも必要ない可能性、あるいは特徴のない板を取り付けた可能性も含めて検討する必要があるだろう。

石製品では石仏(142・979・980)や花瓶(141)、五輪塔(981～984)が寺院に関連する遺物として注目される。また、硯の出土量(破片数)が一乗谷の中で圧倒的に多く、第46次調査区で検出された大量の柿経や笹塔婆を硯ののに用いられた可能性が指摘されている(宮永2013)。

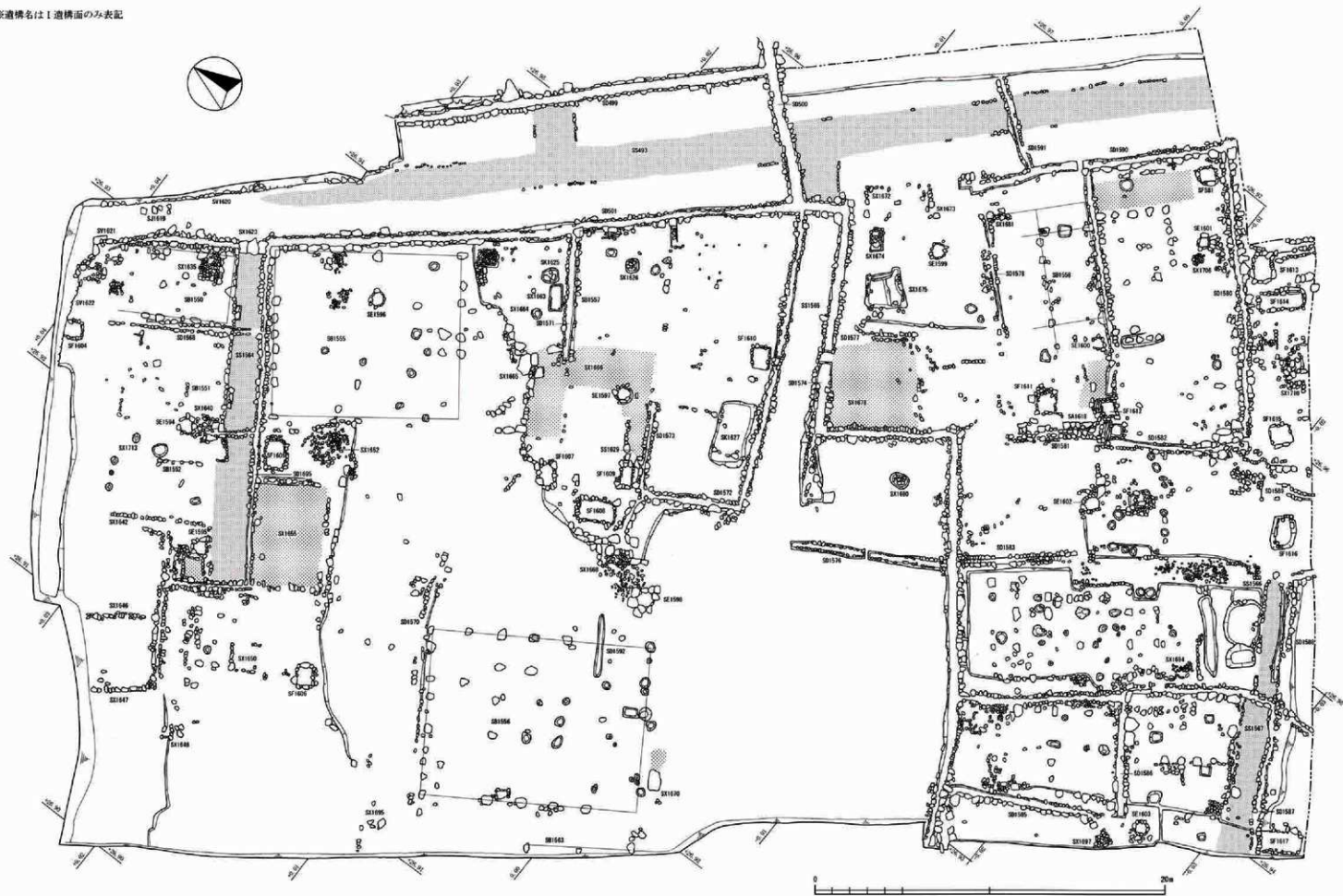
硯とともに用いられたのが油煙墨(568)である。一乗谷でこれまで2点出土している内の1点であり(もう1点は第44次調査出土)、いずれもその特徴から奈良の興福寺二階坊製と判断される。奈良から一乗谷に墨がもたらされた経緯については『大乗院寺社雑事記』や『興福寺文書』など³⁾にみる事ができ、かなりの量が入ってきているようである(水野2002)。

その他、ガラス製容器としては他に朝倉館跡出土の1点しかないガラス皿(575)は、武家屋敷の主要建物SB1560に近接する土坑SK1627から出土しており、その居住者像を考える手掛かりになるだろう。また、双六の駒石(315・483・970・971)からは遊びに興じる人々の生き生きとした様子が伝わってくる。

以上、他にも取り上げるべき事例は多々あるが、紙数の都合上、これで本書のまとめとする。寺院や町屋群の敷地は第46次調査区に続いており、不足の点は今後計画しているその正報告書に譲りたい。

- 注 1) 調査担当者の一人である水野和雄氏は、建物SB1714とそれを囲む石垣SX1836(目地が白粘土で5倍張りされていたという)を「風呂屋」と考えている(水野2002)。
2) 日鏡釘は第46次調査区でも1点確認されている(熊谷2020)。
3) 最近紹介された『明皇院院朝倉義景書状』にも法煙墨に関する記述がある(石川2020)。

参考文献(本書全体) ※一乗谷朝倉氏遺跡の概報・報告書・展示図録については主なもののみ記載
朝倉氏遺跡発掘調査研究所1979『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書1』福井県教育委員会 共編社
石川美咲2020『平成30年度調査人員「明皇院院朝倉義景書状」について』一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2018
岩田 隆1985『一乗谷出土の朝鮮製陶磁器』『貿易陶磁研究』No.5 日本貿易陶磁研究会
岩田 隆1986『中世遺跡出土の土駄』『朝倉氏遺跡資料館紀要1986』
岩田 隆2002『一乗谷の消費と流通』『戦国大名朝倉氏と一乗谷』高志書院
小野正敏1982『15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏1983『一乗谷及び豊原寺出土の元禄式の染付』『貿易陶磁研究』No.3 日本貿易陶磁研究会
小野正敏・水倉良廣1990『よみがえる中世6 実像の戦国城下町 越前一乗谷』平凡社
小野正敏1997『戦国城下町の考古学 一乗谷からのメッセージ』講談社文庫メネエ
熊谷 遼2020『一乗谷朝倉氏遺跡門ノ内地区出土の焼き板』一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2018
国立歴史民俗博物館1993『国立歴史民俗博物館資料調査報告4 日本出土の貿易陶磁』
茶道資料館編1990『遺跡出土の朝鮮土朝陶磁—名詞と考古学—』茶道資料館・関西近世考古学研究会
鈴木三男・雄城修 1991『越前朝倉氏遺跡から出土した木製品の樹種』『朝倉氏遺跡資料館紀要1990』
鈴木三男・雄城修 1992『越前朝倉氏遺跡から出土した木製品の樹種(2)』『朝倉氏遺跡資料館紀要1991』
福井市史編纂委員会編1993『福井市史 陶磁史編4』愛知県福井市
武田昭子・赤沼英男・土屋信高2008『一乗谷朝倉氏遺跡出土漆器の下部調査に関する解析(1)』一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2007
月輪 泰1990『朝倉氏遺跡出土の銅鏡について』『朝倉氏遺跡資料館紀要1989』
中井 泉2014『一乗谷朝倉氏遺跡出土ガラスの分析』『第21回企画展 戦国時代の金とガラス』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所1981『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡—昭和55年度発掘調査整備事業概報—』
福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館1982『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡—昭和56年度発掘調査整備事業概報—』
福井県立朝倉氏遺跡資料館1983『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』
福井県立朝倉氏遺跡資料館1988『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書II』第10・11、第54次調査
藤澤良祐2002『福井・美濃大瀬川平の再検討』『研究紀要第10輯(財団法人)』市道文化財センター
藤澤良祐2008『中世福井の研究』高志書院
水野和雄2001『特別展 戦国城下町研究の最前線』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
水野和雄2002『一乗谷のくらし』『戦国大名朝倉氏と一乗谷』高志書院
水村伸行2002『一乗谷朝倉氏遺跡出土染付についての一様相』一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2002
南野一郎1987『漆坑・墓に関する二、三の問題』『朝倉氏遺跡資料館紀要1986』
南野一郎1999『40・46次調査区の守屋の発掘』『第10回企画展 一乗谷の宗教と信仰』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
宮永・美2013『展示解説』『第20回企画展 戦国のまなび』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

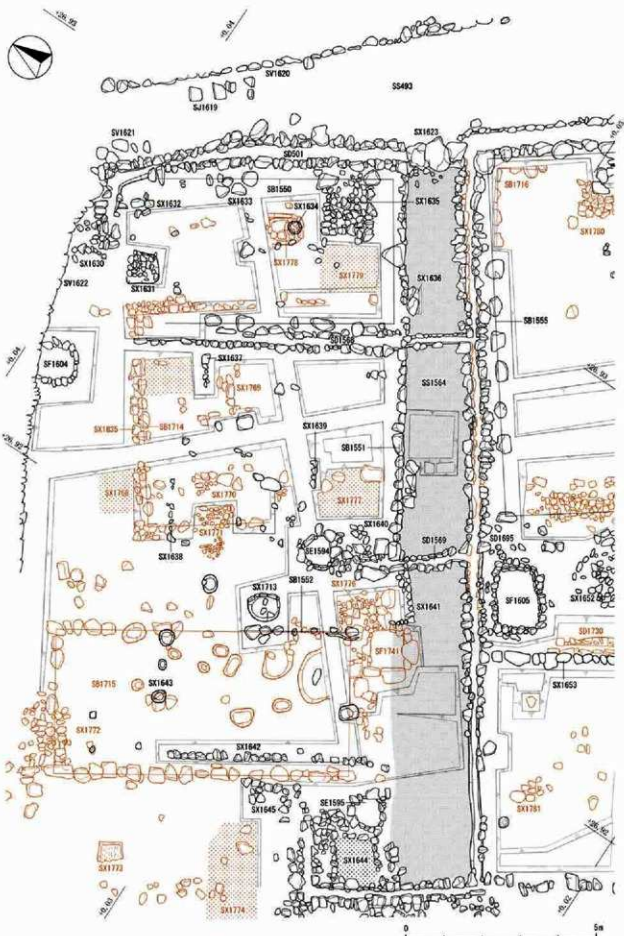


第1図 上層遺構面全体図 (縮尺1/200)

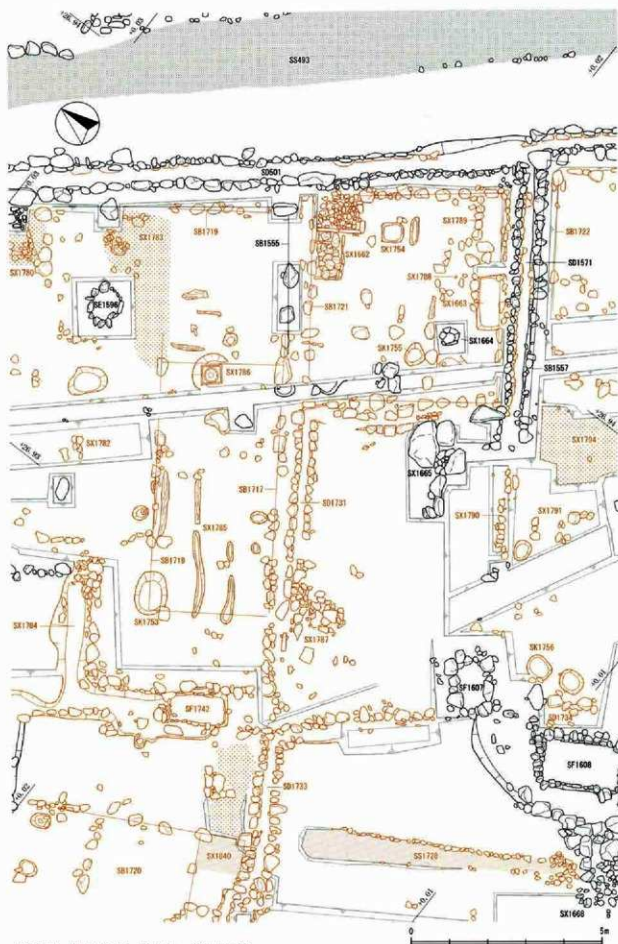
※赤線が下層遺構(以下同)



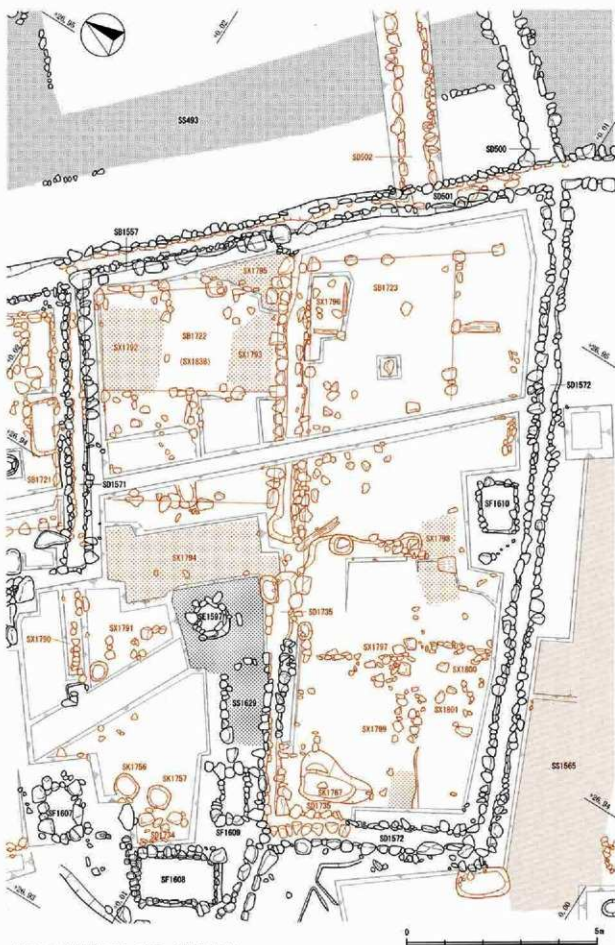
第2図 下層遺構面全体図 (縮尺1/200)



第3圖 遺構詳細圖 A区 (縮尺1/100)



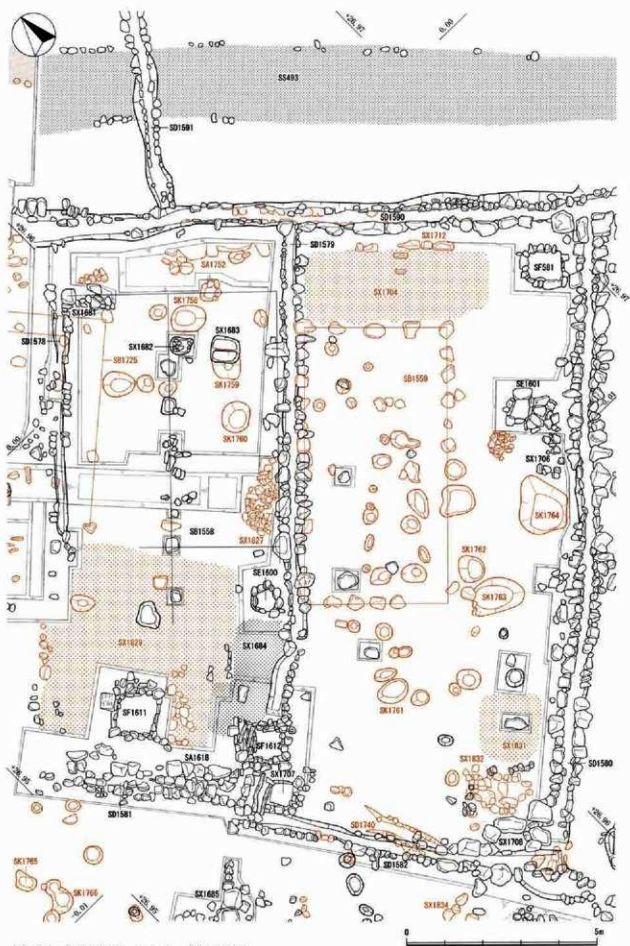
第4図 遺構詳細図 B1区 (縮尺1/100)



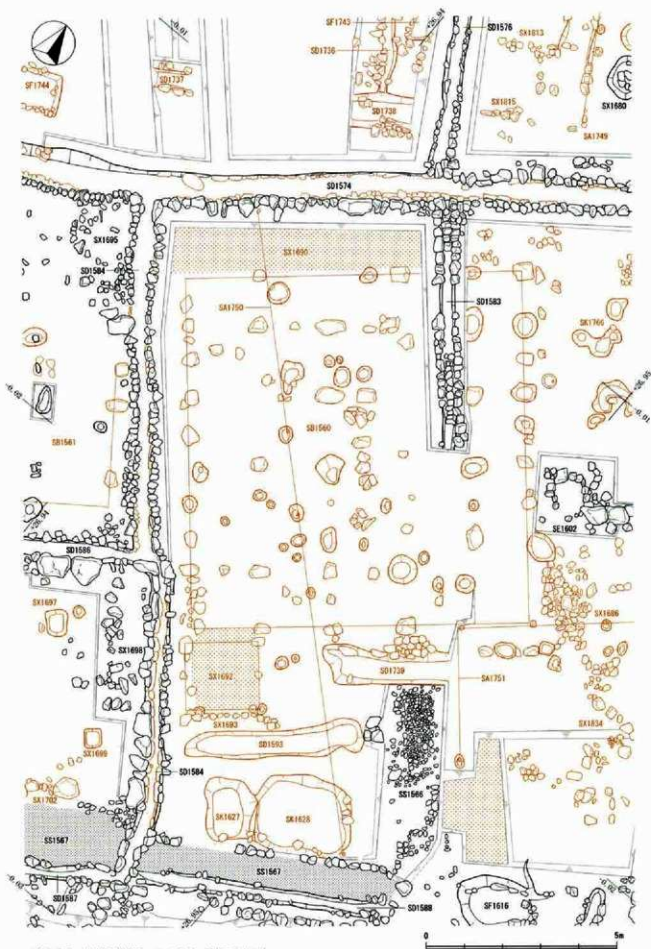
第5图 遺構詳細図 C区 (縮尺1/100)



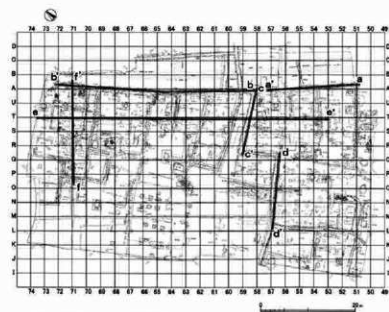
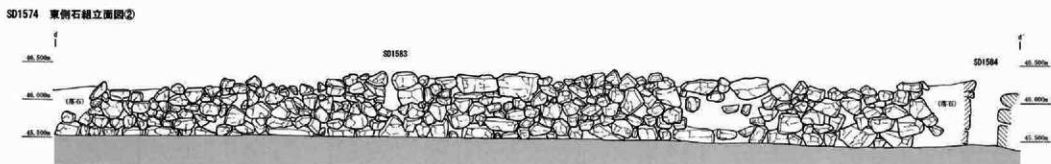
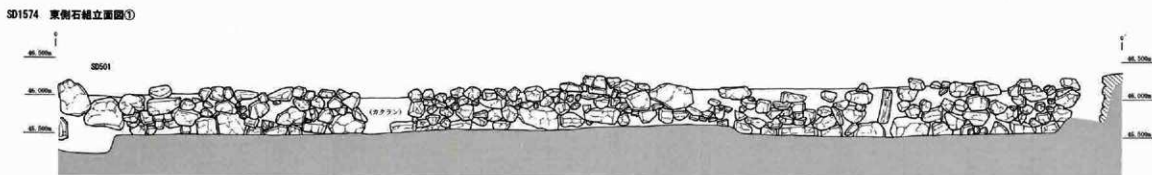
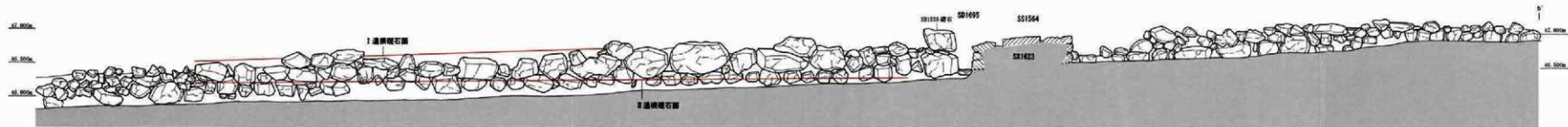
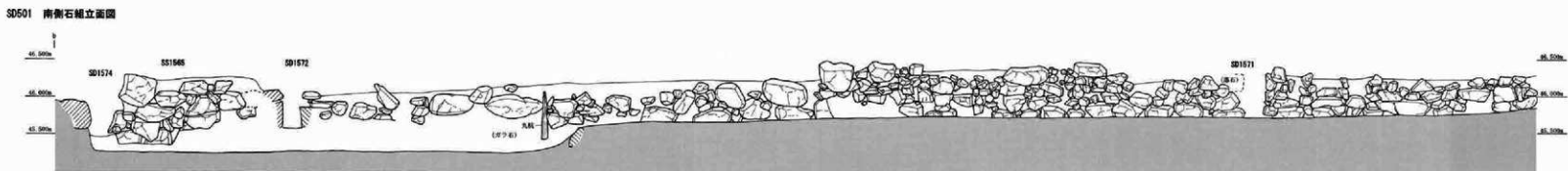
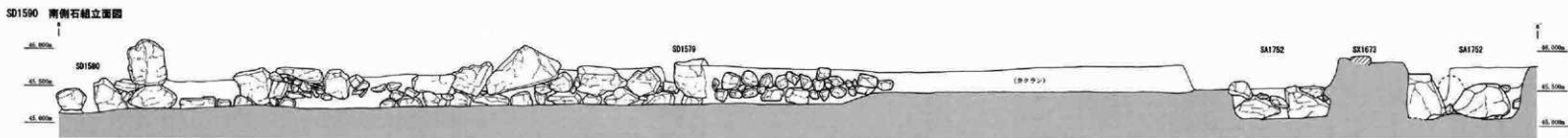
第6図 遺構詳細図 B2区 (縮尺1/100)



第7図 遺構詳細図 D1区 (縮尺1/100)



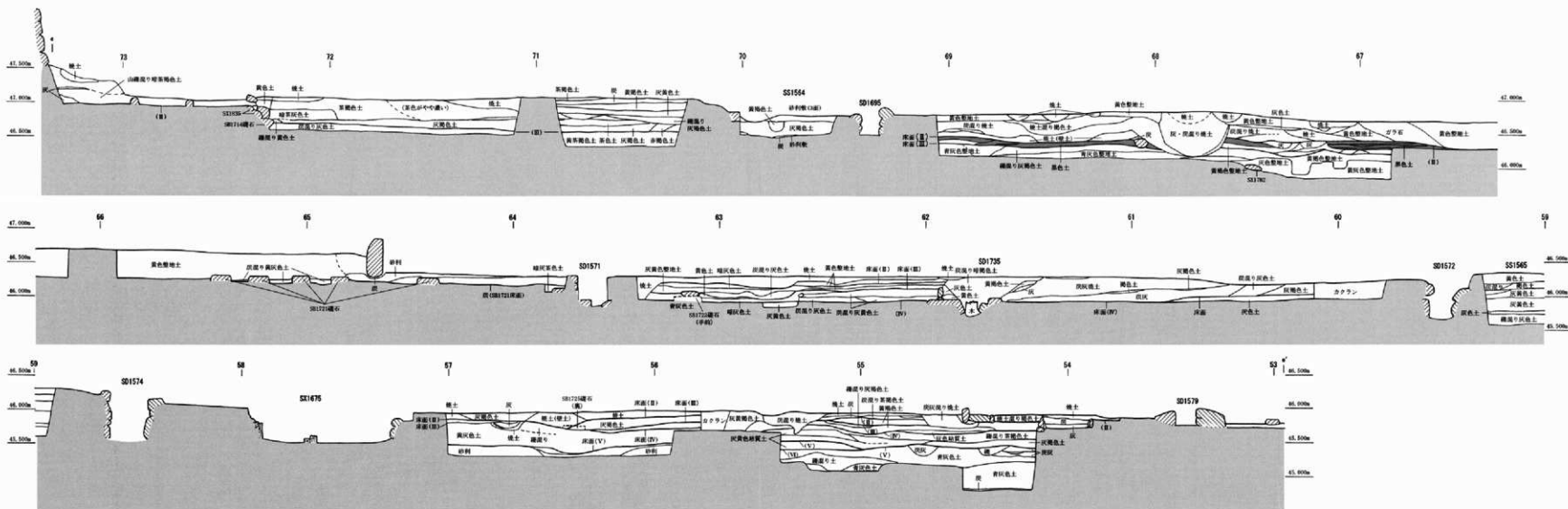
第8图 遺構詳細図 D2区 (縮尺1/100)



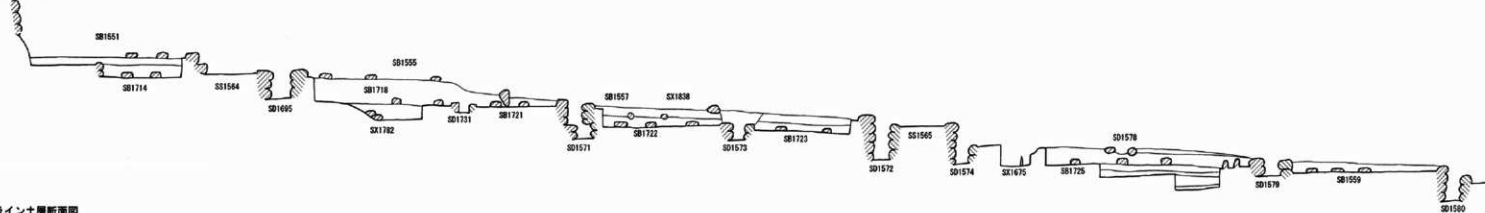
溝石立面圖・土層断面図範圍



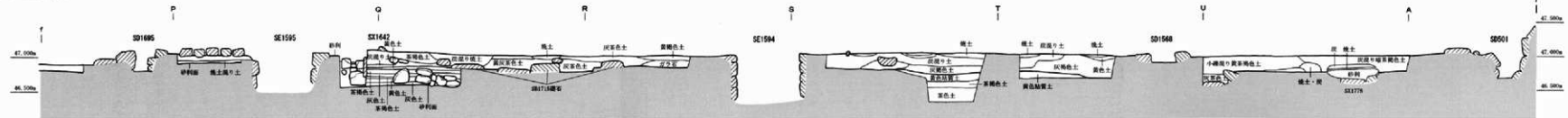
7ライン土層断面図



東西断面構式図

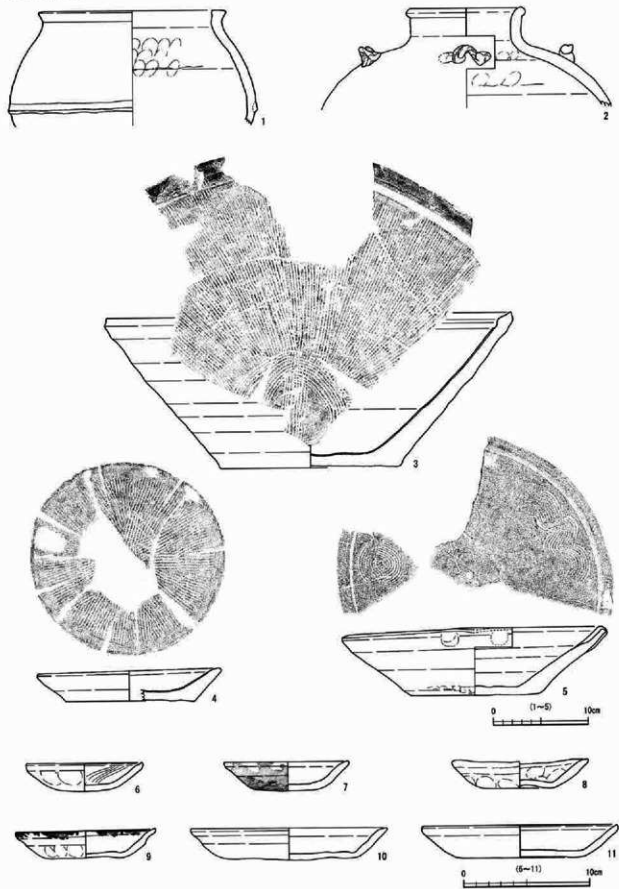


71ライン土層断面図



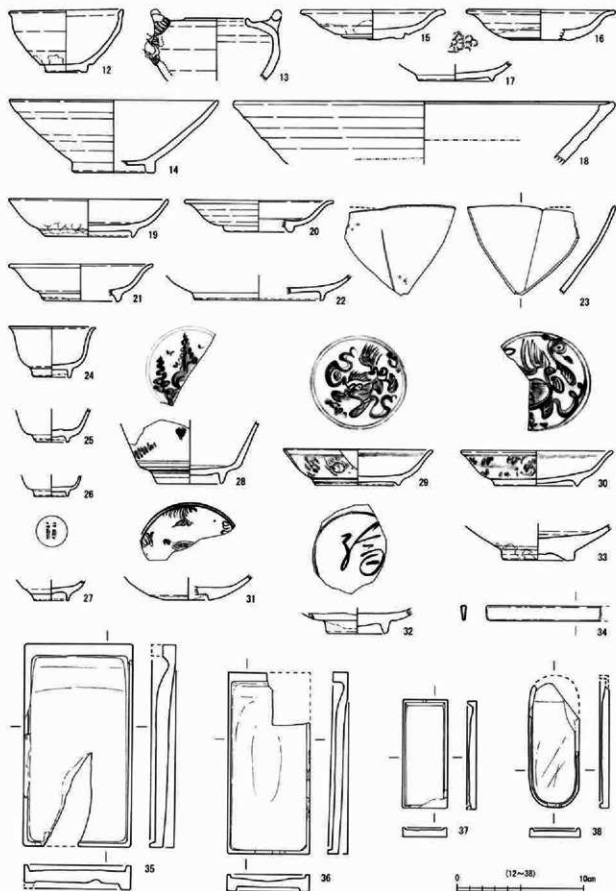
第10図 土層断面図 (縮尺1/50)

A区I遺構面(1)



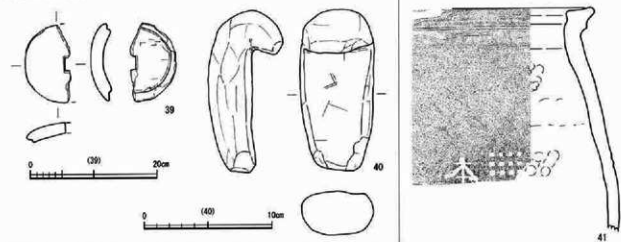
第11圖 出土遺物 A区I遺構面(1)

A区I遺構面(2)

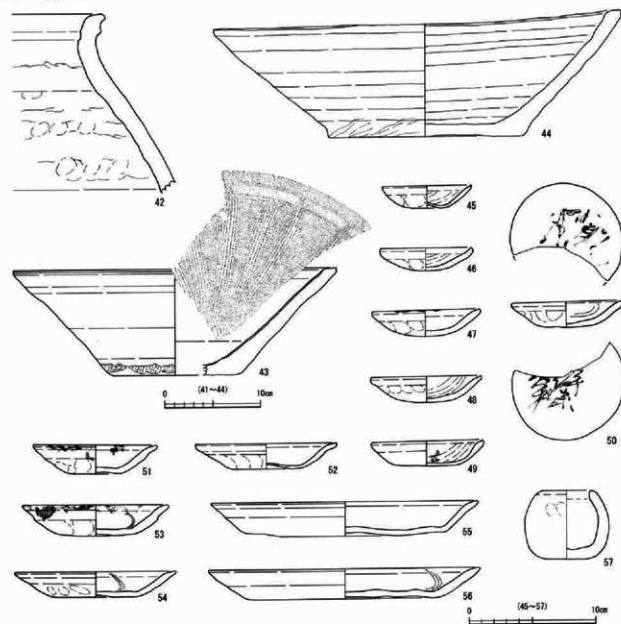


第12图 出土遺物 A区I遺構面(2)

A区I遺構面(3)

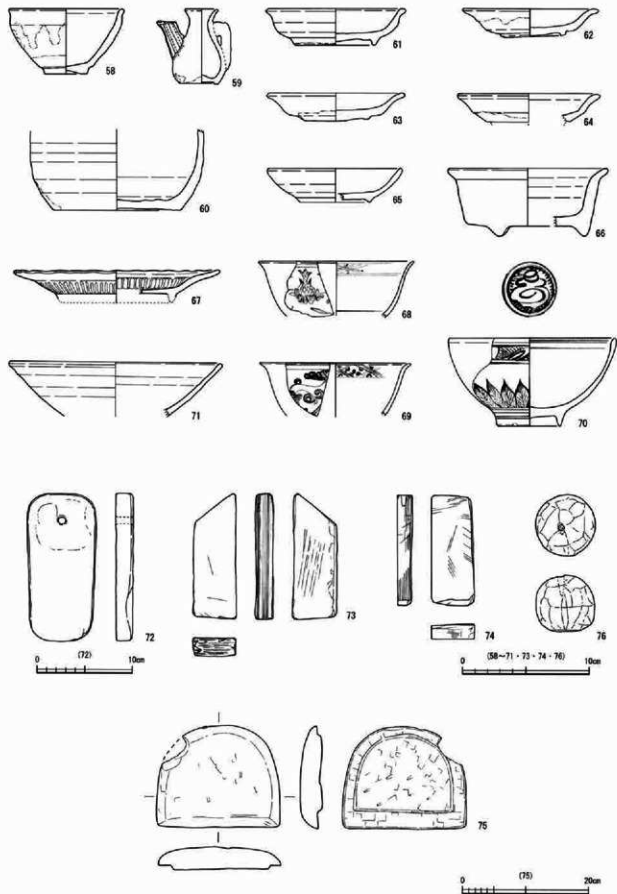


A区II遺構面(1)



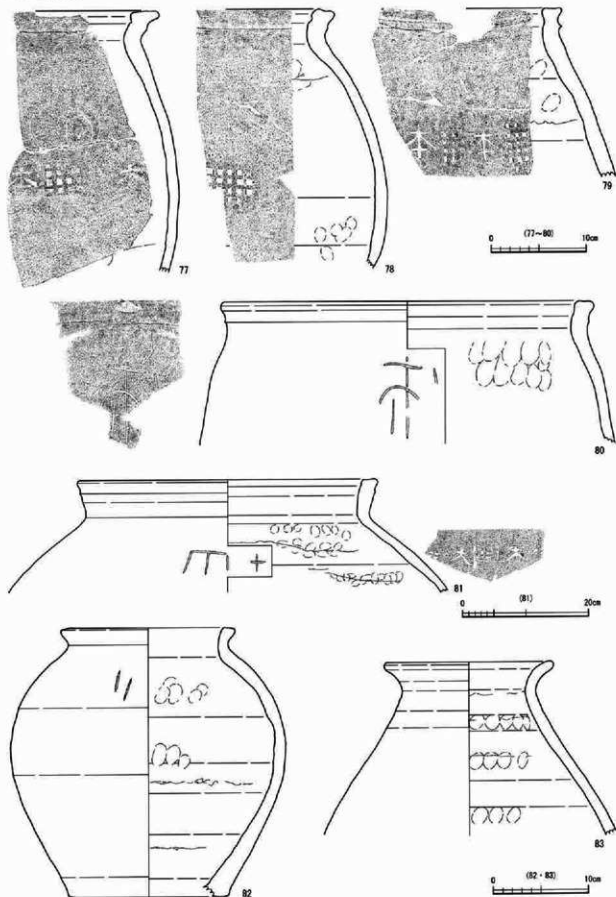
第13図 出土遺物 A区I遺構面(3)、A区II遺構面(1)

A区Ⅱ遺構面(2)



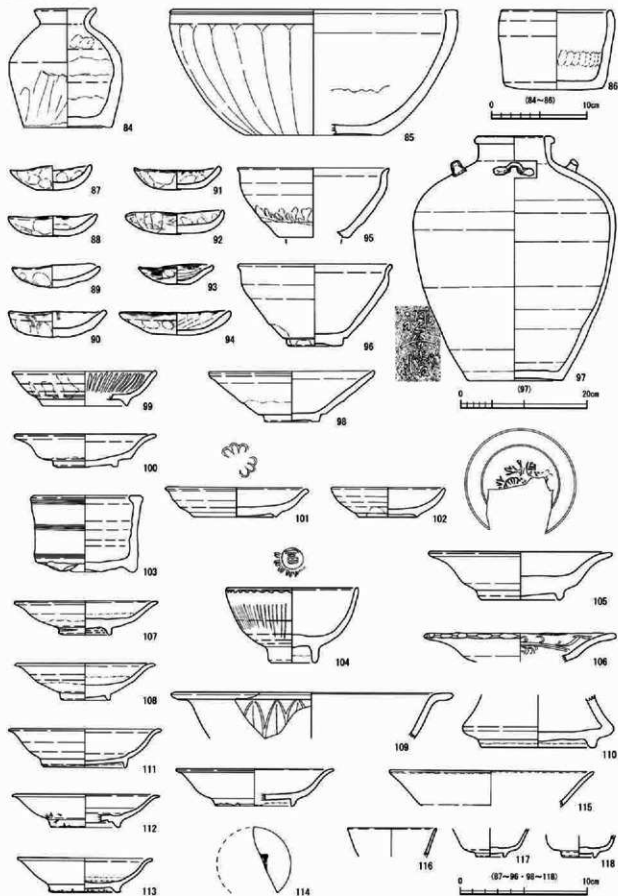
第14圖 出土遺物 A区Ⅱ遺構面(2)

B区I遺構面(1)



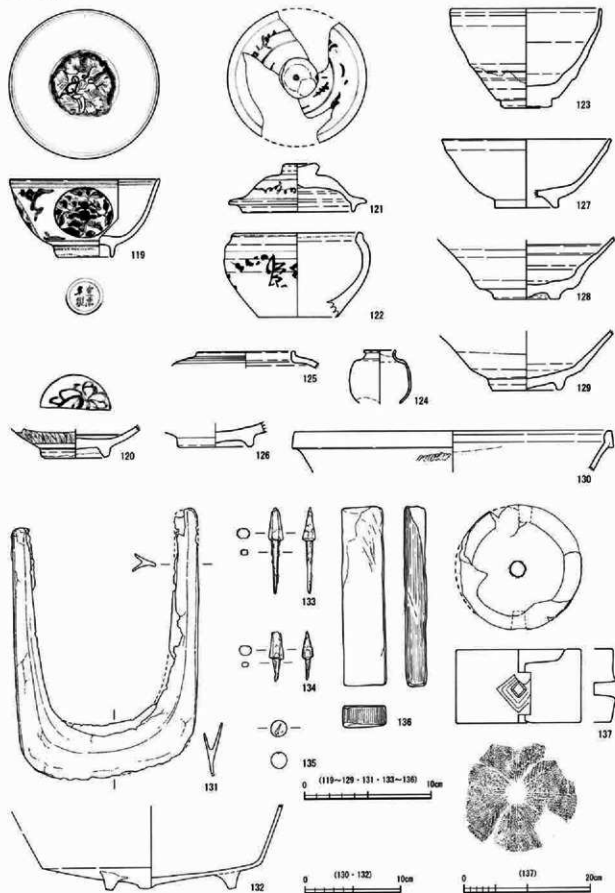
第15圖 出土遺物 B区I遺構面(1)

B区I遺構面(2)



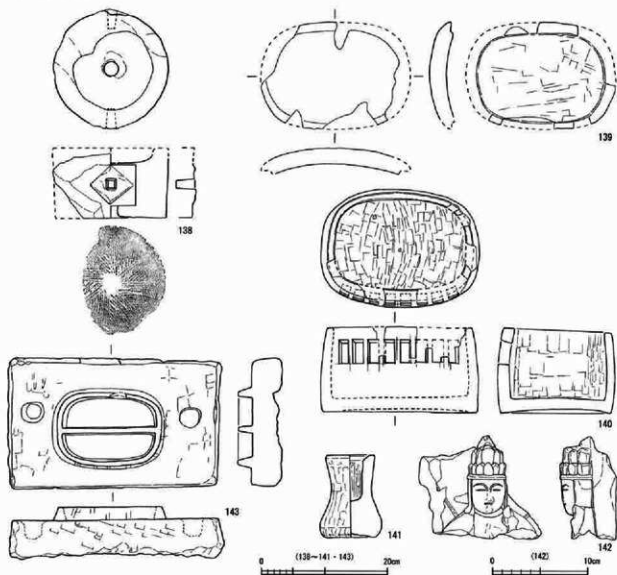
第16図 出土遺物 B区I遺構面(2)

B区I遺構面(3)

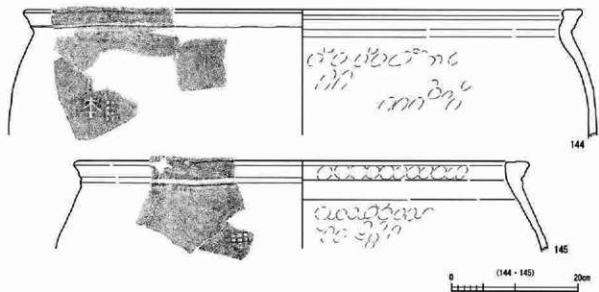


第17図 出土遺物 B区I遺構面(3)

B区 I 遺構面(4)

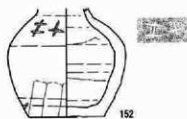
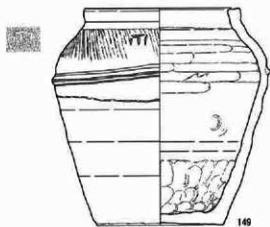
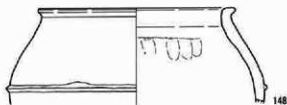
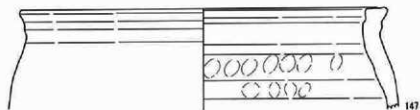
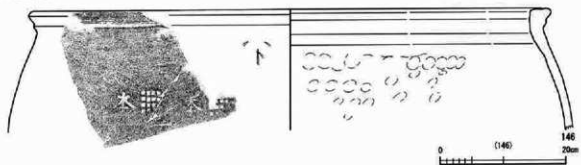


B区 II 遺構面(1)



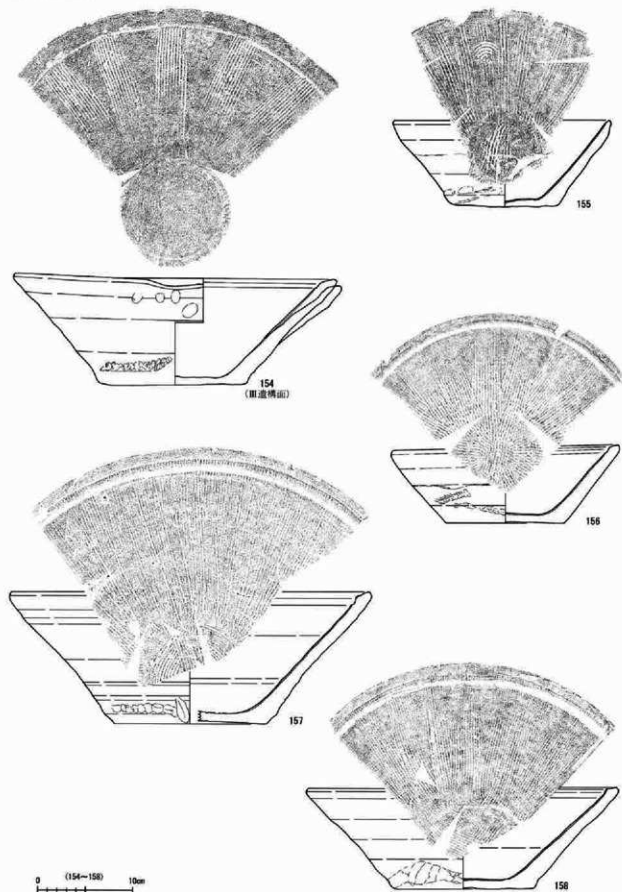
第18図 出土遺物 B区I遺構面(4)、B区II遺構面(1)

B区Ⅱ遺構面(2)



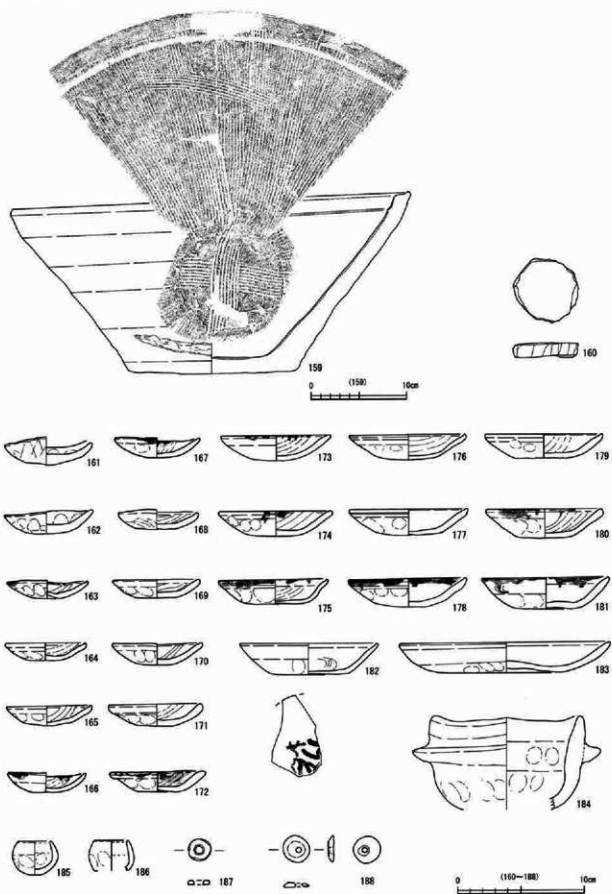
第19図 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(2)

B区Ⅱ遺構面(3)



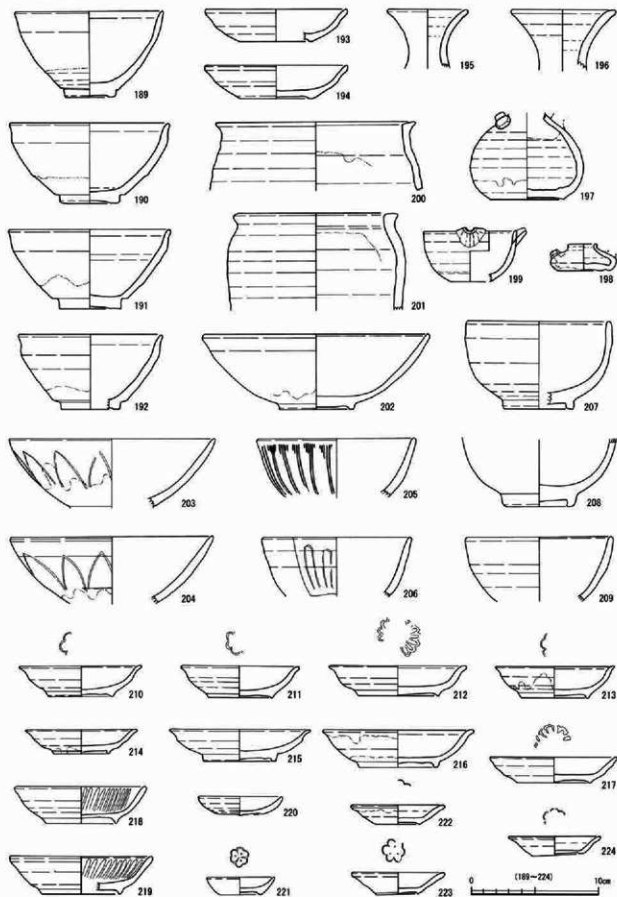
第20図 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(3)

B区Ⅱ遺構面(4)



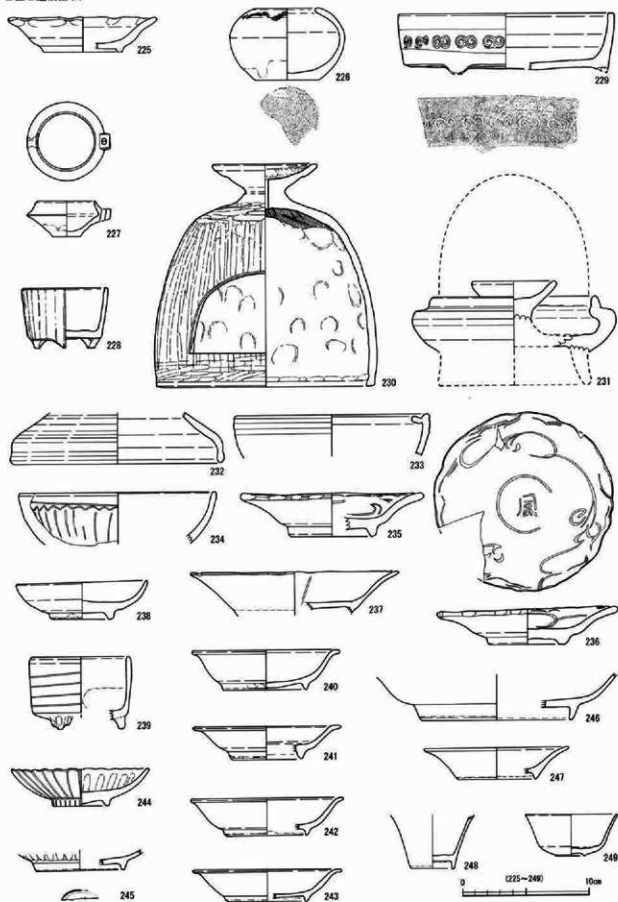
第21圖 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(4)

B区Ⅱ遺構面(5)



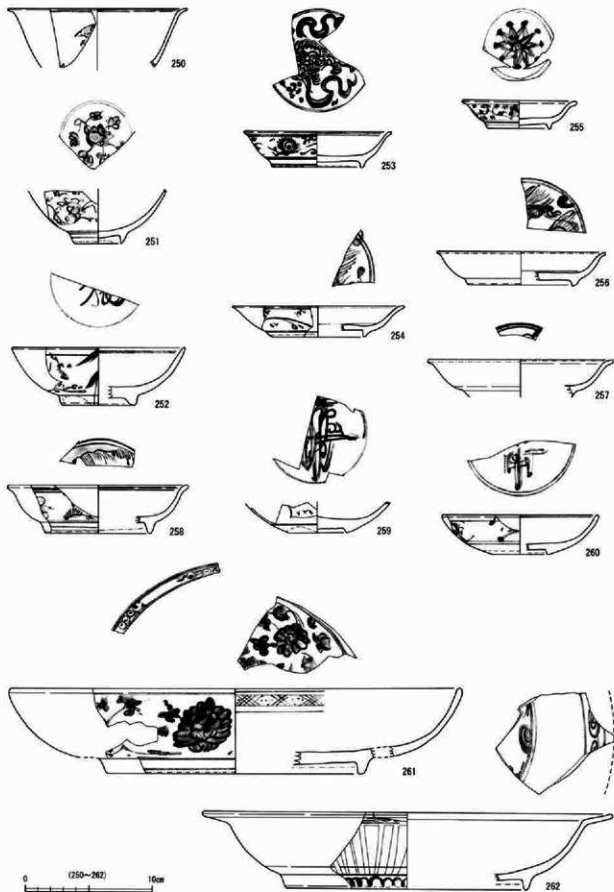
第22図 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(5)

B区Ⅱ遺構面(6)



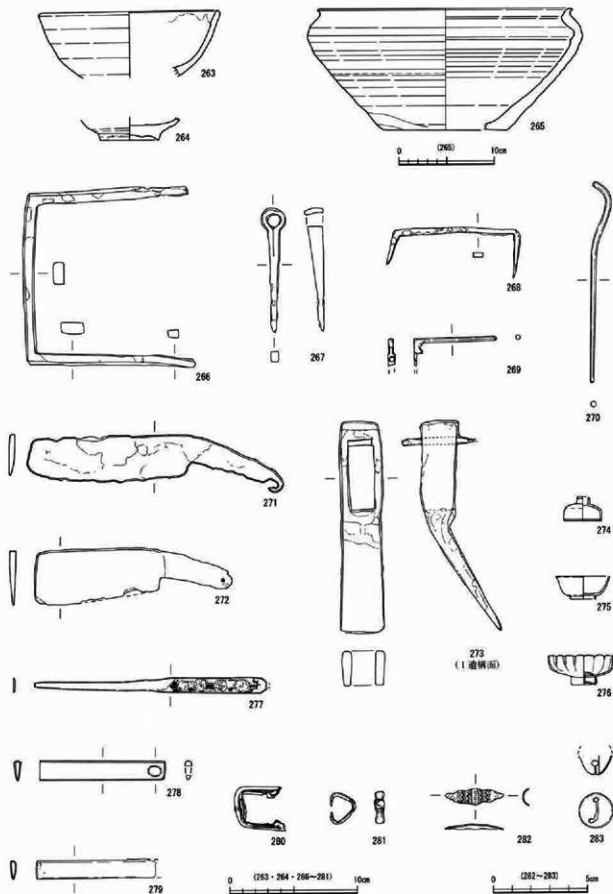
第23圖 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(6)

B区II遺構面(7)



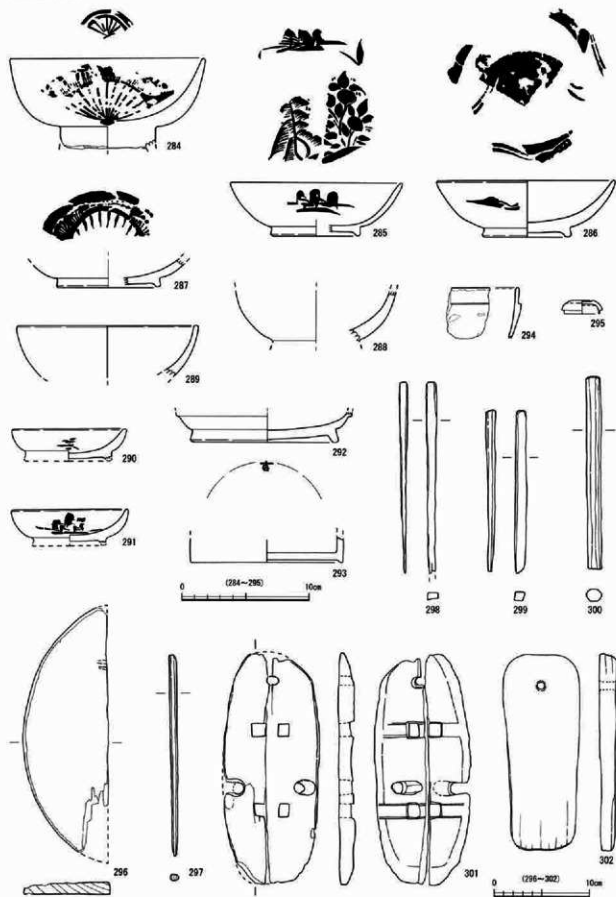
第24图 出土物 B区II遺構面(7)

B区II遺構面(8)



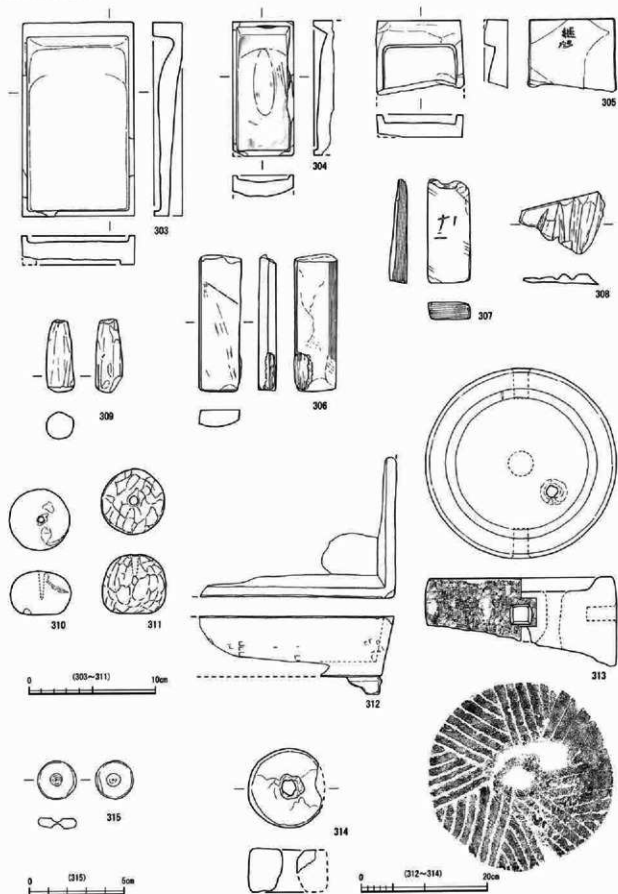
第25圖 出土遺物 B区II遺構面(8)

B区II遺構面(9)



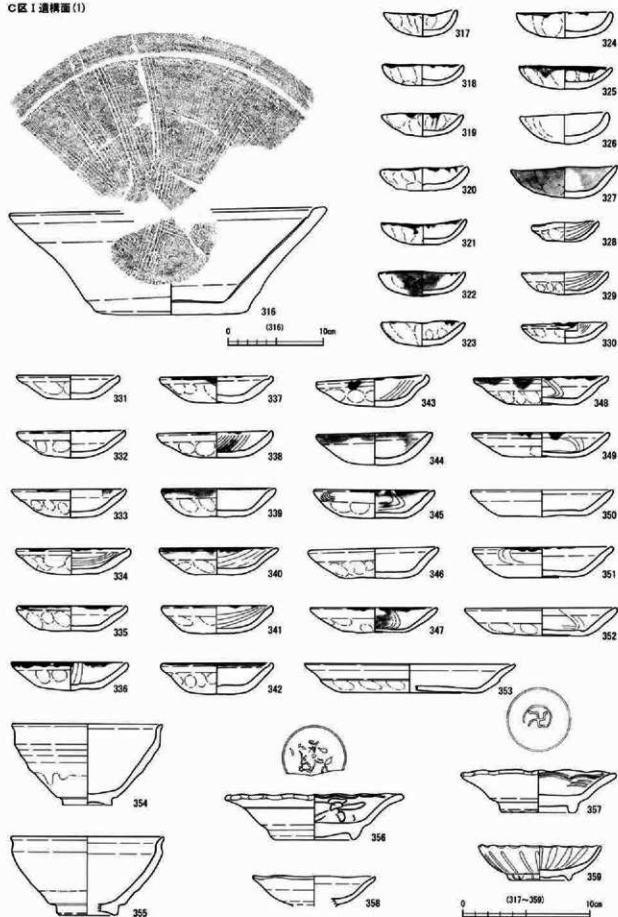
第26圖 出土遺物 B区II遺構面(9)

B区Ⅱ遺構面(10)



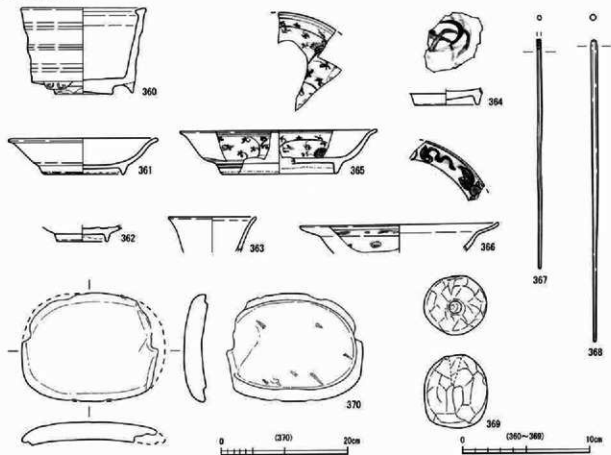
第27图 出土遺物 B区Ⅱ遺構面(10)

C区I遺構面(1)

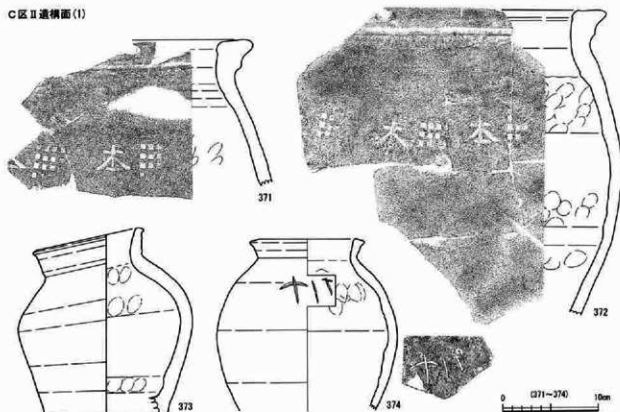


第28図 出土遺物 C区I遺構面(1)

C区I遺構面(2)

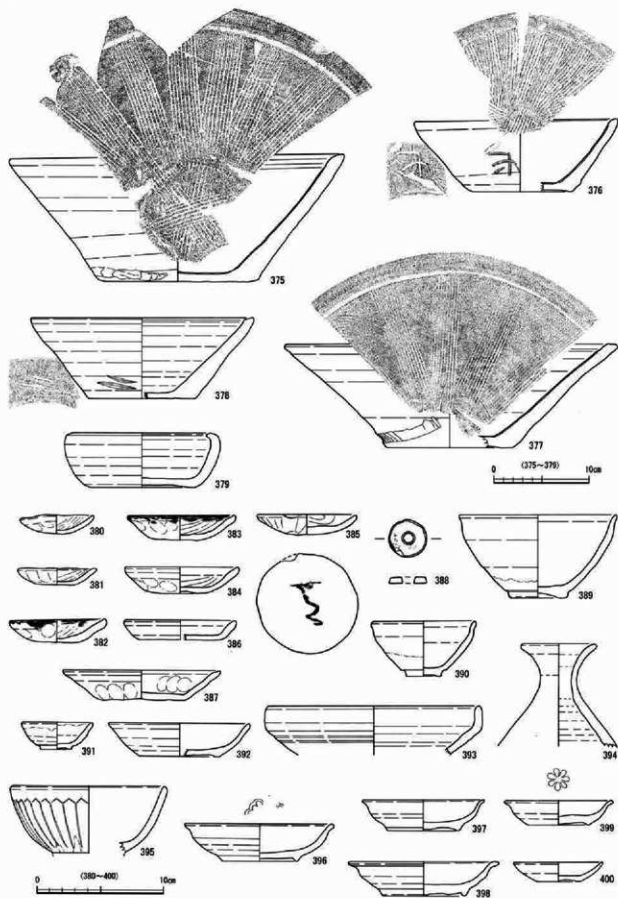


C区II遺構面(1)



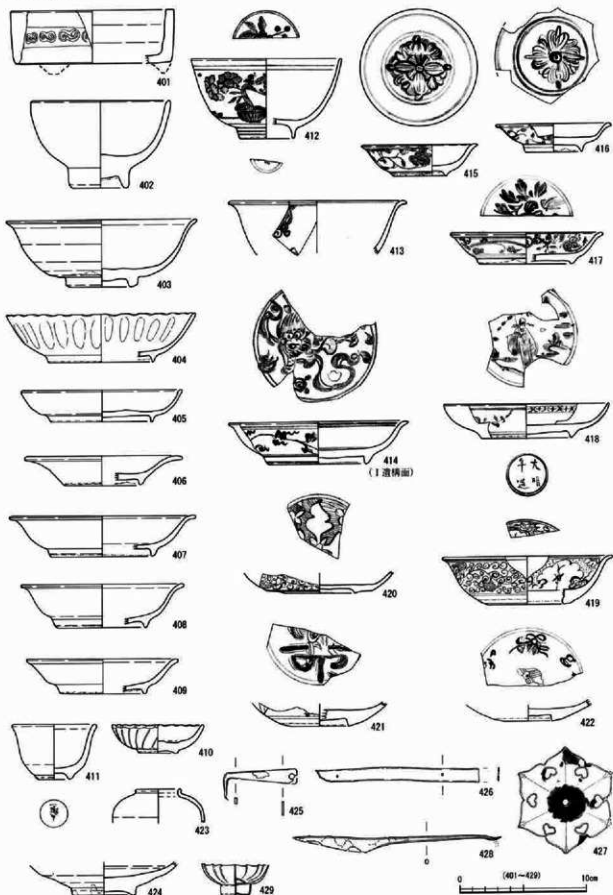
第29図 出土遺物 C区I遺構面(2)、C区II遺構面(1)

C区II遺構面(2)



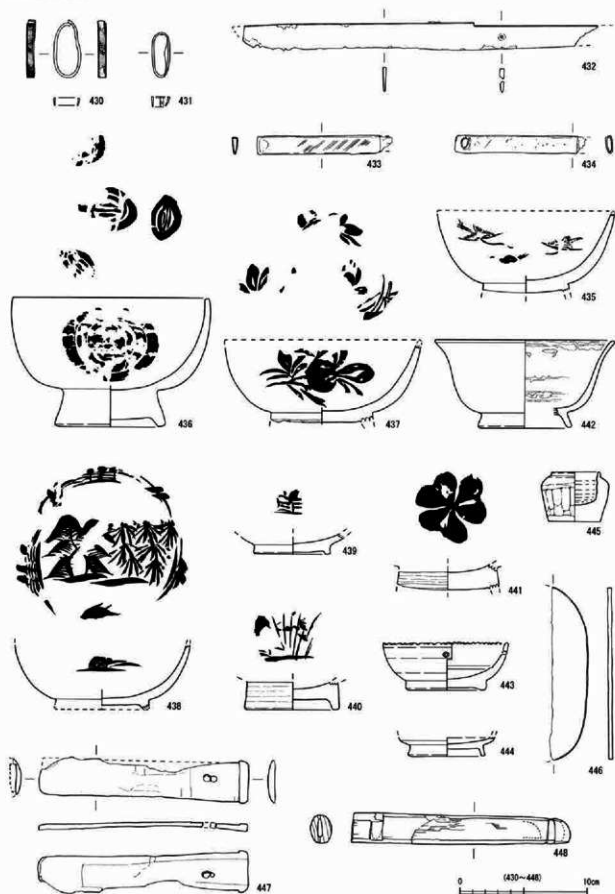
第30图 出土物 C区II遺構面(2)

C区Ⅱ遺構面(3)



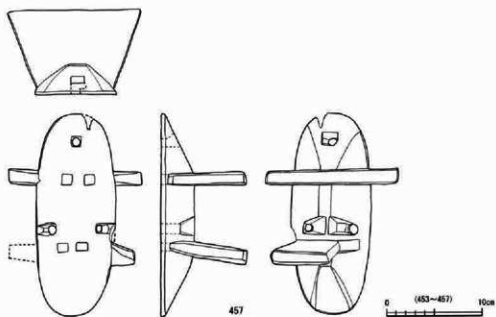
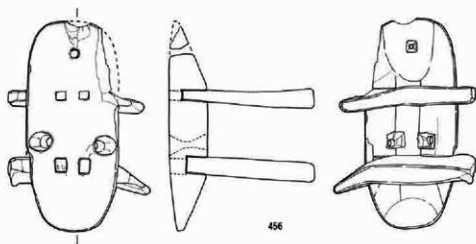
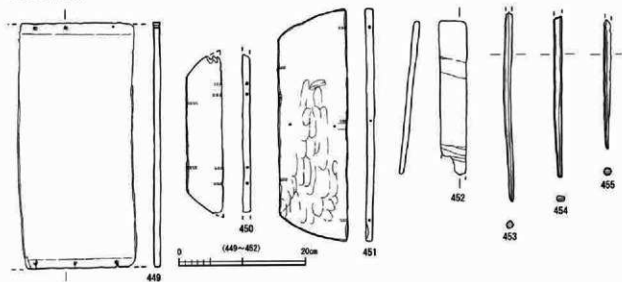
第31圖 出土遺物 C区Ⅱ遺構面(3)

C区II遺構面(4)



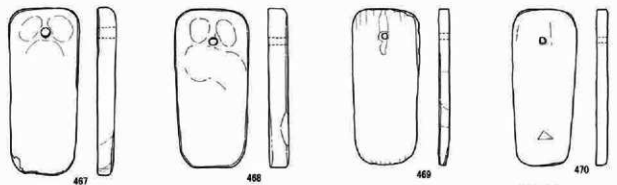
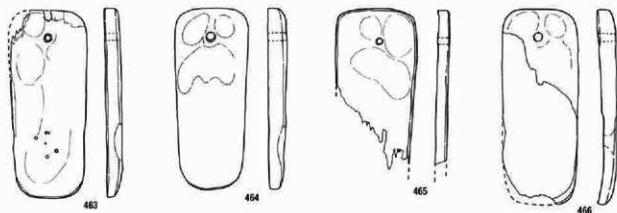
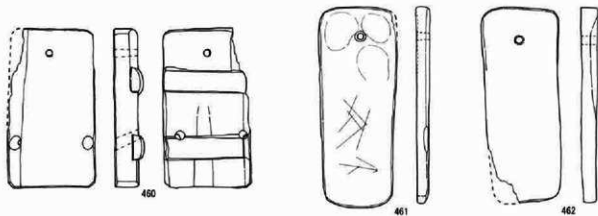
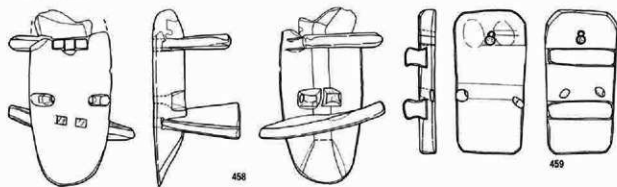
第32图 出土遺物 C区II遺構面(4)

C区II遺構面(5)



第33圖 出土遺物 C区II遺構面(5)

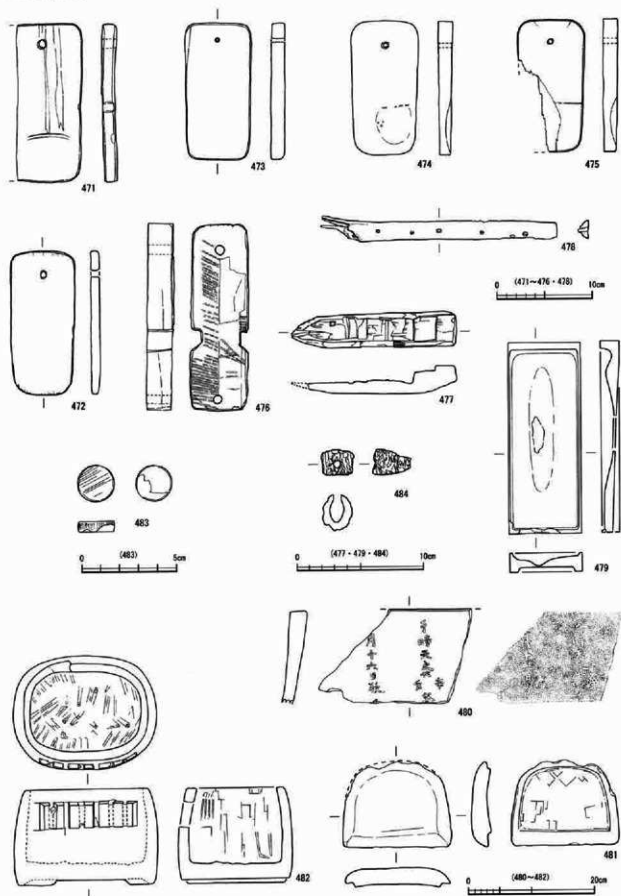
C区II遺構面(6)



0 (458~470) 10cm

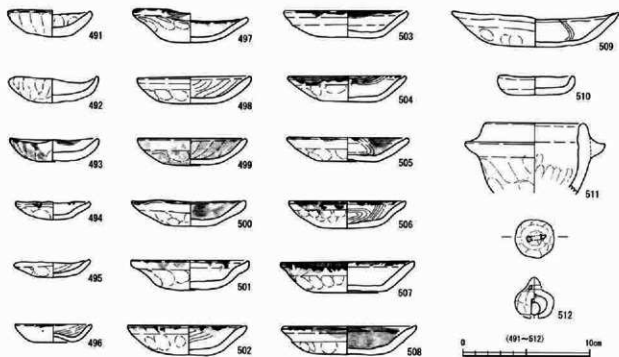
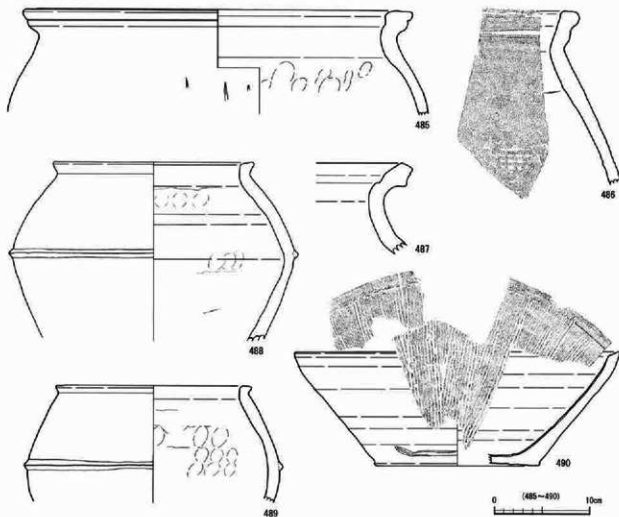
第34图 出土遺物 C区II遺構面(6)

C区II遺構面(7)



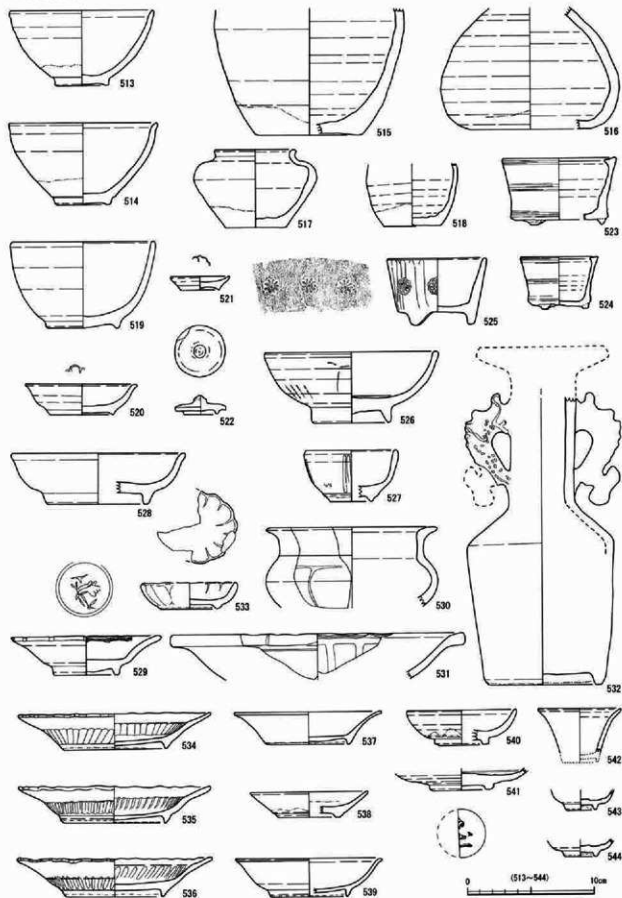
第35圖 出土遺物 C区II遺構面(7)

D区I遺構面(1)



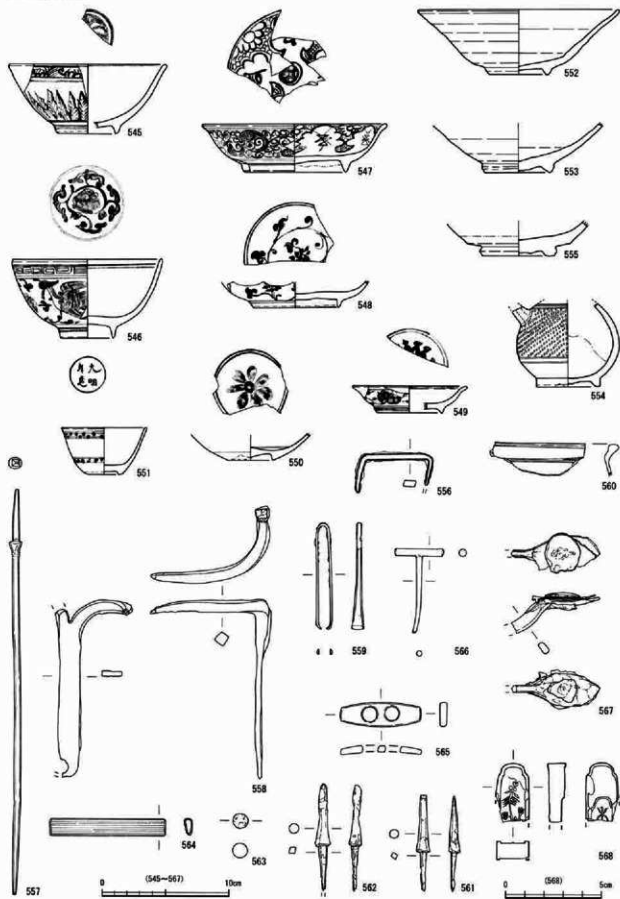
第36圖 出土遺物 D区I遺構面(1)

D区 I 遺構面 (2)



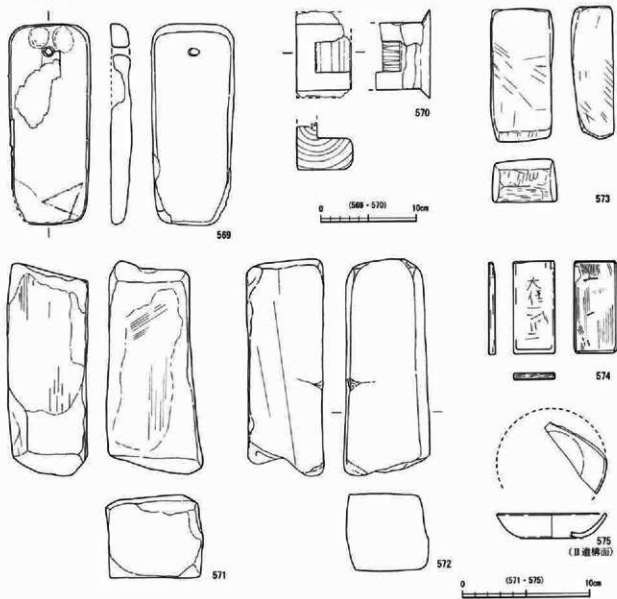
第37圖 出土遺物 D区 I 遺構面 (2)

D区I遺構面(3)

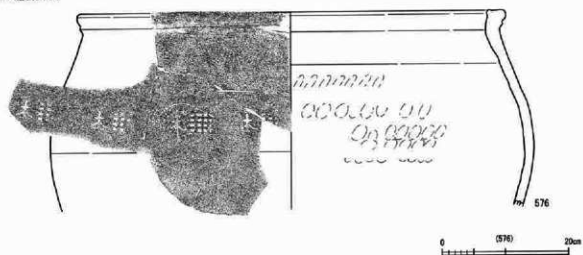


第38图 出土物 D区I遺構面(3)

D区I遺構面(4)

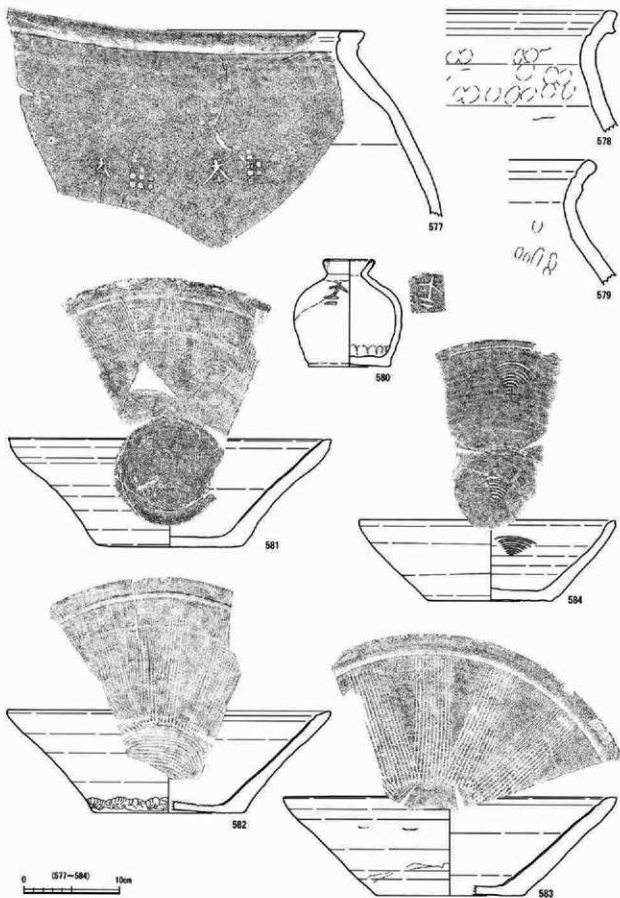


D区II遺構面(1)



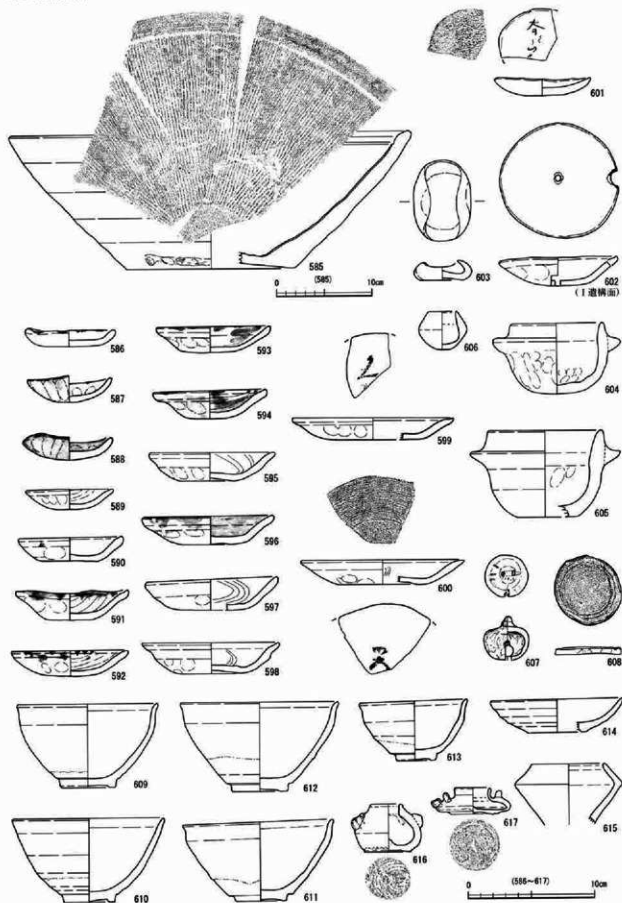
第39図 出土遺物 D区I遺構面(4)、D区II遺構面(1)

D区II遺構面(2)



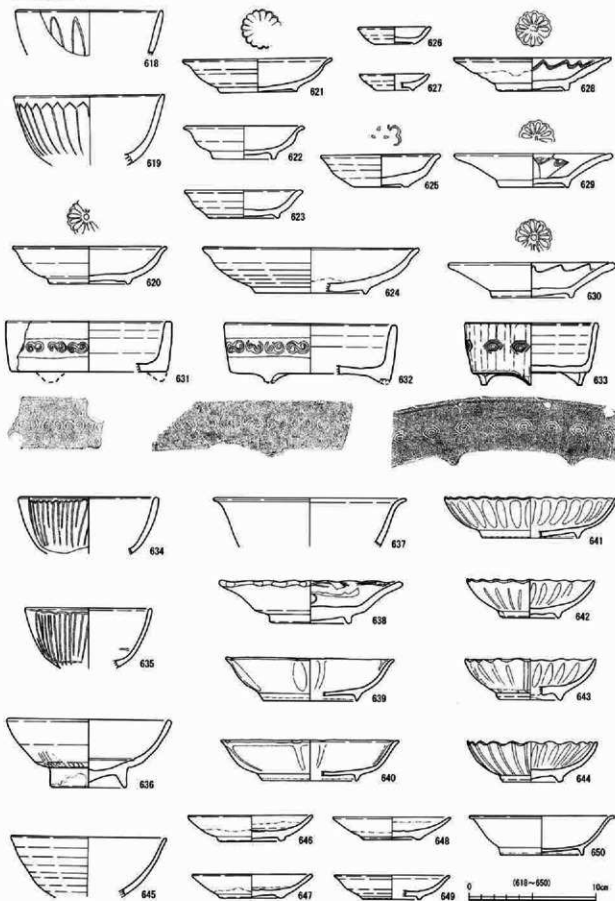
第40図 出土遺物 D区II遺構面(2)

D区II遺構面(3)



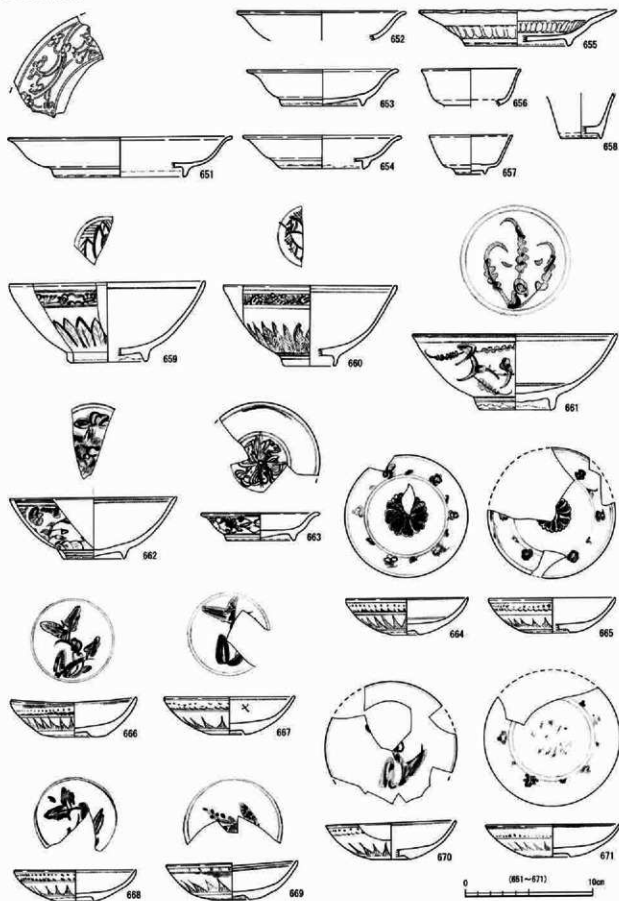
第41圖 出土遺物 D区II遺構面(3)

D区Ⅱ遺構面(4)



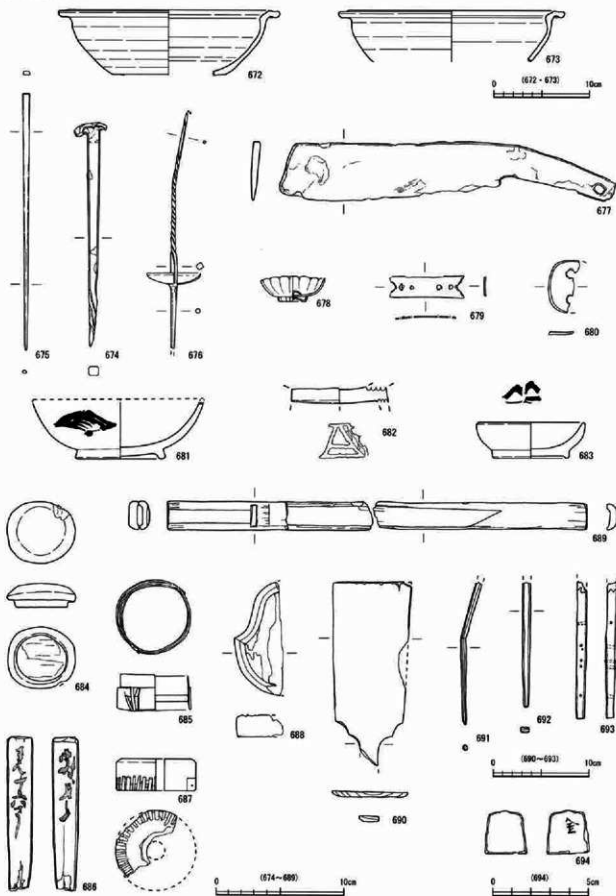
第42圖 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(4)

D区Ⅱ遺構面(5)



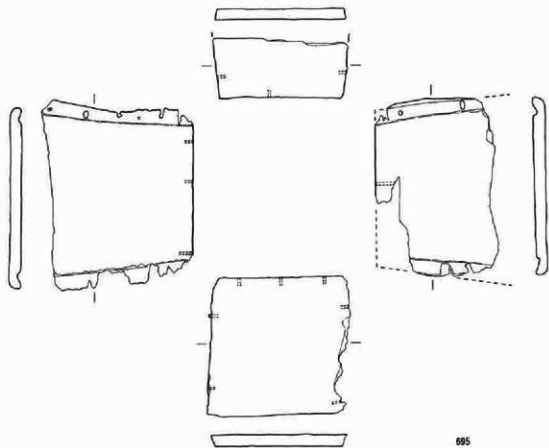
第43圖 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(5)

D区II遺構面(6)

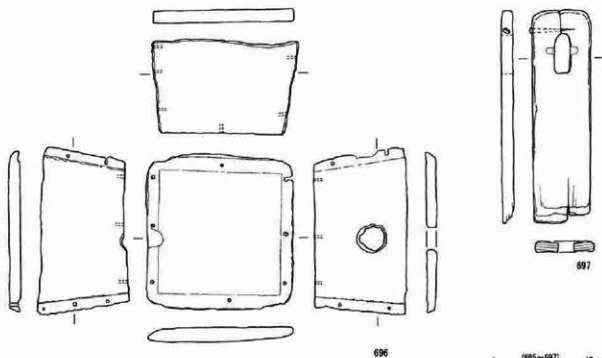


第44図 出土遺物 D区II遺構面(6)

D区Ⅱ遺構面(7)

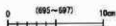


695



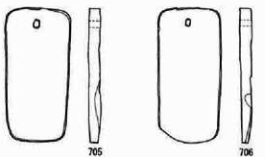
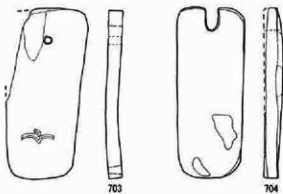
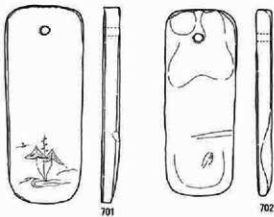
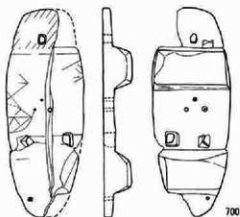
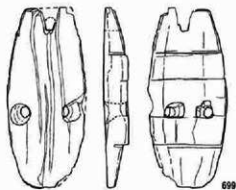
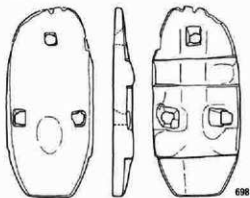
696

697

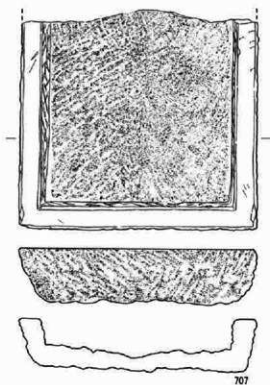


第45図 出土遺物 D区Ⅱ遺構面(7)

D区II遺構面(8)



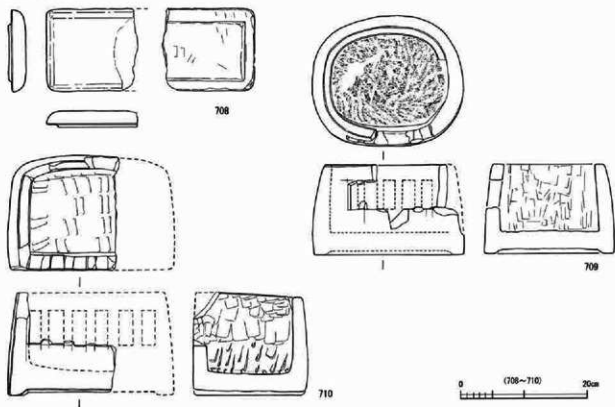
0 (698~706) 10cm



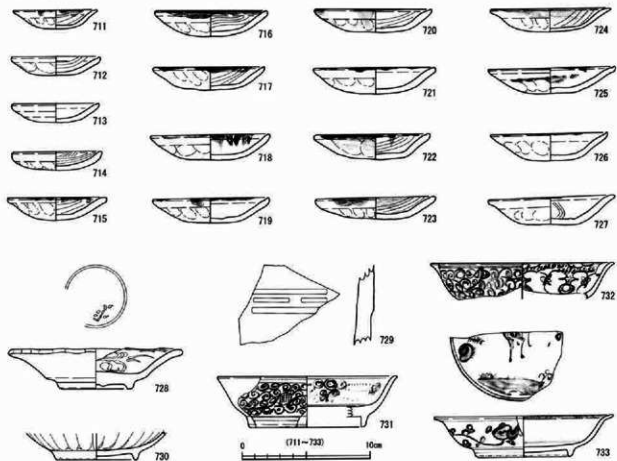
0 (707) 50cm

第46図 出土遺物 D区II遺構面(8)

D区II遺構面(9)

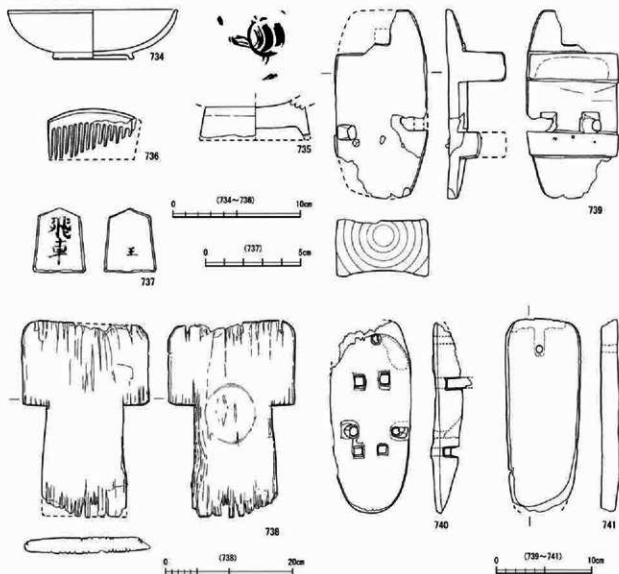


E区I遺構面(1)

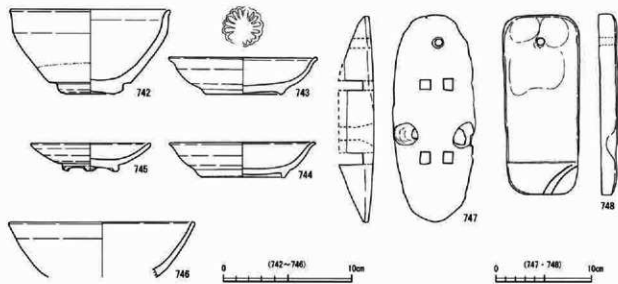


第47图 出土遺物 D区II遺構面(9)、E区I遺構面(1)

E区I遺構面(2)

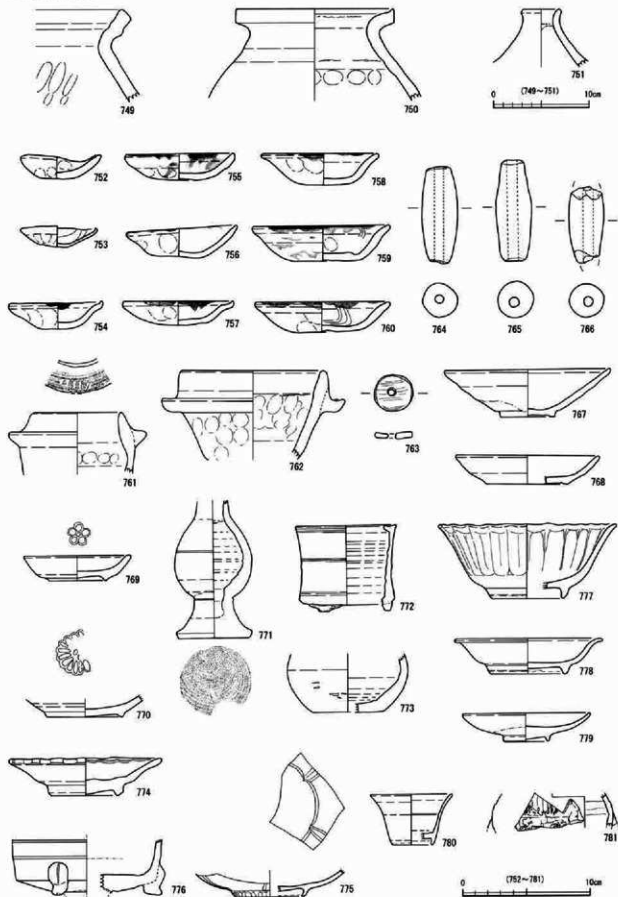


E区II遺構面



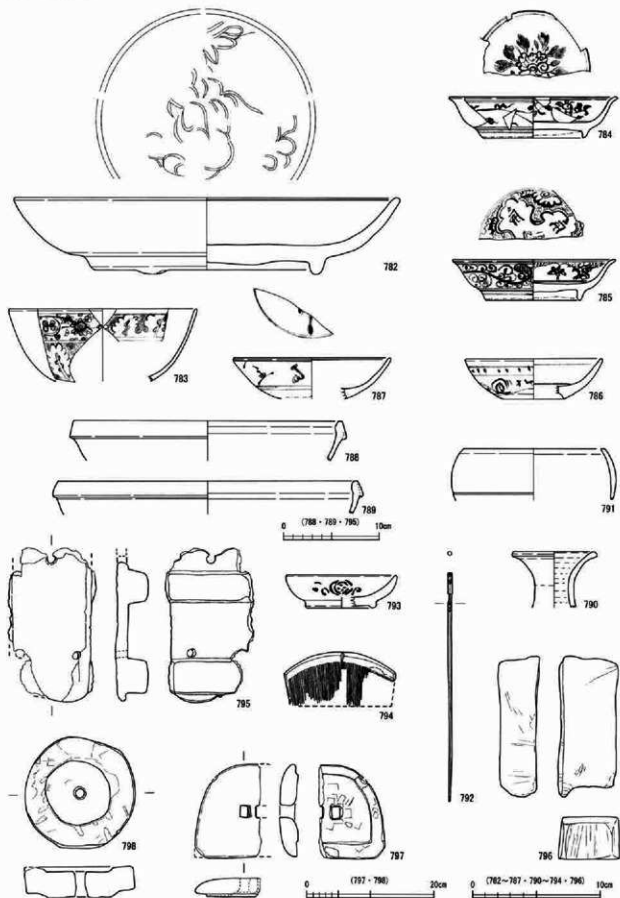
第48圖 出土遺物 E区I遺構面(2)、E区II遺構面

その他 I 遺構面(1)



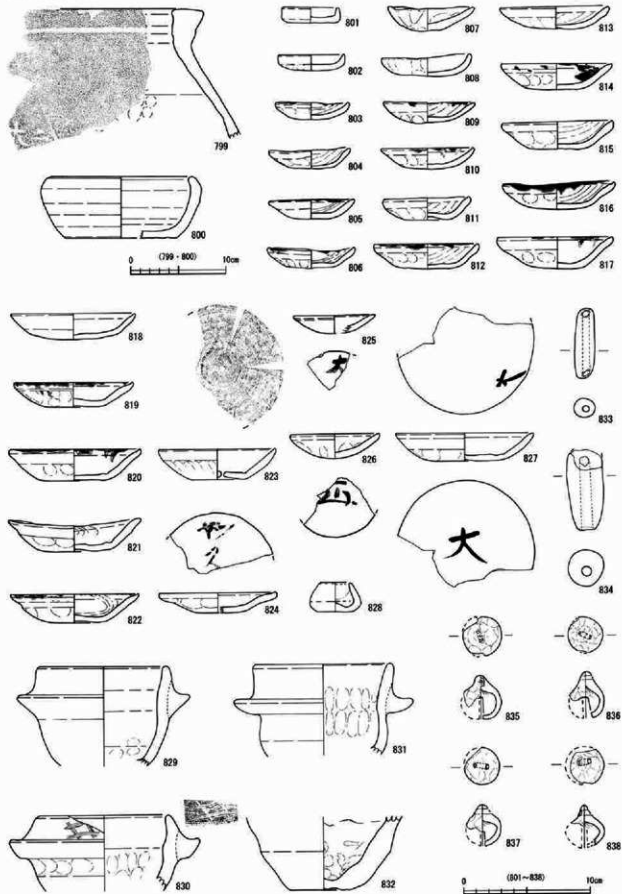
第49図 出土遺物 その他 I 遺構面(1)

その他 I 遺構面 (2)



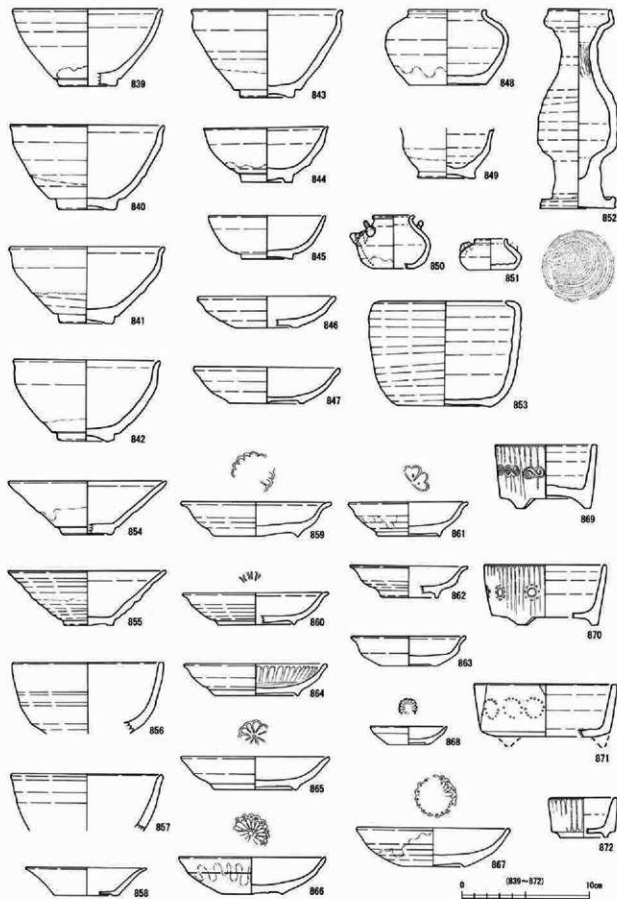
第50図 出土遺物 その他 I 遺構面 (2)

その他Ⅱ遺構面(1)



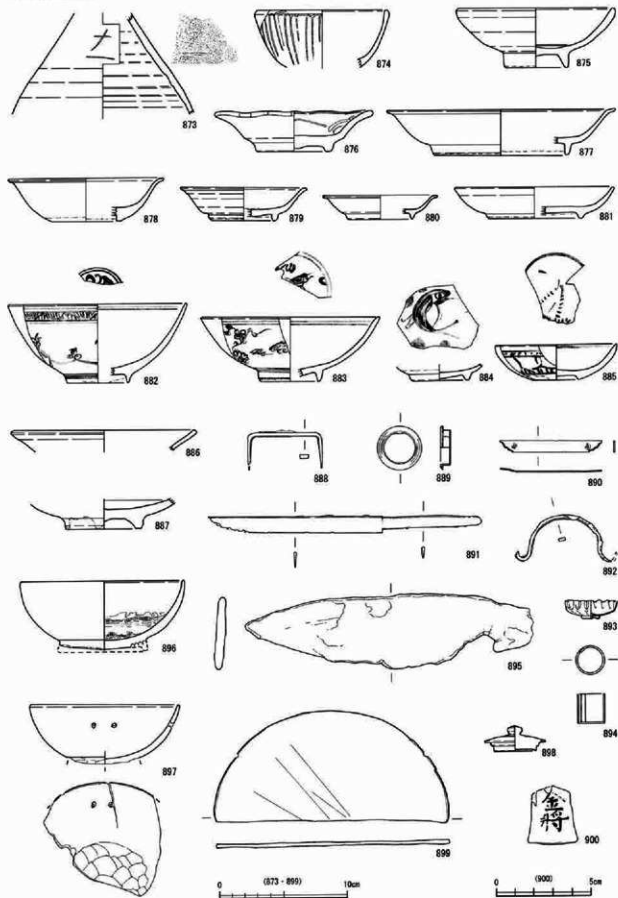
第51図 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(1)

その他Ⅱ遺構面(2)



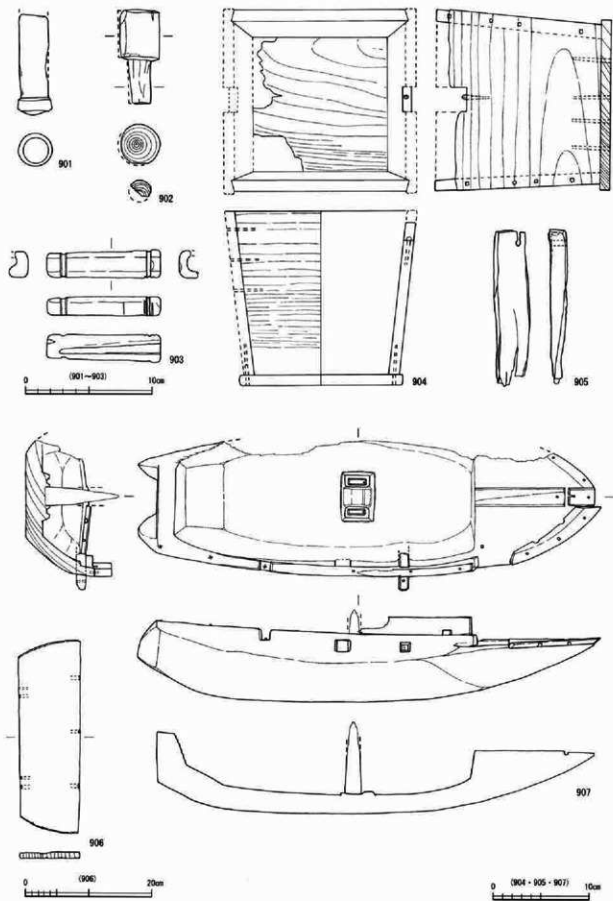
第52図 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(2)

その他Ⅱ遺構面(3)



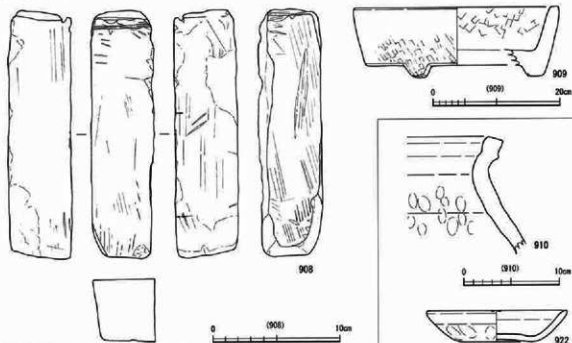
第53図 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(3)

その他Ⅱ遺構面(4)

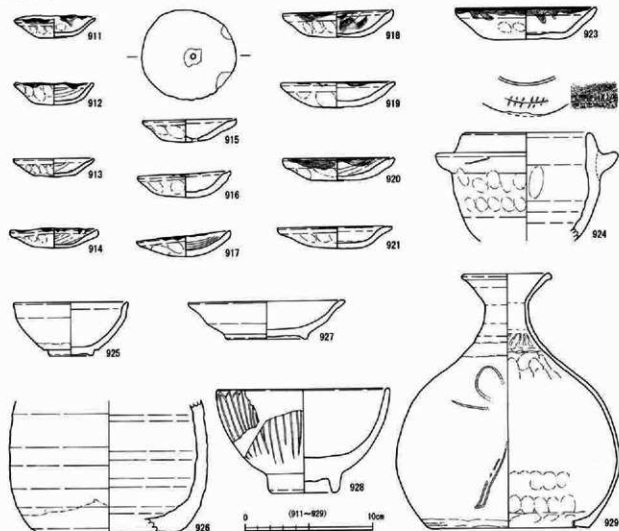


第54図 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(4)

その他Ⅱ遺構面(5)

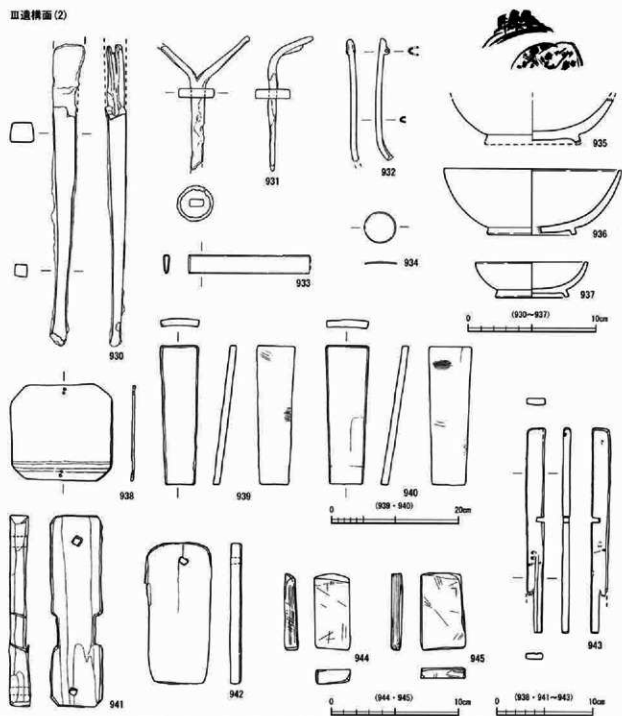


Ⅲ遺構面(1)

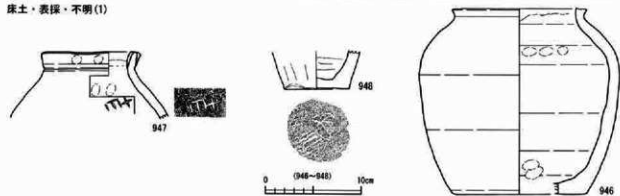


第55図 出土遺物 その他Ⅱ遺構面(5)、Ⅲ遺構面(1)

III遺構面(2)

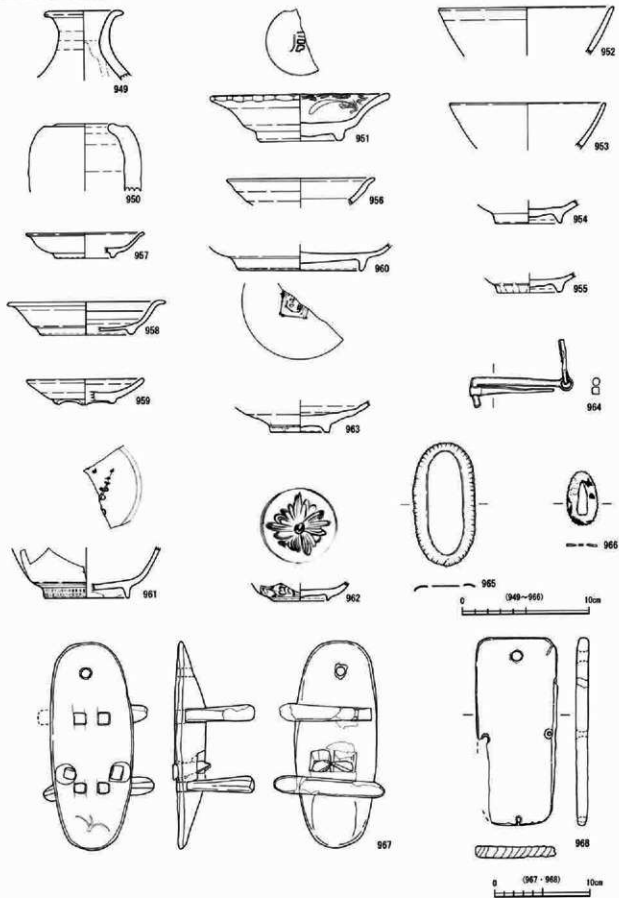


床土・表探・不明(1)

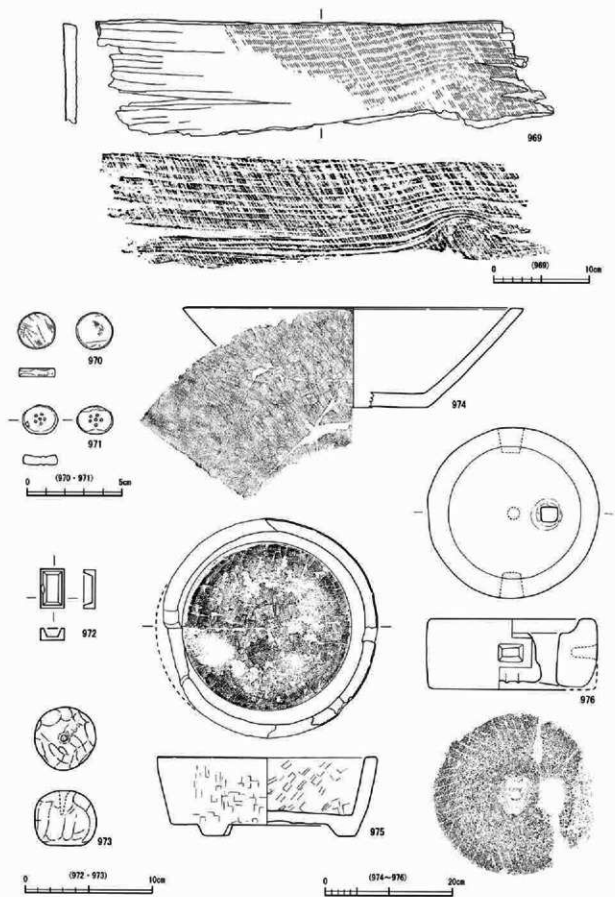


第56図 出土遺物 III遺構面(2)、床土・表探・不明(1)

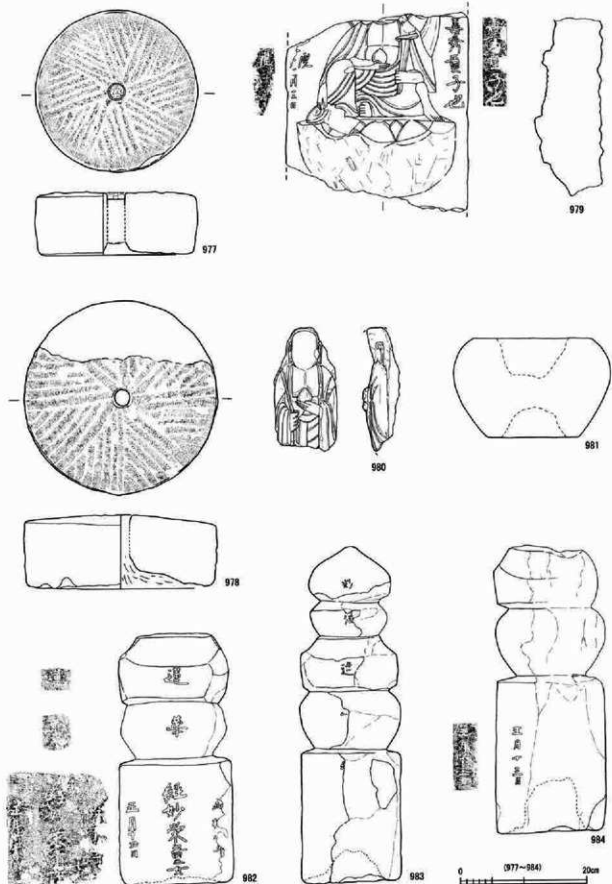
床土・表採・不明(2)



第57图 出土遺物 床土・表採・不明(2)



第58图 出土遺物 床土・表探・不明(3)

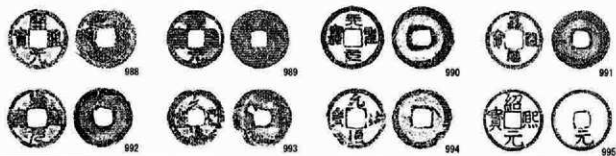


第59圖 出土遺物 床土・表採・不明(4)

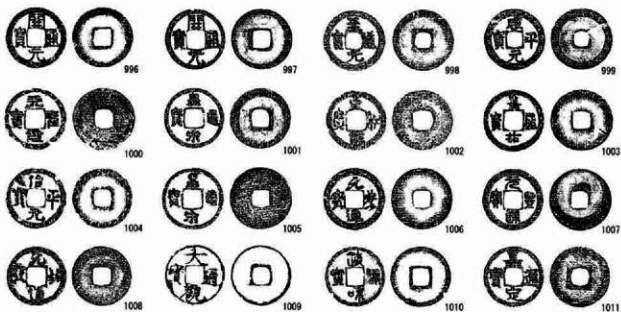
A区I遺構面



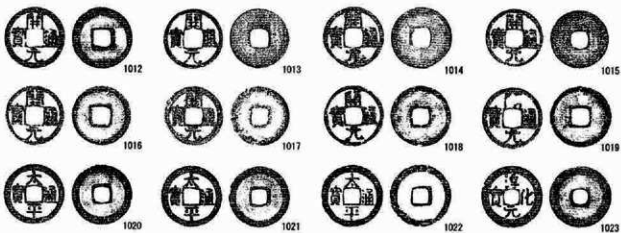
A区II遺構面



B区I遺構面

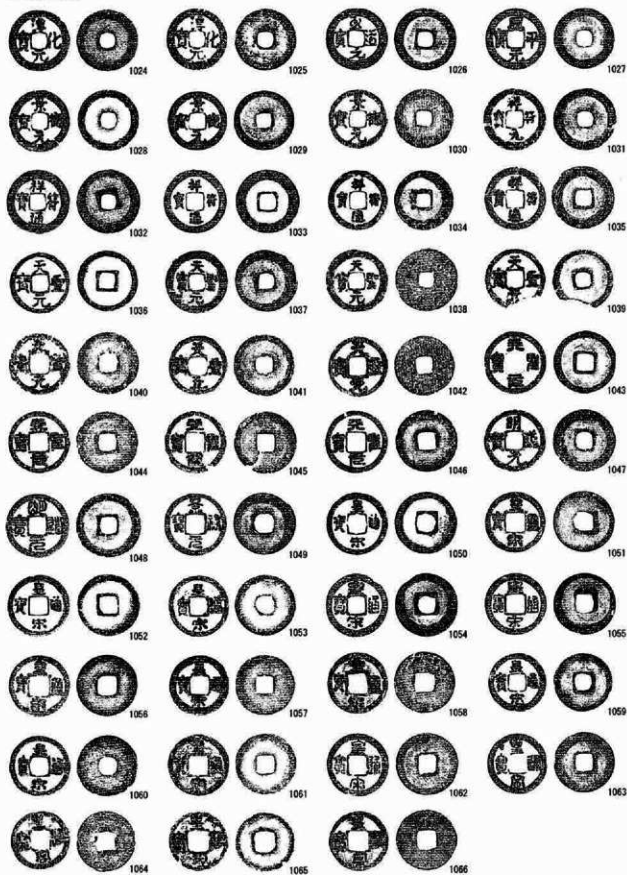


B区II遺構面(1)



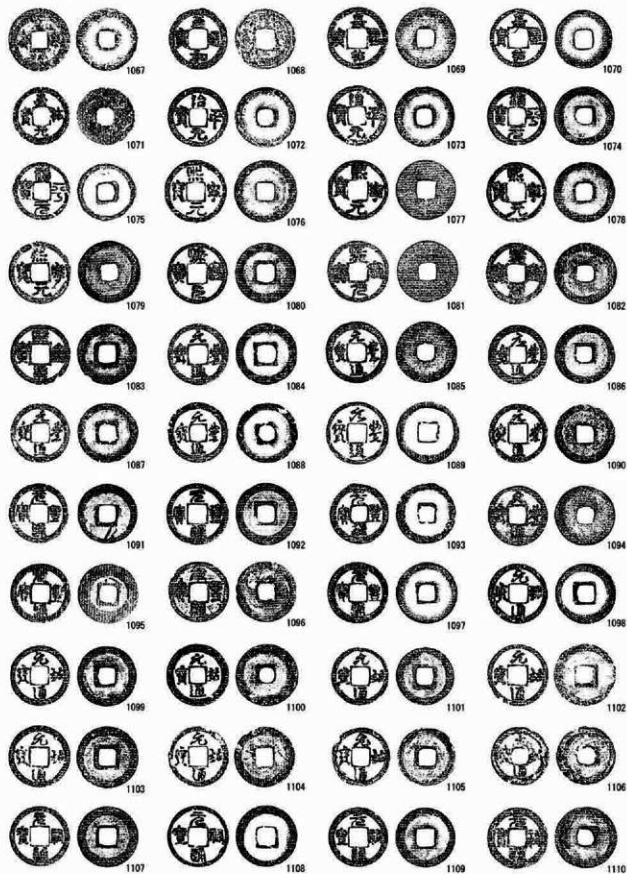
第60图 出土遺物 銭貨 A区I遺構面、A区II遺構面、B区I遺構面、B区II遺構面(1)

B区II遺構面(2)



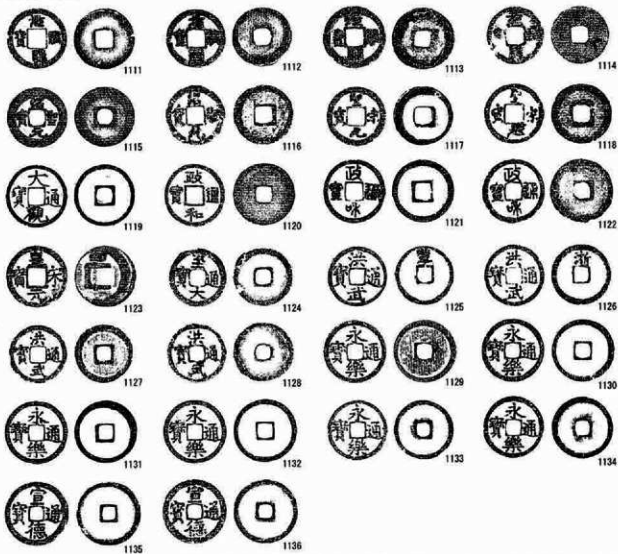
第61圖 出土遺物 錢貨 B区II遺構面(2)

B区Ⅱ遺構面(3)



第62圖 出土遺物 錢貨 B区Ⅱ遺構面(3)

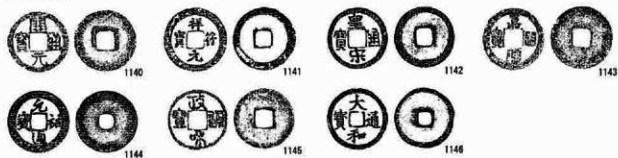
B区II遺構面(4)



B区III遺構面

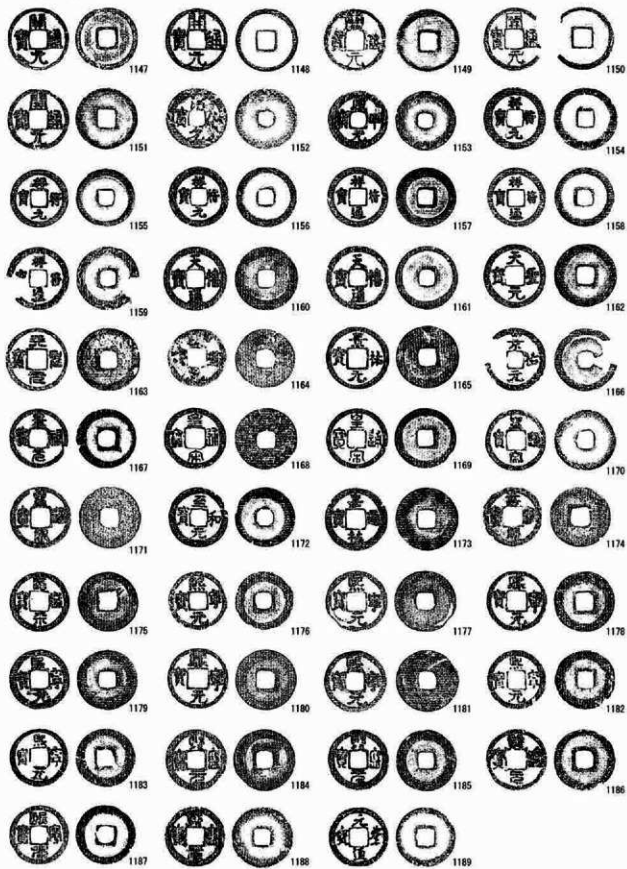


C区I遺構面



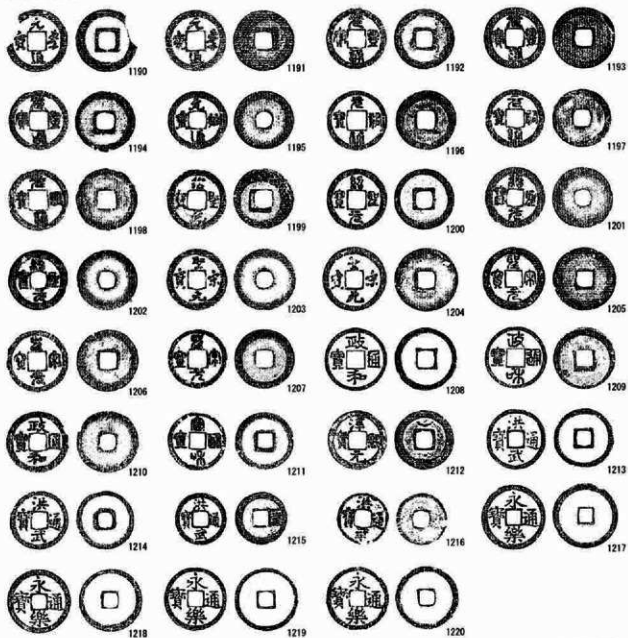
第63圖 出土遺物 錢貨 B区II遺構面(4)、B区III遺構面、C区I遺構面

C区II遺構面(1)



第64图 出土遺物 钱貨 C区II遺構面(1)

C区II遺構面(2)



C区III遺構面

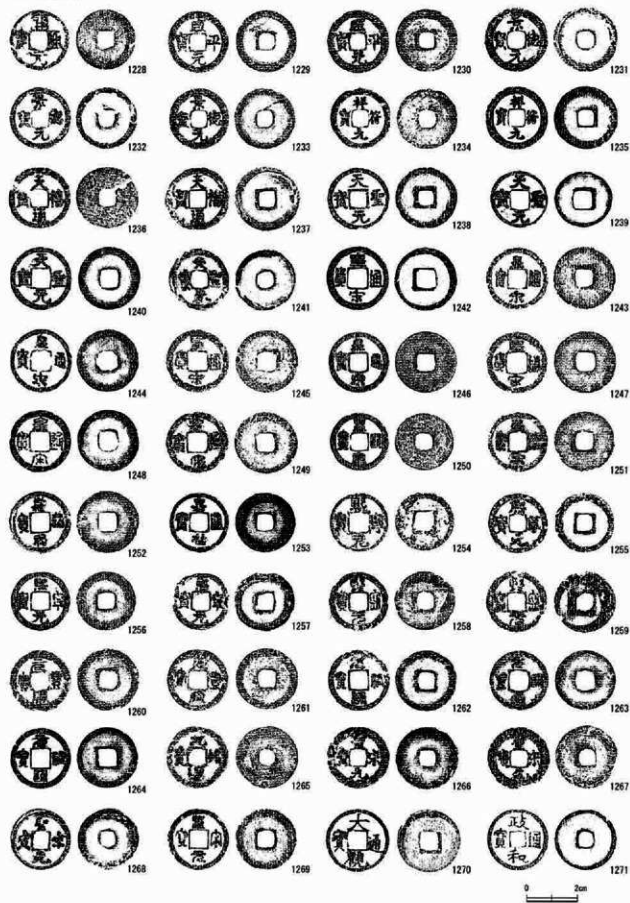


D区I遺構面(1)



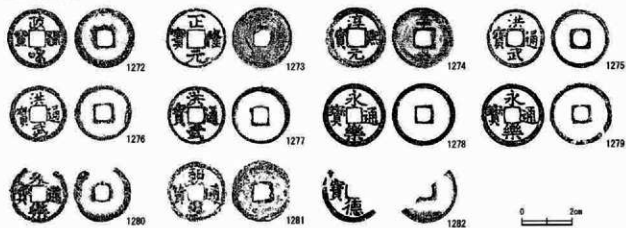
第65圖 出土遺物 錢貨 C区II遺構面(2)、C区III遺構面、D区I遺構面(1)

D区I遺構面(2)

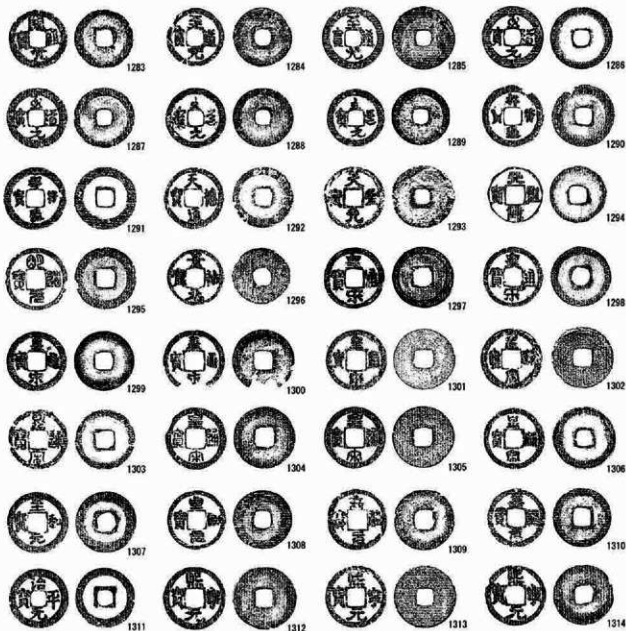


第66圖 出土遺物 錢貨 D区I遺構面(2)

D区I遺構面(3)

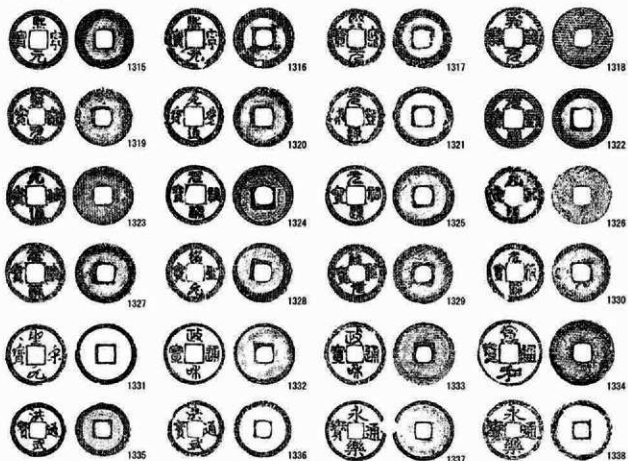


D区II遺構面(1)

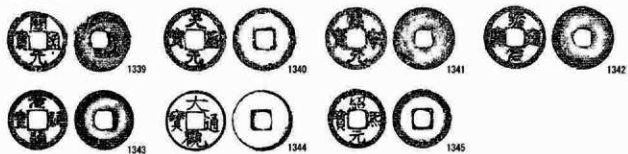


第67圖 出土遺物 錢貨 D区I遺構面(3)、D区II遺構面(1)

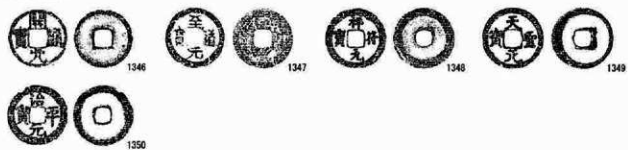
D区II遺構面(2)



E区I遺構面

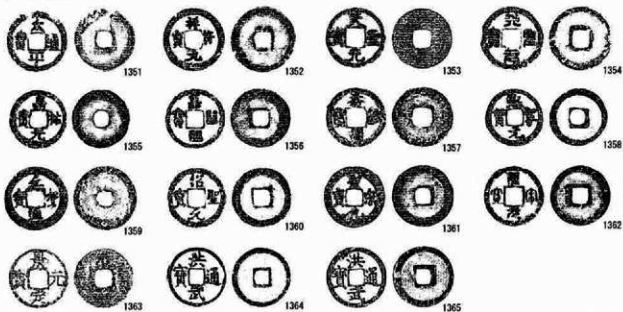


E区II遺構面

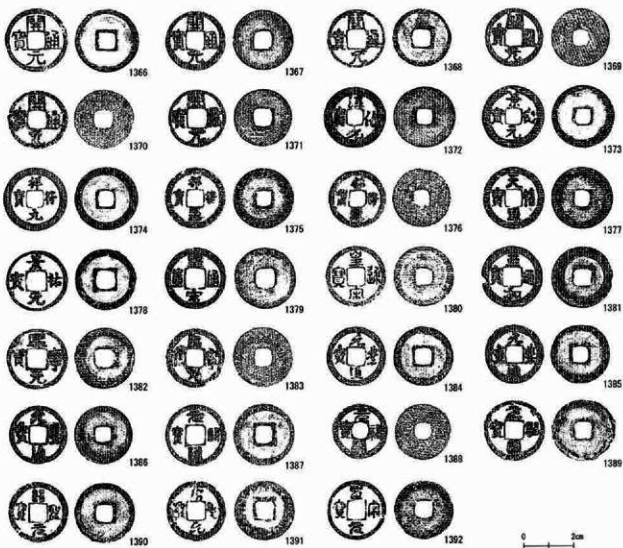


第68圖 出土遺物 錢貨 D区II遺構面(2)、E区I遺構面、E区II遺構面

その他 I 遺構面



その他 II 遺構面 (I)



第69図 出土遺物 銭貨 その他 I 遺構面、その他 II 遺構面 (I)

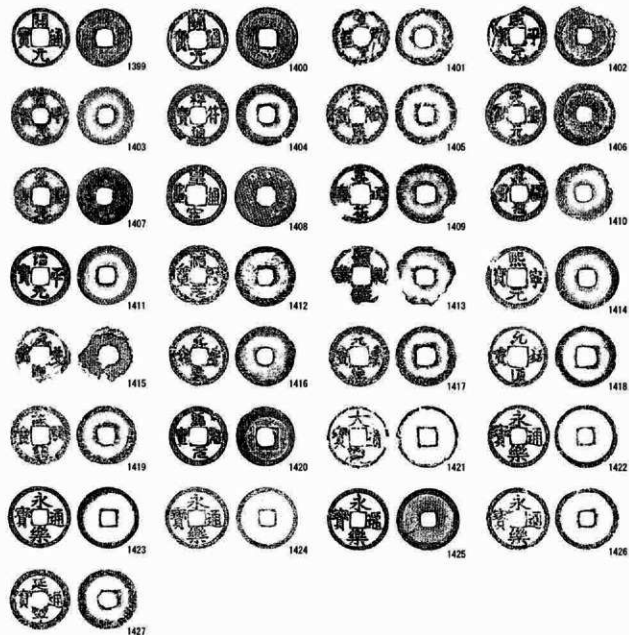
その他Ⅱ遺構面(2)



その他Ⅲ遺構面



床土・表探・不明



第70図 出土遺物 銭貨 その他Ⅱ遺構面(2)、その他Ⅲ遺構面、床土・表探・不明



(1) 調査区遠景 (下が北)



(2) 上層遺構面全景 (上が北)



(3) 下層遺構面全景 (上が北)



(4) 上層遺構面近景 (南東より)



(5) 下層遺構面近景 (南東より)



(6) SS493 (東より)



(7) SS493・SJ1619 (西より)



(8) SS1564・SX1623 (北より)



(9) SS1564 (南より)



(10) SS1565 (南より)



(11) SS1567 (南より)



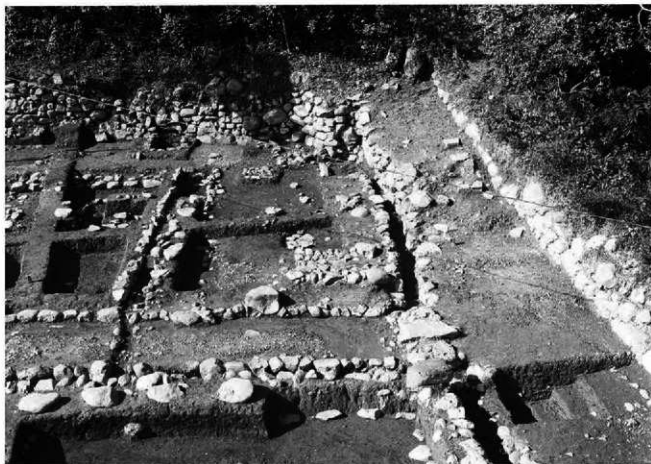
(12) SS1565、SD501・1574北半 (東より)



(13) 上層遺構面北半 (東より)



(14) 上層遺構面南半 (東より)



(15) SB1550, SX1635, SD1568 (東より)



(16) SB1714 - 1715 (東より)



(17) SF1604 (東より)



(18) SE1594 (南より)



(19) SB1714 (東より)



(20) SF1741 (北より)



(21) SB1553・1554 (東より)



(22) SB1555 (南より)



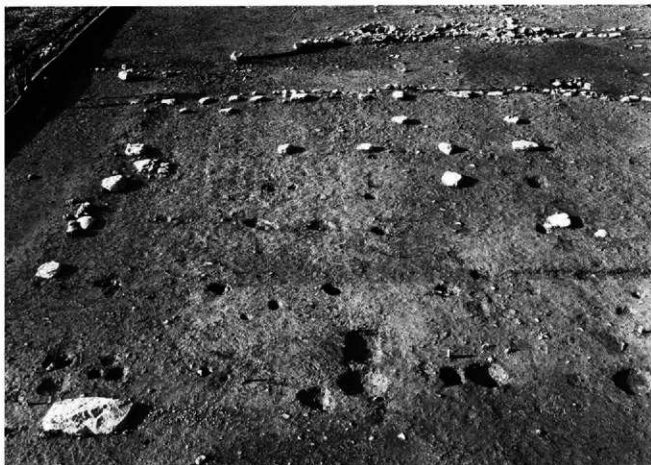
(23) SF1742、SX1784・1785 (南より)



(24) SB1721 (北より)



(25) SB1556, SF1606 (西より)



(26) SB1556 (東より)



(27) SB1720 (北より)



(28) SE1596 (南より)



(29) SF1606 (西より)



(30) 陶磁器を収めたバンドコ



(31) SF1607 (西より)



(32) SF1606 (南より)



(33) SE1598 (南より)



(34) SX1663・1664 (東より)



(35) SX1787 (東より)



(36) SX1662 (北より)



(38) SF1742 (南より)



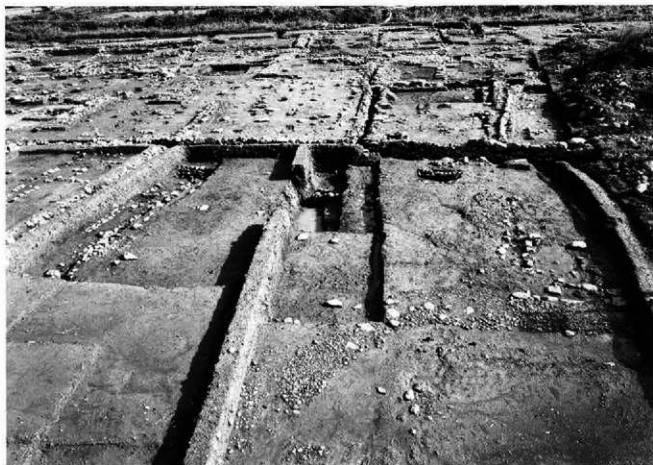
(39) SX1840 (東より)



(37) SD1730 (東より)



(40) SS1728 (東より)



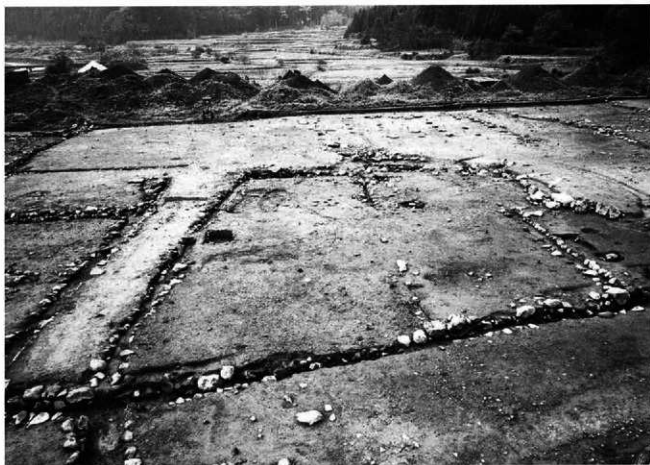
(41) SS1729, SA1748, SX1808・SX1809ほか (西より)



(42) SD1576・1736・1738, SF1743



(43) SD1737 (南より)



(44) 上層遺構面 (北より)



(45) SX1838 (北より)



(46) SX1836根太 (南より)



(47) SB1722・1723 (東より)



(48) SB1722 (北より)



(49) SB1723 (北より)



(50) SE1597 (南より)



(52) SF1609 (南より)



(51) SF1608 (南より)



(53) SF1610 (東より)



(54) 上層遺構面 (東より)



(55) 下層遺構面 (北より)



(56) SX1672~1675、SE1599 (北より)



(57) SA1752、SB1725 (北より)



(58) SB1558 (北より)



(59) SB1559 (北より)



(60) SE1599 (西より)



(61) SE1600 (南より)



(62) SE1601 (西より)



(63) SF1611 (南より)



(64) SF1612 (東より)



(65) SX1674 (東より)



(66) SX1822 (東より)



(67) SB1560 (西より)



(68) SB1562 (東より)



(69) SE1602 (南より)



(70) SE1603 (南より)



(71) SX1703 (東より)



(72) SD1584・1586 (西より)



(73) SF1617 (東より)



(74) SF1745 (東より)



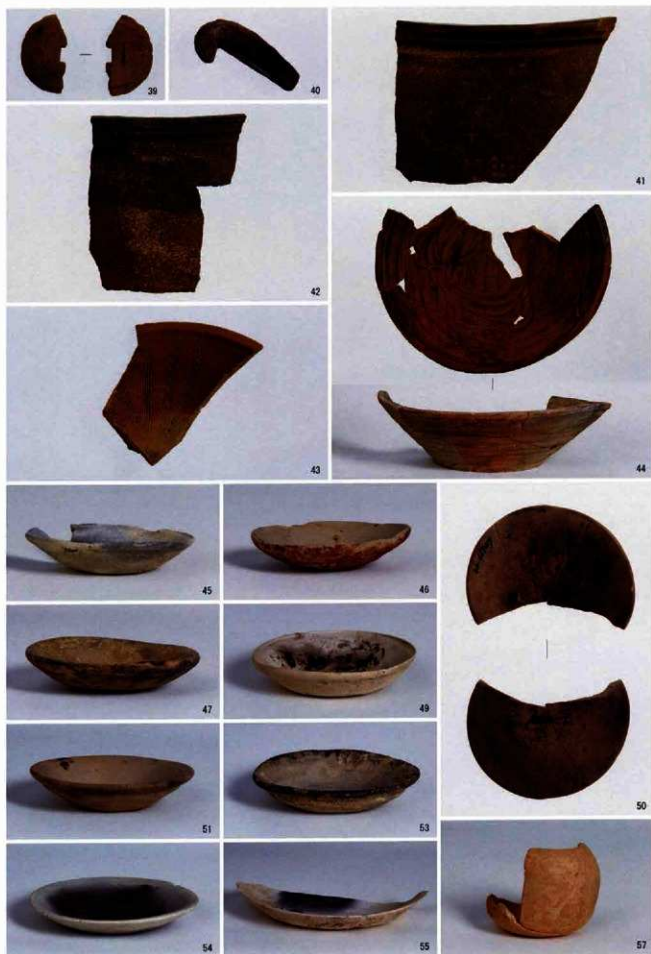
(75) SF1746 (東より)



(76) SF1614 (北より)





















154



155



156



157

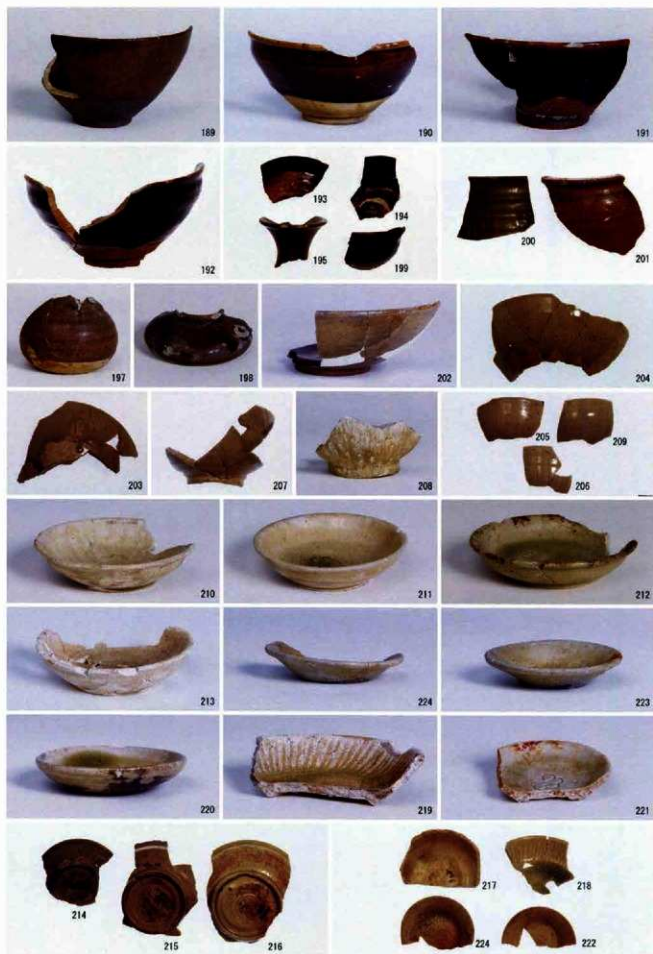


159



158

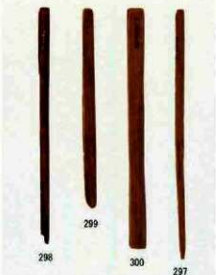
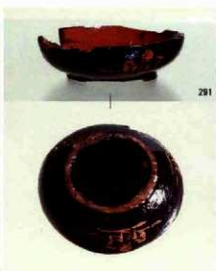














303



304



305



306



307



308



309



312



310

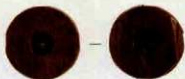
311



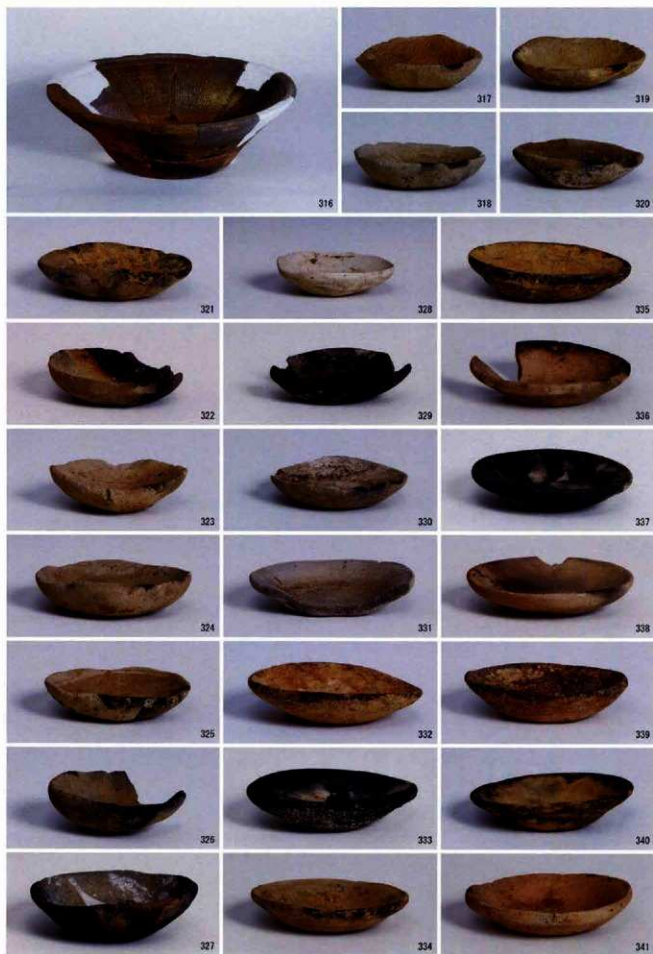
314



313



315



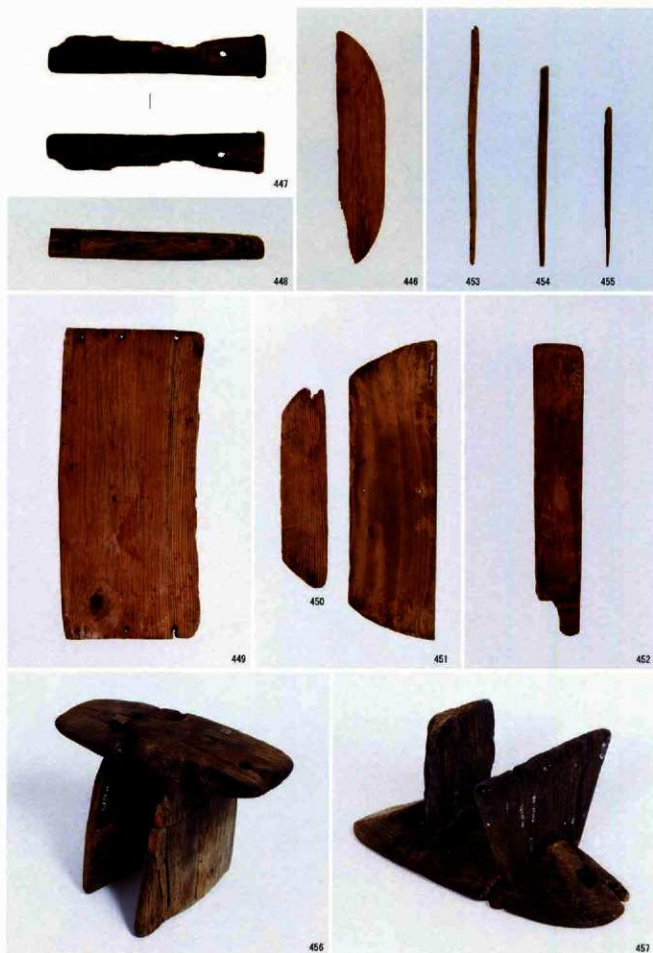














458



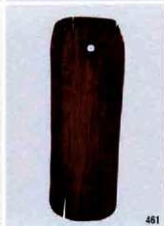
459



460



460



461



462



463



464



465



466



467



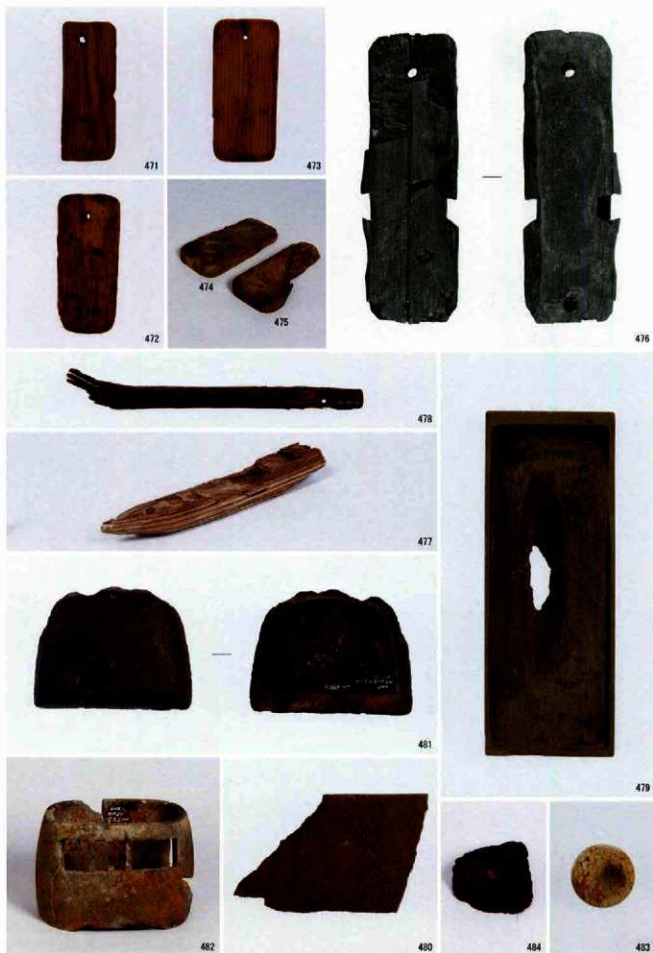
468

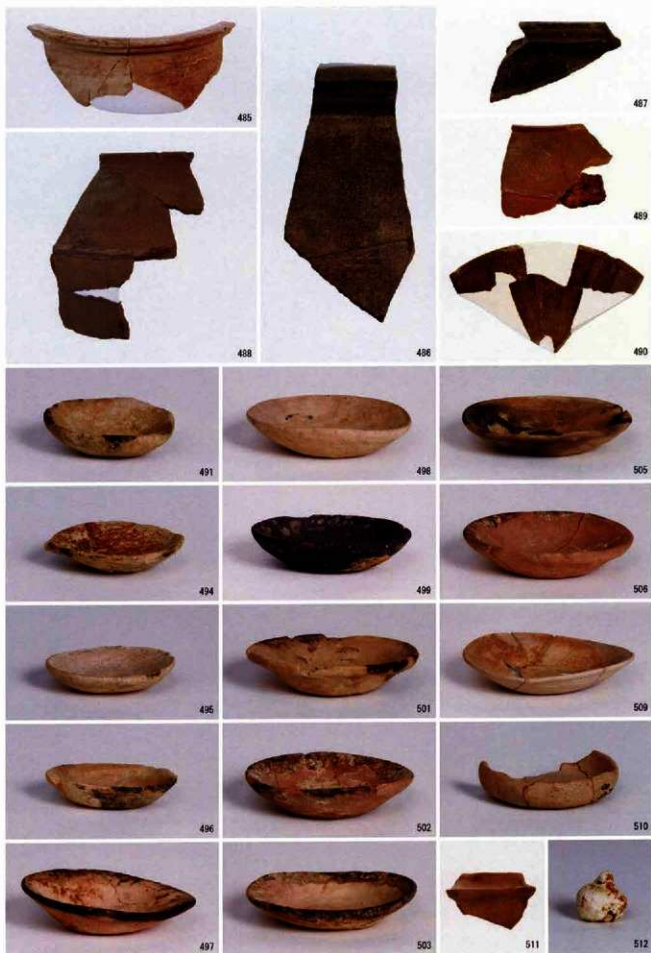


469



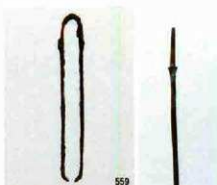
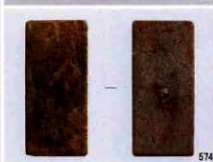
470









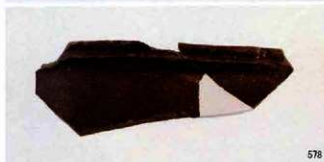




576



577



578



581



579



582



585



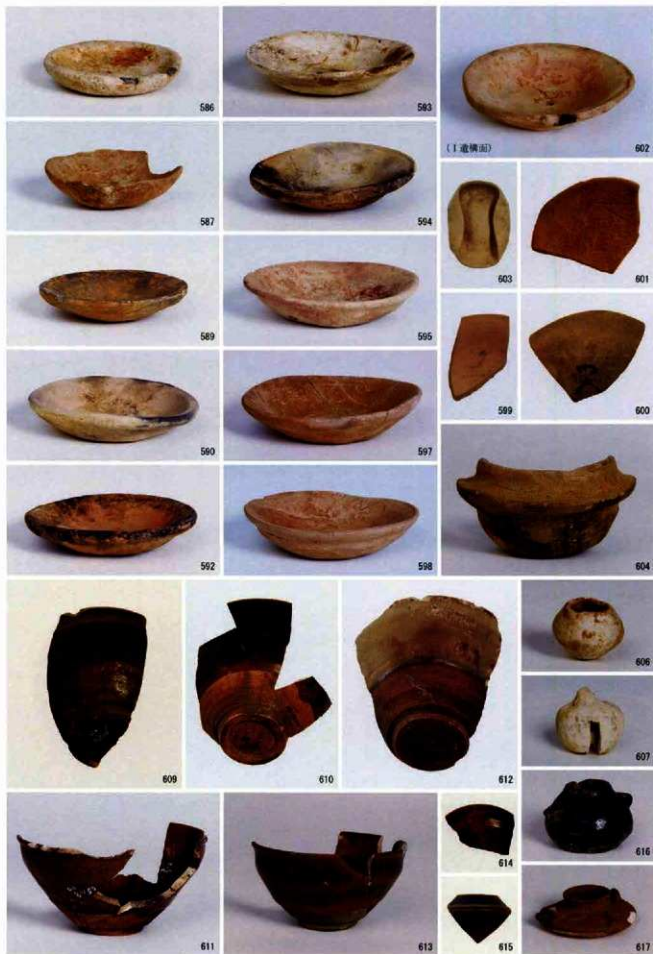
583



584



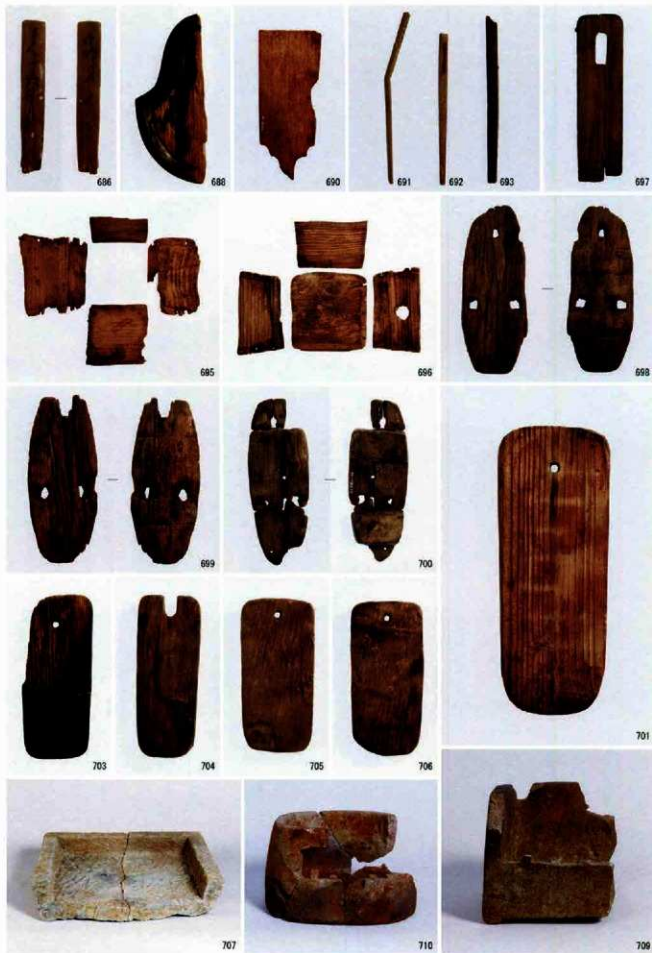
580



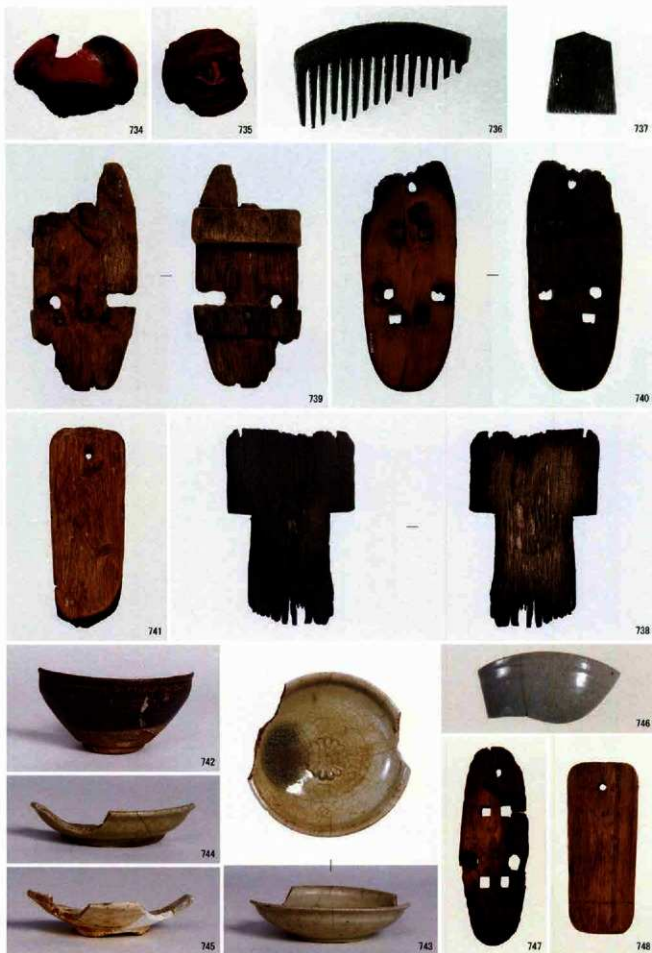






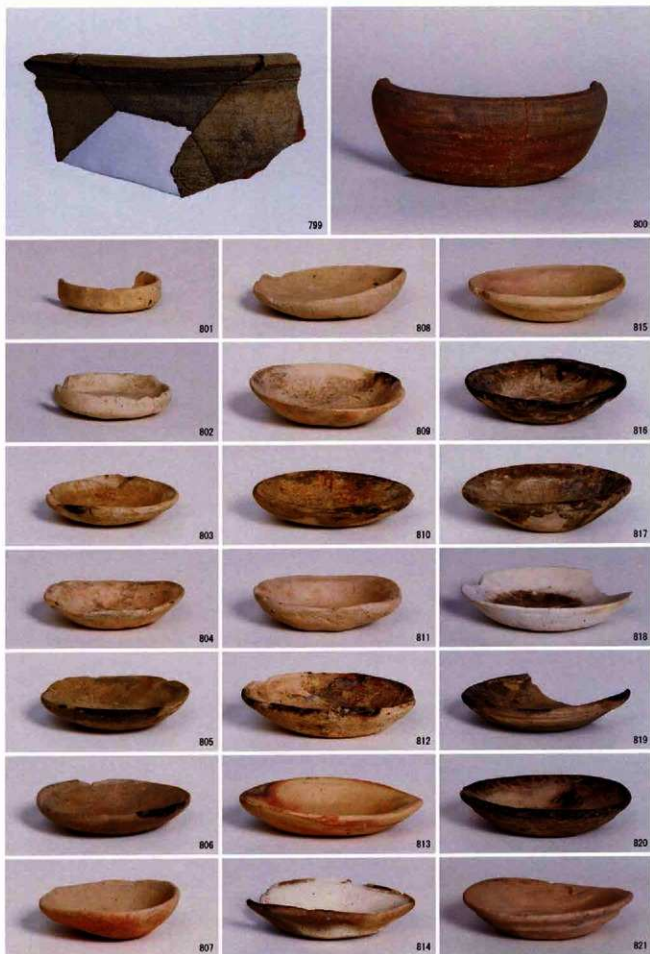








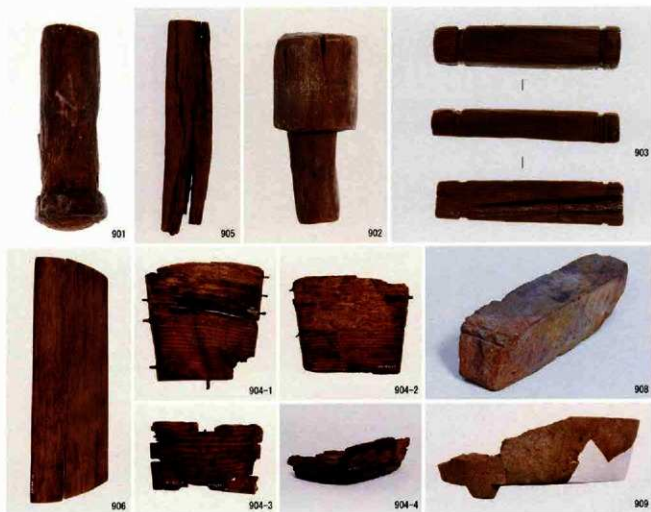




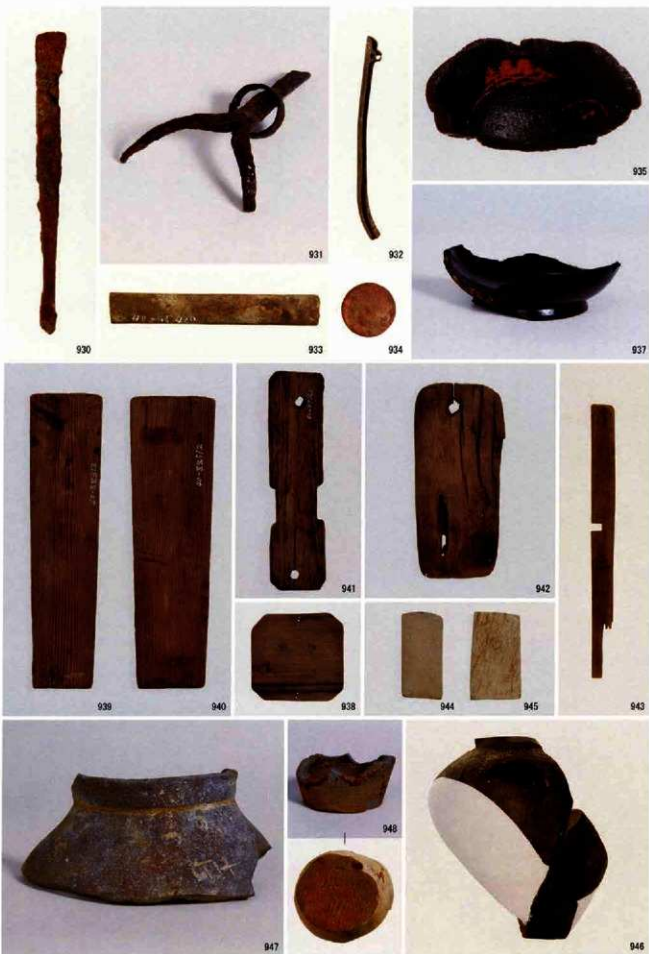






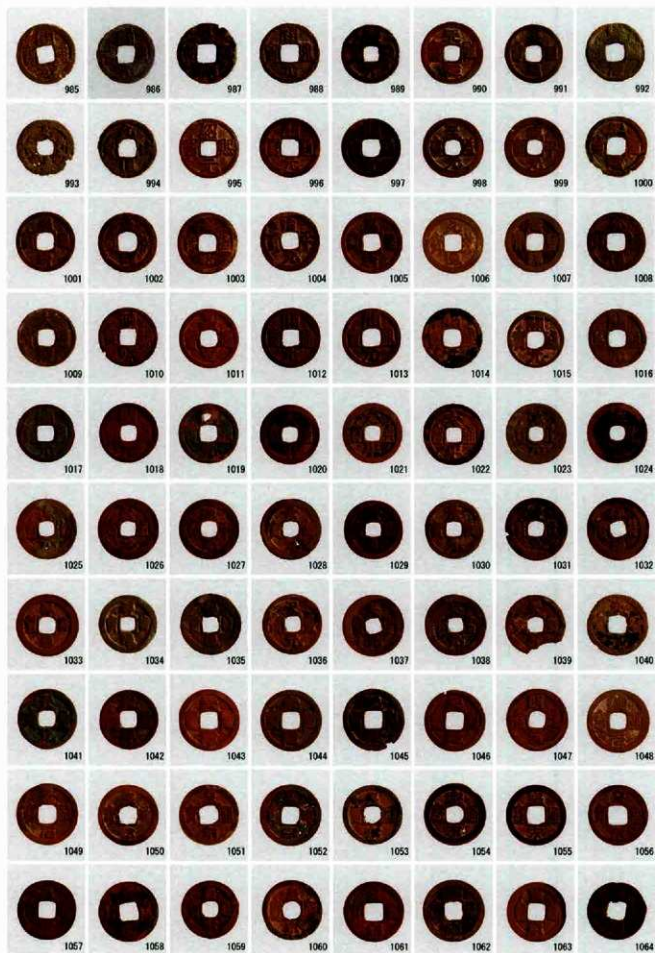


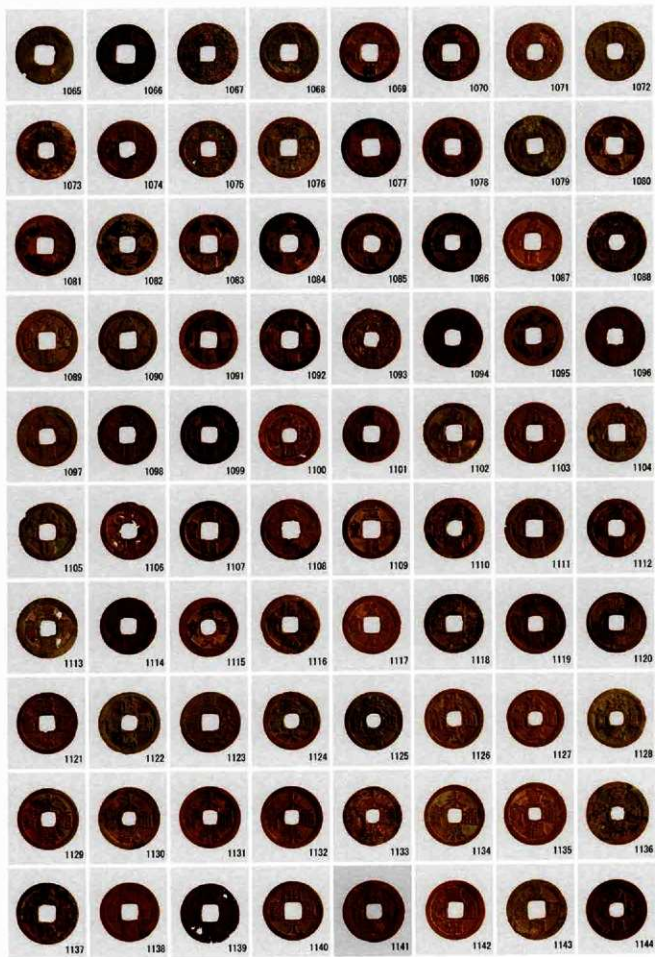


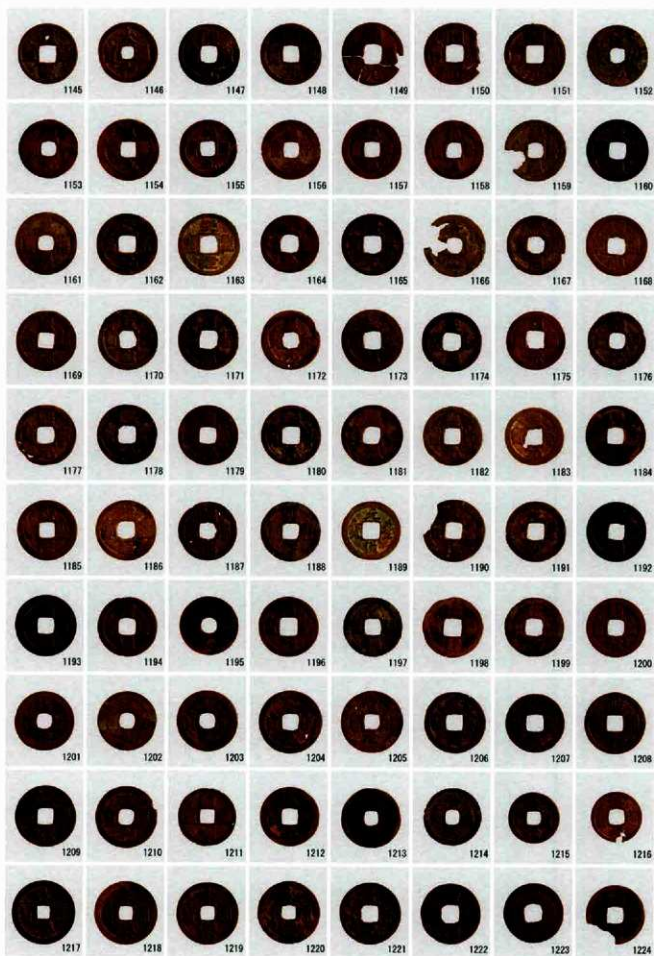


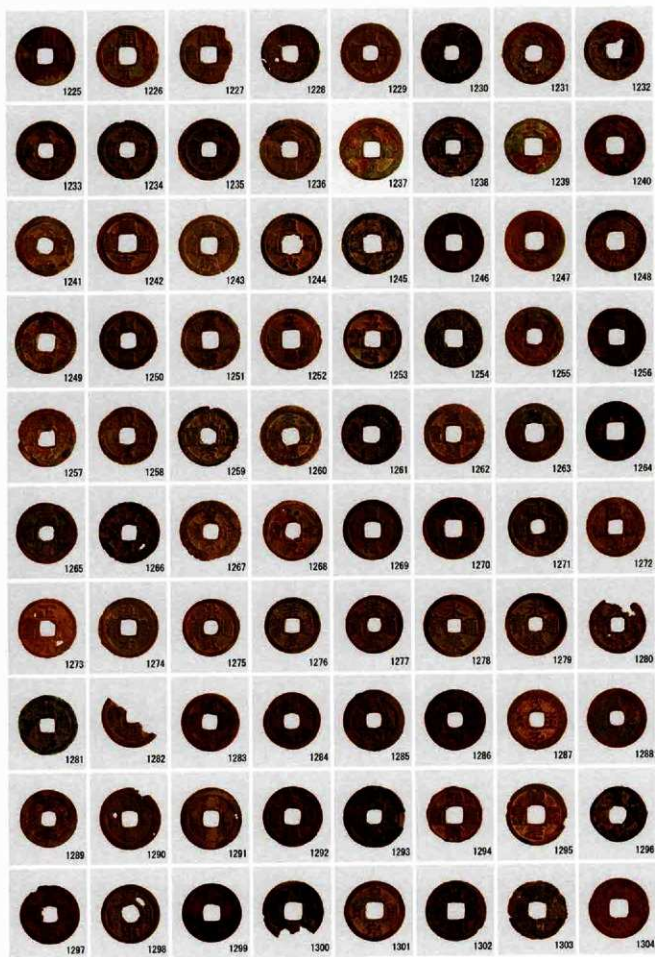


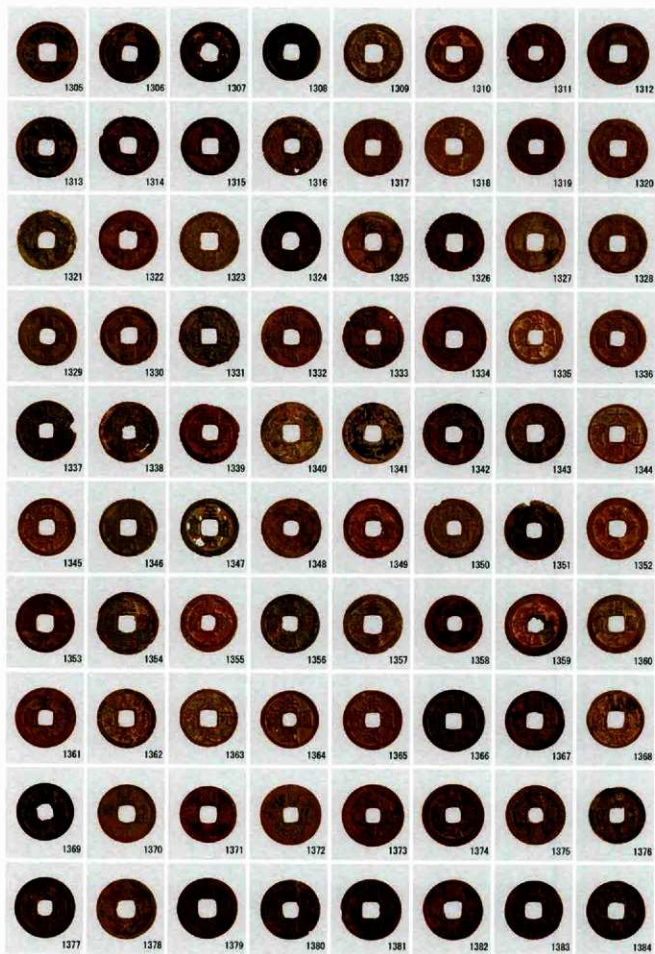


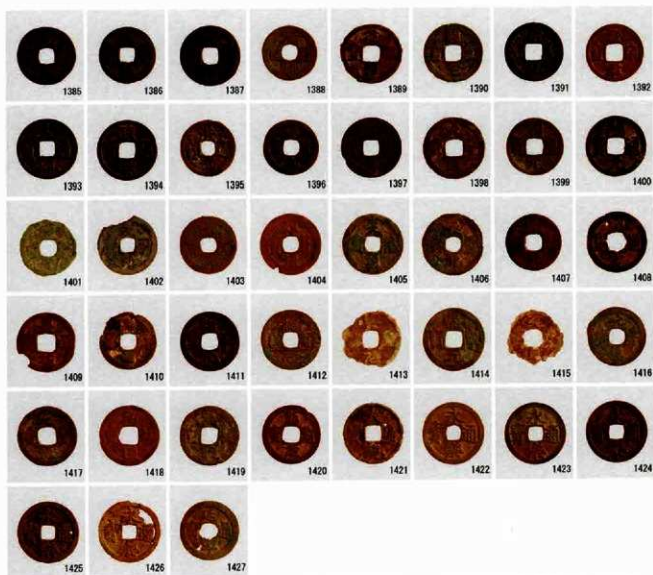












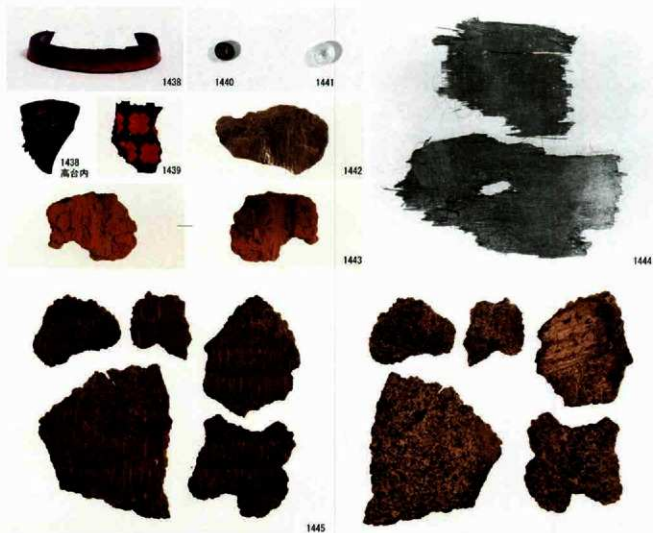


表9 遺物観察表補遺

No.	種類		区画	面	地区	層/遺構	法量(cm)			備考	区	Pl.
	大目	形状/素材					長	幅	厚			
1428	土師瓦	皿	B	II	L68	粘土	-	-	-	口縁部 黒色	-	79
1429	土師瓦	皿	B	III	N57	SD1728	-	-	-	底面 黒色「高台」	-	79
1430	土師瓦	皿	B/D	II	L57	SD1574	-	-	-	底面 黒色「小堀」	-	79
1431	土師瓦	皿	-	II	-	-	-	-	-	底面 黒色「小堀」	-	79
1432	土師瓦	皿	B	II	L68	粘土	-	-	-	口縁部 金箔押し	-	79
1433	土師瓦	皿	C	II	S60	暗赤魚土	-	-	-	体部 金箔押し 外側金箔網	-	79
1434	土師瓦	皿	D	II	S36	粘土	-	-	-	口縁部 金箔押し	-	79
1435	土師瓦	皿	D	I	L53	SD1586	-	-	-	体部 金箔押し	-	79
1436	中国	金付皿	C	II	Q61	高麗	華字径約15	5	5	式様式 縁部紅 内面黒色文帯 底面黒色	-	79
1437	朝鮮	銅胎鉄	B	I	065, 18・22・28X	SD3555, 床土	直径52	-	-	底面 見込・器付に直径各8	-	79
1438	漆器	皿	C	II	060	高麗	高台高11 底径7.2	高台部分 内黒外赤 高台内赤帯「土師」*	-	-	-	79
1439	小札	辛	B/D	II	L57	SD1574	4.3	3.0	0.6	黒色塗地に紫線を表現した水塗法	-	80
1440	数珠玉	ガラス	D	I	L36	SD1585	-	-	-	褐色	-	80
1441	数珠玉	水晶	C	I	T60	高麗	-	-	-	-	-	80
1442	茶目	-	-	-	-	-	4.9	3.1	0.2	香色玉*	-	80
1443	銅土	-	C	I	P63	SP7608	7.1	8.4	4.8	スチ含む 径約2cmの竹小堀の内面	-	80
1444	漆表	-	-	-	-	-	約29	約17	-	法量以下の1点 黒赤遺存 漆目表	-	80
1445	漆付銅	-	D	II	T53	-	10.4	9.0	2.1	法量は右下の1点 表面に黒表・へび巻付	-	80

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしせきはっくつちようさほうこく
書名	特別史跡・乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告17
副書名	第40次調査
シリーズ番号	17
編著者名	田中祐二
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	令和2年3月25日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道庁番号					
第40次発掘調査	ふくいしせきのうちせきいちじょうだにあさくらしせきはっくつちようさほうこく 福井市城戸ノ内町字奥開野	18210	史一31	36° 00' 28"	136° 29' 60"	19800701 ～ 19811013	3,000㎡	環境整備に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第40次発掘調査	寺院 武家屋敷 町屋	室町・戦国	道路、溝、礎石建物、井戸、石積施設、炉	越前焼、土師瓦葺、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、金属製品・木製品・石製品、ガラス皿、油燵墨	石積施設から「金剛」が出土し、便所と推定。 北国船模型、ガラス皿、油燵墨などが出土。
要約	<p>第40次発掘調査地は、福井市城戸ノ内町字奥開野地区に所在する。</p> <p>当地区ならびに隣接する赤浜・吉野本地区は武家屋敷・寺院・町屋等の遺構が良好に残り、全面的な発掘調査の結果、一乗谷の町並の様子が最も解明された地区の一つとなっている。当調査以前には、西側の山越に比較的大区画の寺院、東側の一乗谷川沿いに南北の幹線道路を基準に展開する小区画の屋敷群の存在が判明していた。これらの調査結果を受け、当調査では南北道路の行方や、町屋と考えられる小規模な屋敷跡の構造ならびに町屋の変遷の追求に主眼を置いた。</p> <p>調査の結果、少なくとも4期にわたる遺構面を検出し、寺院や武家屋敷と考えられる比較的大規模な区画が町屋と考えられる小規模の区画に分断、喪失されていく町屋の変遷過程をとらえることができた。遺物では、石積施設から金剛が出土し、それが便所であるとの確証に至った。その他、油燵墨やガラス皿、北国船の模型など、それまで出土のない、あるいは極めて少ない遺物が出土した。</p>				

令和2年3月18日 印刷

令和2年3月25日 発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告17

第40次調査

編 集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発 行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
〒910-2152 福井市安波賀町4-10
印 刷 株式会社竹下印刷所